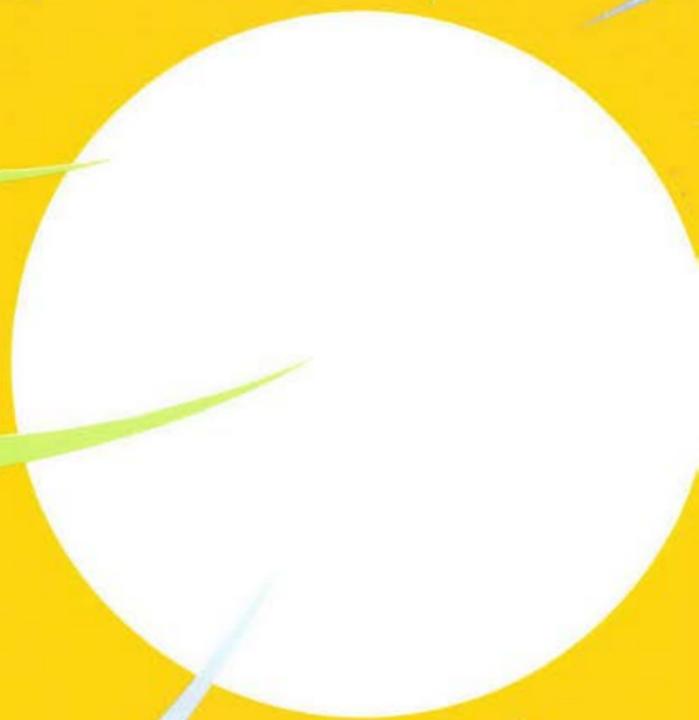


日本への回帰

第26集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰

(第二十六集)

—第三十五回学生青年合宿教室(阿蘇)の記録より—

は し が き

「東ドイツの消滅」といふドラスティックな展開を見せて、十月三日、東西ドイツの統一が実現した。前年十一月九日の「ベルリンの壁」解放から一年足らず。統一ドイツの誕生は、米ソ冷戦の終結を意味するといふ以上に、レーニンの率ゐるボルシェヴィキ派による一党独裁政権の樹立（一九一八年一月）から七十余年に及ぶソ連共産党支配の行き詰りを示して余りあるものだった。

計画経済によつて平等社会を建設するとの社会主義イデオロギーが招来したものは「経済の停滞」であり、「相互不信の蔓延」であつた。ソ連を初めとして、その後楯によつて出現した各国共産党政権の下で共通して見られた「独裁と検閲と密告の奨励、そして強制労働（収容所）」こそ、人間不信の涯しなき広がりを示してゐる。「人のところ」を見落した机上の観念論は、一見、辻褄が合ひ合理的で整合性を誇示する分だけ、人間社会の実態から遊離したものととなつてゐたのである。「人のところ」の働きは固定的な理論の枠には収まり切れない。その枠から食み出ざるを得ない人間の自づからなる動きは、常に監視の対象とされてきた。自分の父親の言動を訴へ出た小学生がスターリン治下のソ連では、大々的に誉め称へられてゐた

のである。監視は過去のことではない。例へばつい最近まで、東ドイツにおいて秘密警察(国家保安省)は六百万人もの個人情報収集してゐた。その資料ファイルを並べると百七十キロにも及ぶといふ。

いまや独裁を放棄したソ連は市場制への移行を決めてゐる(十一月十九日)。複数政党制と市場原理への移行が今後どのやうになるかはまだ未知数のところもあるが、しかし、そのやうな方針を公言せざるを得ないところまでソ連は追ひつめられてゐる。「東ドイツの消滅」は文字通りの宗主国であつたソ連といふ「親亀が倒けた」所為であつた。人口千五百万人の東ドイツに最多時五十万ものソ連軍が駐留してゐたのであつた。東ドイツが崩壊しただけでは、近々、二年弱の間に、共産党を名乗る政権が東ヨーロッパから次々に消えていつたのである。

これが、ロシア革命以降七十年余、否、明治後期から一世紀近くもの間、我国の一部インテリを痺れさせてきたマルクス主義的社会主义主義の実像なのである。

八月二日、イラク軍のクウェート侵攻(八月八日、併合を発表)に端を發した湾岸危機は、国連安保理にいふ撤退期限(ニューヨーク時間一月十六日午前零時)から十九時間後、ついに米(国を初めとする多国籍軍(二十八ヶ国)による武力制裁が開始され、新たな段階に突入した(湾岸戦争)。

この湾岸危機の發生に際して、十月中旬、政府は国連平和協力法案を国会に提出した。いはゆる「丸腰」自衛官の派遣が大真面目に考へられたのであつた。しかし、これほど国際法的常識から大きく逸脱した法案も珍しかつた。民間人であらうが一般の公務員であらうが紛争地域に送り込まざるを得ない場合、その身分を明確に「軍人軍属」として戦時国際法の庇護をうけられるやうに取り計ふのが政府の責任なのである。ところが政府の提案は、国際法上、不可侵権と戦闘員の資格を持つ自衛官をわざわざ「丸腰」の一般公務員並にしてから危険地域に派遣するといふものだつた。これでは話は諸外国と全くの逆様である（十一月十日廃案）。同じ頃、「日本の武器は、平和憲法です。社会党は、自衛隊の海外派兵に反対します」との意見広告が各紙に掲載された。これを独善的な「一國平和主義」として嘲笑することは容易なことだが、かうした「平和憲法」論者からの矛先をかはさうとして国連平和協力法案が考へられたのだから、両者は同根から発してゐたわけである。

マスコミも与野党もいまや「平和憲法」といふ四文字の前におしなべて思考を停止してしまつたかのやうだ。そもそも「平和憲法」とは何だらうか。

統一ドイツの実現が近いと予想されてゐた昨年六月頃、ある対照的な数字がヨーロッパを駆け巡つてゐた。「四十万」対「二十万」。統一ドイツの軍備の上限に関して、当事者の西ドイツとソ連との喰ひ違ひを示す数字であつた。西ドイツの「四十万」に対して、いふまでも

なくソ連は「統一ドイツ軍は最大二十万から二十五万」と主張してゐた。結局、NATOの一員として米英仏との協調を背景に訪ソしたコール首相はゴルバチョフ大統領と会談して「統一ドイツ軍は二十七万人とする」との合意をとりつけた（七月十六日）。この合意によつて、第二次大戦の敗戦国ドイツを分割占領した米英仏ソの四ヶ国が揃つて統一へのゴー・サインを出したことになつたのである。

かつて第一次大戦で敗れた際のドイツは、交戦国との講和会議（一九一九年）において、「陸軍十萬、海軍一萬五千・三十六隻、空軍ゼロといふ戦力の総枠を呑んで戦後社会に復帰してゐた。二度にわたつて敗北したドイツは、二度とも関係各国との合意といふ外からの軍備上の制約を受け容れて、平和的国際関係を回復したのであつた。

繰つて同じ敗戦国であつた我国の場合はどうだつたのだらうか。もはや多言は要しないだらう。占領下に成立してゐる日本国憲法第九条第二項の「陸海空その他の戦力はこれを保持しない」示々の文言は、「日本国民」の名を僭称し得た占領軍当局が、「日本国民の意思」として巧妙にも内から!? のものであるかの如く装つて外からはめ込んだ枠組なのであつた。当時、主権を喪失してゐた我国の手の全く及ばぬところで練られた文案が「陸軍ゼロ、海軍ゼロ、空軍ゼロ」だつた。さらにいふならば、やうやく降伏せしめた我国の武装解除の状態を将来的にも維持しようとしたところに憲法の規定があつたのである。

かうした事実から目をそらして論じられる現下の「平和憲法」論議が、リアルな国際関係を捉へ切れないのは理の当然である。国連平和協力法案の根はまことに深いのである。

「ゼロ」対「三十七万」の日独の比較は、あくまで話をわかりやすくするための比喩であつて、要点は自立意識の回生にあるといひたいところであるが、かうした基本的事実をも全く見ようとしないほどに「平和憲法」は硬直してゐる。それはかつて社会主義イデオロギーへの心酔から、スターリン治下のソ連を「ソ同盟」などと讃えたインテリのやうなものである。ただ以前のスターリン讃歌は国内の一部に限られたが、今日の「平和憲法」礼讃は国会から茶の間・教室の中まで全面的に行きわたつたかの感がある。

我国が他の国々と同様な「普通の国」になるのは何時のことだらうか。それに向けてのささやかな集ひの記録がこの冊子である。行間にこもる我々の微意を汲みとつていただければまことに幸甚である。

最後に当り、黛敏郎先生には御講義の要旨掲載を許していただいたばかりでなく、お心こもる御加筆を賜つたことを深く感謝申し上げます。

平成三年二月一日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日（八月五日）

学は極りなき所に極り出来る也

——日々に学び大きく育たう——……………神奈川県立湘南高校教諭 山内健生……………3

第二日（八月六日）

ロシアと廣瀬武夫——清く、直く、温かく、しかも力あり——

……………福岡県立福岡中央高校教諭 占部賢志……………31

今上天皇の御歌……………

第三日（八月七日）

日本文化と天皇……………九州造形短期大学教授 小柳陽太郎……………57

第四日（八月八日）

……………作曲家 黛敏郎……………83

黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に就いて……………

……………金文図書出版販売勤務 廣木 寧……………115

われらが祖国・日本を真の独立国に立て直すには

..... 国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎 139

短歌入門

短歌創作導入講義 福岡県立玄洋高校教諭 矢 永 誠 二 167

創作短歌全体批評 戸田建設(株)・開発事業統轄部勤務 青 山 直 幸 185

青年の言葉

古典を味はふことで自分自身の言葉を持つこと

..... 福岡県立須恵高校教諭 那 須 三 元 209

心を鍛へるといふこと 日本油脂(株)勤務 上 村 栄 章 219

一年の歩み 早稲田大学政治経済学部四年 鶴 野 光 博 229

合宿教室のあらまし 中央大学大学院文学研究科博士前期課程一年 土 井 郁 磨 243

合宿詠草 269

あとがき



講

義

学は極りなき所に

極り出来る也

—日々に学び大きく育たう—

神奈川県立湘南高等学校教諭

山内健生



フクジュソウ (キンボウゲ科)

はじめに——人生の眞実を衝いた山鹿素行の言葉

世界には様々の曆が存在する

「国際化」よりも「国際交流」を！

独自の元号は独立の証——元号（年号）制度略史——

憲法は元号制度を前提としてゐる

「生産された情報」（情報社会）の偏り

はじめに——人生の眞実を衝いた山鹿素行の言葉

「学は極りなき所に極り出来る也」といふ題目は、少し耳馴れない文言かも知れませんが、山鹿素行の『謫居童問』(寛文八年一六六八年成立)から拝借したものです。私が強く魅かれた一節で、いつも怠けてゐる私を時として鞭打つてくれる言葉でもあります。

山鹿素行といへば、江戸時代前期の儒学者・兵法家であり、幕府の教学であつた朱子学を批判して古学提唱の端緒を開いた人物といふことになりましたが、さらに「日用の学」といつて本当の学問は日々の挙措動作と表裏するものであると説いた学者として、今日もなほ多くの人々に仰がれてゐます。即ち、自らの半生を顧りみた素行は「学は日々是れ学也。かくの如く心を付けて思慮せば、きはまりなき所にきはまり出来る也」と述べたのです。ここでいふ「きはまり」とは到達点・終着点・結論といふことでせう。日々、至らざる自分の内面を充たすべく取組んできたが、いよいよ以つて「学問には到達点といふものがないといふ到達点に辿り達した」「学問には終着点がないといふ結論に達した」といふのです。

素行は我国の歴史の中で十指に入るほどの偉大な学者ではないかと私は思ひます。その素行にして「まだまだ取組むべきことが数限り無くあるのだ」と自らを勉励してゐるわけです。

私ごときが騏尾に附したいなどと言へば笑はれますが、「学は極りなき所に極り出来る也」とは実に深く人生の真実を衝いた言葉だなあと私は折りにふれて感心させられるのです。

ここにお集りの皆さんも、それぞれ御自分の人生を価値あらしめたいと願はれるが故に、何かを把みたいとして参加されたはずです。素行の足元にも及ばない私共ですが、右の素行の言葉を時には思ひ返しつつ、お互ひに大きく豊かに育つていきたいものだとか心から思ひます。

これからのお話は、現在の我国の状況を見て「こんなことでいいのだらうか」「これはおかしくないか」と私なりに感じて考へてきたことです。拙い話ではありますが、お聞きになつて様々の感想を抱かれることでせうが、「なるほど」と思はれた方も、「本当かしら」と疑問を覚えられた人も、ぜひとも御自分の手で調べ直して欲しいと思ひます。勉強はそこから始まるのです。私の話は問願提起にすぎません。

世界には様々の暦が存在する

さて、具体的な内容に入りますが、昨年（昭和六十四年一月七日）昭和天皇が崩御なさいまして、「平成」の新しい元号が定められました。そして、役所関係の書類から定期券まで、昭



和から平成へと紀年が変りました。元号（年号）は我々の生活にとつて身近で大切な事柄であると思ふのですが、学校の授業でもその意味や意義について語られることはあまりないやうです。それどころか「これからは国際化の時代なんだから、西暦中心で行けばいいんだ」といつた漠然とした風潮があるやうに思われます。一部のマス・メディアは意図的に報道面から元号を消去しようとしてゐます。

「国際化」の言葉が氾濫してゐる割には、現在の我国は世界の現実から目を塞いだままの、基本的事実を無視した独善が多いやうに思はれてなりません。そこでこの機会に、ぜひとも皆さんにいはゆる西暦と元号（年号）について概略ですが具体的な知識を持つていただきたいと思います。このことは延いては世界の文化の多様性に目を開くことにもなると思ふからです。

今、私共が毎朝、目にする新聞の多くが発行年月日の表示（欄外）を「一九九〇年（平成二年）〇月〇日」としてゐます。国内記事の中にも「一九四六年生れ」「九一年度予算概算要求」とか「一九七四年の台風十六号によって……」とかといふ活字が目立ちます。十五年ほど前にはほとんどなかつた書き方です。とくに目につくのは朝日新聞で、ここ数年来、できるだけ年号表示を記事の中から締め出さうとしてゐるかの感があります。かうしたマス・コミの影響だと思ひますが、元号を軽くみる傾向が生れてきてゐるやうに思はれるのです。なぜ、このやうなことになつたのでせうか。

昭和五十二年十二月三十一日付の毎日新聞（一面）の社告に次のやうな文面がありました。

欄外の年号表示 〓 ますます進む国際化に対応して、欄外表示の「元号（西暦）」を、「西暦（元号）」に改定します。

これまで「昭和五十二年（一九七七年）〇月〇日」としてきた欄外上部の発行年月日の表示を元日付の紙面から「一九七八年（昭和五十三年）〇月〇日」と変更するとの社告です（朝日新聞はこの一年前に同じことをしてゐました。読売新聞は十年遅れて昭和六十三年の元日から「西暦（元号）」としました。その結果、全国一の発行部数を競ひ合ふ朝日と読売、それら

と並んで伝統を誇る毎日の代表的三大全国紙が「西暦優先」で足並を揃へたことになり、多くの地方紙も追随しつつあります。

今日、「国際化」といふ言語は一種の流行語として、否、それ以上の権威ある言葉として、いよいよその威力を増しつつあります。現在「国際」の校名をもつ大学が十二校。十年前は二校か三校でした。短大も含めたらさらに多くなります。学部名称も国際学部から国際商学部まで六種類を数へます。学科名まで入れたら何十となるでせう。まだまだ増えさうです。国と国との関係を正面から学問的に考へることは実に大切なことです。右の校名や学部名が良くないなどは全く思ひもせんが、毎日新聞の社告のやうに「国際化」の文字が付けば全てが罷り通るやうな状況は、よく考へてみるべきではないでせうか。

「平成」元号が我国に限られたものであり、西暦が世界の多くの国々で使用されてゐることは事実であるにしても、「元号（西暦）」から「西暦（元号）」に表記を改めることが、どうして「ますます進む国際化に対応する」ことになるのでせうか。ここには西暦に対するある種の思ひ込み、西暦は世界の標準的な暦であるといふやうな独断があるやうに思はれます。

外務省の調査によると世界で西暦のみを使用してゐる国は七十余ヶ国ださうです。世界的に最も広く普及してゐて、国連を初めとする国際機関でも使用してゐるのは西暦ですが、このことは逆に八十ヶ国には西暦と異なる紀年法が、必要によつて西暦を併用しつつも、存在

してゐることを意味します。

例へば○ユダヤ曆（天地創造を紀元元年一月一日とするもので、西曆紀元前三七六一年十月七日に相当する。従つて、今、五七五一年。太陰曆で新年は太陽曆の九月か十月になる）。○イスラム曆（ヒジュラ曆ともいつて、マホメットがメッカからメジナへ聖遷ヒジマした日を紀元元年一月一日とする。西曆の六二二年七月十六日にあたる。純粹な太陰曆で一年は三五四日。三十年に十一度の閏年があつて三五五日。太陽曆の一年よりも十日ほど短かく、三十数年ごとに一年多くなる。今、一四一〇年？）。○仏曆（仏陀寂滅年を元年とする曆で、ビルマ・スリランカは西曆紀元前五四四年を仏曆元年とする。タイはその翌年を元年とする。従つて今年は二五三四年あるひは二五三三年となる）等の宗教曆はその代表的なものです。

西曆も、もともとはイエス・キリストの誕生年を元年とする宗教曆で、六世紀前半（五二五）にその元年を遡及算定したものでした。ですからキリスト教と無関係な歴史を辿つてきたところでは、当然に別の紀年法を持つことになりました。我国もキリスト教とは関係なく歩んできましたので、独自の年号を建ててきたわけです。

今年の四月十六日付の各紙をみますと、その前日の十五日、ネパール国王が国内政治の改革に関して国民へのアピールを發表したことが報道されてみました。それは恒年の「新年のアピール」の中で述べられたといふのです。調べてみましたら二〇四七年の一月一日のやう

です。ビグラム暦といひます。即ち、ネパールの「二〇四七年一月一日」は我国の「平成二年四月十五日」なのです。イランではイスラム暦(太陰暦)の他に春分を一月一日とするペルシア建国紀年に基づくジャラーリ暦(太陽暦で、いま二五四九年)といふのを併用してゐます。この他に「中華民国七十九年」とか「エリザベスII世統治三十九年」「ハイチ独立一八七〇年」といった表記もあつて、世界はまことに多様です。詳しく調べて行けばもつともつと多種多様な紀年法が存在してゐることが確かめられるはずで、キリスト教の中にあつても、キリストの降誕を十二月二十五日ではなく、一月六日とするところや一月十九日とするところもあるのです。

私がお話したいことは西暦が一元的に世界中で使用されてゐるわけではないといふことです。その西暦も前述のやうに基本的には宗教暦であつて「キリスト教徒の私的な暦(宗教学者・増原良彦氏)ですから、神主さんが地鎮祭の祝詞に書き入れたり、年忌法要の卒塔姿にお坊さんが墨書したりしたら本来的におかしなことになるのです。「時間」をどのやうに捉へて表現するか、その表記法は、重さや長さを測る度量衡と同様に、歴史的な文化の違いによつて変つてくるわけです。

とはいつても西暦が現実的に世界で最も広く用ひられて七十余国が西暦のみであり、国際機関等でも使はれてゐるのですから、西暦を軽視することはできません。適宜、使ひ分け

ばいいわけです。しかしながら、なぜ七十余ヶ国が西暦のみになつてゐるのかは一度、考へてみるべきでせう。それは西欧キリスト教国の海外進出が歴史的に旺盛であつたからに他ありません。西暦の普及と植民地の拡大はコインの表と裏の関係です。南北アメリカやアジア・アフリカなどの地域の多くで、西暦のみが使用されてゐるのは植民地時代の名残りであり、現在の独自の紀年法を喪失してしまつたことを物語るものです。

昭和から平成への改元を体験したこの時期に、我国が一三〇〇年近くの間、年号制度を維持してきてゐることの意味を考へてみることは大変に重要なことだと思ひます。

「国際化」よりも「国際交流」を！

元号（年号）制度についてお話する前に、「ますます進む国際化に対応する」と毎日新聞が読者に告げた「国際化」とは、一体、どのやうなことをいふのか少し検討してみませう。

インターナショナルライゼイション (internationalization) を辞書で引くと、「国際化」「国際管理（化）」と出てゐます。

先頃、南アフリカ共和国に隣接するナミビアが念願の独立国となりました。ここは、かつてのドイツ領で第一次世界大戦後は国際連盟の委任統治領として、さらに第二次大戦後は国

際連合の信託統治領として、長い間、南アフリカ共和国が統治してきたところです。そこを南アフリカ共和国が自由領化しようとしたことがありました。ナミビア問題の発生ですが、国連はそれは認められないとして、紆余曲折を経て国連の直轄化におくことを決議しました。かういふ場合をナミビアの「国際化」といふのです。南アフリカ共和国一ヶ国による占有状態から国際的に「共同管理する」ことを国際化といふのです。「国際化する」とは、まさに他動詞なのです。

大学対抗の競技 *intercollegiate games* を略して、イン・カレといひますが、この場合のインターと *internationalization* のインターは同系の語で、「間、相互・連合」などの意を示す接頭辞です。イン・カレは大学相互間の試合ですから、互ひに向き合つて勝利を目指してがつぷりと組合ひます。さうすると相手の強さも自分の弱点も、あるいはその逆も見えてきます。勝つために必死になるから相手が見えてくるのです。自分も見えてくるのです。国際化の時代も同じことで、国と国とが正面から向き合つて交流していくのであって、決して自らの独自性を薄めていくことではないと思ひますが、どうでせうか。互ひに違ひがあるから交流し啓発しあふものがあるのではないでせうか。元号よりも西暦を国内においても重視することが「国際化に対応する」ことではないのです。

西暦の方が国際的に通用するなどといふのでは、事大主義と同じことになります。大切な

ことは西暦を使ふとか使はないとかいふことではなく、前述したやうな世界の多様な文化的現実についてのより多くの情報(知識)を持つことだと思ひます。そして、必要によつて西暦を併記・補記すればすむことです。

国際化とは本来的に他動詞から来てゐますから、あまり使用しない方がいいと考へます。むしろ「国際交流」といふ言葉に置き換へたらどうでせうか。交流となりますと、主体と主体が相互に連携するといふ「国際」の語意がはつきりしてきます。

世界は多様です。多様なものは多様のままに見るべきです。たしかに「時間」は万国で共通でせうが、それをどのやうに捉へて表現するかは文化に拘る事柄です。時間だけでなく、「重量」であつても、その表現法は歴史的背景によつて違つてくるわけです。「距離」も「容積」も、たとへ見た目には均しく見えたとしても、その表記はまちまちです。適切な例かどうかわかりませんが、通貨の単位も国(経済圏)によつて違ひます。経済活動も総体としては文化の反映です。メートル条約があるからといつて、世界中の度量衡がメートル法で統一されてゐるわけではありません。そもそも地球上に何千もの言語があるではありませんか。

全世界を単一の尺度に統一せよといふ人がゐたとしたら随分と乱暴な話です。一種の統制主義、文化的ファシズムです。ネパール国民に向かつて、ピグラム暦は国際的に通用しないから廃止せよ!と誰が言ひ得るでせうか。ところが我国の中に「……日本でしか通用しない

いような元号は、年の数え方という観点からすると最底なものであります。だからこそ世界じゅうから消え去り、日本にだけ残っているのであります」といつた意見(元号法案に対する社会党議員の発言)が語られるのです。

一三〇〇年近くもの間続いて来た自国の伝統的制度について「最底なものである」とまで言はなければならぬとはまさに病的な心理といふべきで、その見事なまでの自虐ぶりはまことに憐れで、ほとんど正視するに忍びません。あるいは歴史に対するその傲慢ぶりは笑止千万といふべきでせうか。

日本にしかないから止めろ！といふのは実に驚くべき発想です。我々の話してゐる国語(日本語)は我々の間だけの歴史的言語です。もし国語を捨てろといふ意見を主張する人がゐたとしたら相手にする人はゐないでせう。主張する人もゐません。我々が国語を話し続けますから、外国の人達も必要に迫られて日本語を勉強してくれるのです。もし我々が国語を無価値だと粗末にし、日本語を捨てようとしたら、外国の誰が日本語を勉強する気になりますか。日本にしかないものだから止めにしたらいといふやうな発想では、他国の良さ(長所)も見えないであらうこと請合ひです。国際化の時代などと口では言ひながら、最も国際交流の場に出る資格を失つてゐるのが現在の日本人ではないでせうか。

「国際人」といふ言葉も、「国際化」と並ぶ流行語となつてゐますが、もし国際人なるもの

があるとするれば、自国の文化を身につけた真当な人で、適宜、その時々に応じて換算（繰訳）できる豊富な知識と能力を持つてゐる人のことだと思ひます。日本人とは別のところに国際人が存在し得るわけではありません。

電車に乗れば英語学校のポスターが目につきます。大いに外国語を学ぶべきです。しかし、それ以上に国語を大切にすることが大切でせう。国語の力が外国語学習の大前提のはずです。なぜなら国語で考へたり話したりする内容以上に、外国語で考へたり話したり出来るはずはないからです。

私が授業を担当している亜細亜大学のある女性英語教師が、二年間のアメリカ留学を回顧して「英語の勉強をして学んだことは数多くあります。例えば、日本語を話すときに注意深く言葉を選ぶようになったこと（というより、そう心がけるようになったこと）。外国人との考え方の違いは違いとして同質なものを発見するようになったことです」（『広報アジア』第四一―一号）と書いてゐたのを読んで、なるほどなあと思つたものでした。

独自の元号は独立の証―元号（年号）制度略史―

大分まはり道をしましたが、我国の元号（年号）制度について概略お話しします。京都産業大

学の所教授（法博）の『年号の歴史』（雄山閣刊）から多くを教へられたことを先づお断りしておきます。

大化改新の際の「大化」が我国の初の年号であることはこの日本史教科書にも記されてゐます。大化（六四五〜六五〇）・白雉（六五〇〜六五四）の後、中断し、朱鳥は元年（六八六）のみで再び中断して、大宝元年（七〇二）に制度として確立し今日の「平成」まで連続してゐるのが我国の年号です。この間、約一三〇〇年の時間が経過しました。

およそ公文に年を記すべくんば、皆、年号を用ゐよ。

これが「大宝令」儀制令に盛られた明文規定です。年号と元号とは若干異なります。一定の起算点（しとじめ元）から年を数へるのが「元号」で、その年を数へる際に特定の文字をつけて表記したものが「年号」です。我国では元が改まると必ず特定の文字を付けてきましたので「元号Ⅱ年号」といつていいのです。

年号にはその時代の理想が込められてゐることは多言を省きませんが、さらに我国の場合には政治的統一と独立の証でもあつたのです。年号制度自体は律令の制定などと同様に大陸文化の影響です。従つて「年号制度は本来的に日本のものではない。中国を模倣した外来的な

ものだ」といふ批判派の意見があります。確かに、シナの制度を受容したものではありませんが、一度としてシナ王朝と年号を同時にしたことはなかつたのです。これは実に重大なことでした。

例へば、朝鮮半島でも年号制度が建てられますが、「太和」年号を定めた新羅の真徳王が、太和二年（六四八）に唐に使節を派遣します。すると唐の太宗は次のやうに詰問しました。「新羅は大朝（唐）に臣事しながら、何ぞ以つて別に年号を称するや」と。まもなくして、太和を廃して唐・高宗の「永徽」の年号を使ひ始めるのです（六五〇）。これ以後、高麗や李氏朝鮮の時代になつても、基本的にはシナの年号を遵奉し続けることになります。新羅が自らの「太和」を廃した頃に、我国では逆に独自の年号を建て、その後も自らの年号を持続したので、このことは我国が多くをシナ大陸から学びながらも、その王朝とは政治的文化的に別個の存在であり続けた、即ち、大陸の文化を認識し摂取する主体性を確立し続けたことを意味します。我国の年号が治世理念と独立のシンボルとされる所以です。

その後のシナ王朝と朝鮮半島との関係を回顧するならば、独自の年号を建てるといふことの意義もおわかりになると思ひます。あはせて、今日、キリスト暦（西暦）のみを使用する国が七十余ヶ国にのぼるといふ世界の現実についても、それが「国際的な流れだ」などと言はずに、新たな視点から考へてみるべきではないでせうか。

此度の「平成」改元で、大化以来、二四七番目の年号となります。ひとつの年号の継続年数は五年半。どのやうな時に改元されたかといふと大体、次の四通りの時でした。

①代始改元（皇位の継承が行はれた時）

②祥瑞改元（国家的慶事が到来した時）

③災異改元（地異天変に見舞はれた時）

④辛酉・甲子改元（讖緯説によつて大変革が予想される時）

そして、「明治」への改元の際に「一世一元の制」が確立します。

是れまで吉凶の兆象に随ひ、しばしば改元これあり候へども、今より御一代一号に定められ候。（明治元年九月八日、行政官布告第一号の一節）

皇位継続による改元は明治以降の新例であつて、我国の年号制度の伝統とはいへないものだと批判が、昨年の「平成」改元の際にも一部で言はれました。しかし、むしろ話は逆で右の①②③④のうち、迷信的要素を一掃して「代始改元」の伝統だけが残されたと考へるべき

なのです。(即ち、年号制度の確立した太宝以降、代始改元が行はれなかつたことは八十三代の歴代天皇のうち五例しかありません)。

明治元年に一世一元の制が定まつた後、明治二十二年制定の皇室典範や明治四十二年公布の登極令によつて、さらに明文的に整へられました。ところが、敗戦後、これらの明文規定は占領軍の命令で廃止されて、その後は慣習法的に「昭和」元号が継続されてきました。しかし、民間有志青年のまさに血の滲むやうな努力が積み重ねられて、ついに国会を動かして「元号法」の成立をみるのです。

昭和五十四年六月六日成立・六月十二日公布の元号法は、左のやうに短いものですが、実はこれとほぼ同一の法案を昭和二十一年十一月に政府は用意したのでした。その時は占領軍の同意が得られず、陽の目を見ませんでした。

- 1、元号は、政令で定める。
- 2、元号は、皇位の継続があつた場合に限り改める。

この法律にも「御一代一号」の精神が承け継がれてゐます。いふまでもなく、この元号法は新規なことを定めたものではなく、大宝以来続く伝統を国会において改めて成文法的に

「再確認」したものでした。それさへも昭和二十七年の占領終結（独立の回復）から二十五年以上の歳月を要したのです。国会や政府の怠慢を叱咤した有志青年の奮闘ぶりには本当に頭が下がります。

憲法は元号制度を前提としてゐる

元号法に反対したのは社会党と共産党で、次のやうな理由でした。案外これは俗耳に入りやすいもので、少しく気になるところです。例へば多くの日刊紙が年号よりも西暦の方に重きを置いてゐるのも、かうした考へに影響されたもので、「国際化」に対応するとの独断的考へによるものとはかりはいへないのです。（否、一部政党の意見が新聞に影響を与へたといふよりも、左翼政党と可半の新聞は元号軽視の漠然たるムードづくりに関しては協力関係にあるとみていいのではないかと思ひます。）

皇位の継承によつて改元するということは国民主権の原理に反することは余りにも明らかであつて、憲法の名において認めることはできないのであります。（社会党議員の発言）戦後、国民主権の現憲法施行と同時に一世一元の元号制の法的根拠は失われたのです。（共

憲法とは一体、何んでせうか。憲法第一章は第一条から第八条までですが、何といふ名称になつてゐるのでせうか。憲法(国の基本法)として、一番、重要なことだから第一章に記載されたのではないでせうか。

国家の根本的あり方・骨格を定めたものが憲法です。第一章は「天皇」となつてゐます。国会で議決された法律も批准された条約も、天皇による公布の手續を経なければ効力を生じ得ません(むしろ、内閣が責任を負ふのですが、この点は明治憲法とて同様です)。

そもそも日本国憲法はいつ公布され施行されたのでせうか。「昭和二十一年十一月三日」が公布日で、「昭和二十一年五月三日」が施行日です。「一九四六年」でも「一九四七年」でもありません。当時の昭和といふ歴史的元号制度を大前提として憲法は誕生してゐるのです。よく調べてみて下さい。

現在の高校社会科資料集の中には、「一九四六年(昭和二十一年)十一月三日公布」などとしてゐるものがあります。元号を使ひたくないといふ編者の気持はわかりますが、それでも憲法公布の上論に記された「昭和二十一年」は無視できませんのでカッコ書きにしたのでせう。法律の公布や施行の年月日は厳正なるものですから、これでは改竄であり正確には間違

ひです。

日本国憲法も明治憲法と同様に「第一章 天皇」で始つてゐて、その連続性を強調した体裁になつてゐます。なぜなら、実質的には占領軍による強圧のもとに成立したのですが、「帝国憲法第七十三条による帝国議会の議決を経た帝国憲法の改正」(上論の一節)であるといふのがその建前だからです。いまもさうですが、これまで小中高と繰返されてきた憲法学習では明治憲法との相違点ばかりが強調されてきました。しかし、法的な連続性を建前とした日本国憲法ですから、その継続性の視点から読み直してみたらどうでせうか。

そして、その公布日は明治天皇の生誕を記念する「明治節」(十一月三日、いまの「文化の日」であつたことにも留意すべきでせう。この日は当時の国民の多くが佳節として心待ちに迎へた日です。国民感情に配慮した巧妙なやり方で、ちやうど結婚の披露を世間で吉日とする「大安」にもつてくるのに似たやり方です。佳き日に出されたものは「いいもの」に決つてゐるとの予断を与へることができるといふことです。憲法の施行を記念する五月三日の『憲法記念日』が六ヶ月前の公布日『明治節』に基づいてゐることはいふまでもありません。

ここで是非とも再確認して欲しいことは、憲法に記されてゐるから「天皇」の御位が存在してゐるのではなくて、歴史的に「天皇」の御位が継承されてきたから憲法の条章に盛り込まれたといふことです。当り前のことなのですが、案外、見過ごされてゐるやうに思はれま

す。そして第一章第一条には「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」とあります。一体、「統合」とはどういふことをいふのでせうか。このことに触れた社会科の授業が果して、行はれてゐるのでせうか。

統合とは端的にいつて、「政党政派が意見の違ひを超えてまとまる」「等しく仰ぐものを持つ」といふことです。国家の統一・統合（政治的安定）が確保されなければ、いくら憲法に国民の権利を書き込んだところで画餅にすぎません。統合が実現して始めて、与野党は思ひ切り議論することができ、また国民の諸権利も擁護されるです。このことは、その逆の場合を考へてみれば容易にお分りいただけるはずです。我国で「統合」のことを抜きにして憲法が語られてゐるのは、それが空気のやうに当り前のことになつてゐるからです。

私はアメリカ合衆国の国旗に対して忠誠を誓ふ。そしてまたこの国旗に代表される共和国、ゴッドのもとに万人に自由と正義を約束させる分ち難きこの国に対して、忠誠を誓ふ。

これは一〇〇以上の民族から構成されてゐるアメリカ合衆国が「ひとつ」にまとまるために如何に努力をしてゐるかを物語るものです。西ワシントン大学に交換教員として一年間、在任された亜細亜大の東中野助教から教へてもらつたのですが、日常的に小学校では始業

前にこの「忠誠の誓ひ」を皆で読み上げるのださうです。この誓ひを守る者が民族や出身国の違ひを超えて合衆国国民であるといふことなのです。このやうな小学校段階からの積み重ねによつて、移民国家・アメリカ合衆国の「統合」が図られてゐるわけです。それに比べて、我国はなんとまあ、恵れてゐることです。しかし、この点について十分な認識が日本人一般に行きわたつてゐるかといふと、必ずしもさうではありません。どうでせうか。

日本国民の総意に基づく天皇の地位と国民の素朴な親しみと敬意を結ぶきずなとして、そのシンボルをして元号が存在することは、きわめて大きな意味があると考えなければならぬと思います。

元号は自主独立日本のシンボルであり、同時に、それは歴史的に見ても、平和や民生安定を願つて定められてきたものであります。それはいまや迷信などというものはなくて、壮大な日本民族のロマンそのものであります。こうした意味からも、元号制度を維持継承するのは当然のきわみであるといふのが党は考へるわけです。

(元号法案審議の際の民社党議員の発言)

「皇位の継承による改元は国民主権の原理に反する」などといふ発言は、情報不足（無知）から来た勘違ひによるものか、偏頗な舶来的革命思想に心酔してしまつてゐる我が国の歴史的現実にも世界の多様な文化的実相にも目を塞いだ者にしか吐けない科白です。なぜなら、国家の統合が成就しなければ、「国民主権の原理」も「基本的人権の尊重」も「三権分立」も生きてこないからです。その統合の象徴として、天皇陛下を仰ぐといふのが、憲法第一章の精神なのです。元号が憲法に反するなどといふことはあり得ないことです。

「生産された情報」（情報社会）の偏り

以上、縷縷のべてきましたが、私が今回とくにお話したかったことは、我国の元号制度に対する有力な批判的見解、即ち

- ① 国際化の時代にふさはしくくない。
- ② 国民主権の原理に反する。

の二点が独断や情報不足によるものであるといふことです。いかがでしたか。

現代は情報社会であるといはれます。農業社会・工業社会がモノの生産・流通・消費の社会とするならば、現代はさらに「情報」が幅を利かせてゐるといふわけです。その情報も生産から消費までのモノの流れと同じやうに一方的に流れてゐます。数多の情報はマス・メディアによつて「取捨選択・編集」(生産)と「発信・報道」(流通)が行はれ、私共は専ら受け手(消費)です。新聞・テレビ・その他、情報産業が目立つ現代ですが、私共は「生産された情報」に日々接してゐるのです。

私の今日の話をお聞きになつて変な感じを持たれた人がゐるかも知れませんが、世間で一般的に言はれてゐることとは違ふ、学校で教はつたこととは少し違ふみたいだと。私も若い皆さんと同じ時代に生活し、同じ学校教育を受けて、同じ新聞やテレビ・雑誌などから情報を手に入れてゐます。しかし、時々「こんなはずはない」と思ふことがあります。それで興味を抱いて調べてみると、新聞などでは知らされなかつた新しい事実(情報)にぶつかることがあるのです。多少、年配になりましたので、さうした事柄が累積して今日の話になつたといふわけです。

最後に一言、情報社会の基本的問題点についてお話ししたいと思います。例へば個々の報道に誤りはなくても誤報に近い結果をマス・メディアは日々もたらしてゐるといふことです。

仮りにAとBとCの情報があつた場合、編集によつてAとCだけが流されるならば、私共にとつてはBは最初からなかつたと同じことになつてしまひます。全ての情報を報道することは不可能ですから、当然に情報の選別（編集）が行はれるわけですが、Bが没になつたことは私共には全くわかりません。結局、受け手である私共はAとCの情報で判断することになつて、いつの間にかBを無視した編集方針の影響を受ける結果になつてしまふのです。

このやうにマス・メディアと受け手の間には大きな溝が宿命的に横たはつてゐるわけですが、私共にはひたすらメディアの見識を信じる他に手立がないのです。そして、世間の話題だけでなく、教壇で語られることも多くその影響下におかれることを免れ得ないのです。

むろん巨大な情報メディアに対抗することなどたうてい不可能なことですし、現実的には多大の恩恵も受けてもゐます。ただ、例へば「元号」の扱ひ方に見られるやうに、編集の見識を疑はざるを得ない点があることも事実です。さらに経験的に確信をもつて言へることで、ここ二十年來の「中国報道」の歪みは相当にひどいものでした。外交問題にまで発展した昭和五十七年夏の「教科書検定問題」の発端は誤報でした。（誤報であつたといふ情報が必ずしもきちんと報道されてゐません）。「平和憲法」などといふのも国際関係を視野に入れる時、全くの一面的で独り善がりの呼称にすぎないことが明らかになります。これらについても述べたいのですが、今回は時間がありませんので割愛します。ぜひ、皆さんで調べてみて下さ

い。

私共を取り巻いてゐる情報の多くはメディアによつて「生産された情報」であつて、そこには偏りがあるといふことに気づいて欲しいのです。「国際化」や「民主権の原理」を口実とする漠然とした元号軽視ムードの醸成と同質のことが他にもまだあるといふことです。

情報の巨大メディアと共存する私共は、せめて自分の眼力を信じ、あるひは信じうる眼力を養ふべく「日用の学」に励みたいものだと思ひます。

ロシアと廣瀬武夫

—清く、直く、温かく、しかも力あり—

福岡県立福岡中央高等学校教諭

占 部 賢 志



シャガ (アヤメ科)

廣瀬中佐の戦死

ロシア留学

祖母の死

廣瀬のロシア観——『随感』から——

ロシアが与へた人間的なレッスン

帰朝、そして日露開戦

廣瀬中佐の戦死

今日は、今から凡そ九十年前の日露戦争開戦当初、三十六歳で壮烈な戦死を遂げた廣瀬武夫なる人物をとり上げてみたいと思ひます。彼はほんの一時期小学校の代用教員をしたことはありませんが、大半は軍人としての一生を送りました。まづ彼の戦死といふ人生の幕切れに触れてみたいのですが、お手許の資料に載せてゐる文部省唱歌をご覧下さい。

廣瀬中佐（文部省唱歌）

一、轟く雷音 飛来る弾丸

二、船内隅なく 尋ぬる二度

三、今はとボートに 移れる中佐

荒波洗う テッキの上に

呼べど答えず 探せど見えず

飛来る弾丸に 忽ち失せて

闇を貫く 中佐の叫び

船は次第に 波間に沈み

旅順港外 恨ぞ深き

「杉野は何処 杉野は居ずや」

敵陣いよいよ あたりに繁し

軍神廣瀬と その名残れど

この哀調を滞びた文部省唱歌は、廣瀬中佐が戦死するシーンをうたひ上げたもので、その場面を彷彿とさせるものがあります。たゞ、中佐は何のために、いつ、どこで如何なる行動

をしてゐたのか、「杉野」とはどういふ関係なのか、さういふディテールについて少し説明する必要があります。実は当時、中佐と同じ現場に居合せて事の顛末をほぼ正確に記録してゐた軍人がゐますので、その方の手記を参考にかいつまんでお話しておきます。

この歌の場面とは廣瀬中佐が任務とした旅順港口閉塞作戦の折のことです。どういふ作戦かと言ひますと、日露開戦に際しロシアの軍港「旅順」を封鎖してその機能をマヒさせてしまふ緒戦の戦法でした。封鎖の手段として、旅順港の入口に老朽化した船舶で乗りつけた後、爆破して沈めてしまふ。さうすれば浅瀬の入口のことであるから沈没した船体が障害となつてロシアの艦隊は出口で航行不能に陥るわけです。

この日本海軍の作戦の指揮官として部下を引き連れ湧躍現地に赴いた中佐は、作戦を九分通り終へて敵の迎撃の只中、ボートに移らうとした時、部下の杉野兵曹長の姿が見えず沈みゆく老朽船の中の甲板を幾度も声を限りに捜すのです。しかるに杉野の姿が見当りません。そこでついにボートに移つて老朽船を爆破して離れようとした矢先、敵砲弾の直撃を受けて散華したのです。あつといふ間の出来事でした。この中佐の犠牲にもかかわらず閉塞作戦は失敗に喫する。結局旅順港口を閉ざすには至らなかつたわけです。ところが部下の杉野を三度も搜索して戦死したこの指揮官の責務と情愛に当時の国民は感涙し「軍神」として敬慕するやうになり、文部省唱歌に名をとどめて国民の間に歌ひ継がれることになつたのです。



てみたいと思ひます。初めに第一の時期ですが、彼は大分県の直入町に生まれましたが、すでに八歳の時に実母を亡くしてゐます。父親は裁判官でして、明治十年に飛驒高山に転勤が命ぜられ単身赴任します。この間、西南の役の余震を受け大分の実家が焼失してしまひ、そこで父親のゐる飛驒高山に転住することになります。その後、ほんの一時期小学校の代用教員をしましたが、結局海軍兵学校に進み軍人としての道を選択してゆくのです。

さて、この廣瀬武夫とはいかなる生涯を送つたのでせうか。まづ、中佐の生涯を寸描してをきませう。彼の生涯は大きく四つの時期に区分出来るやうです。第一の時期としては、明治元年の誕生から明治二十二年の海軍兵学校卒業まで。次いで海軍少尉候補生を振り出しに、海軍少尉中の南洋航海の時期。さらに本日のテーマでもあるロシア留学の時期。そして帰国後、日露戦争劈頭で戦死するまでといふやうにとりあへず区分してながめ

さて、海軍兵学校を卒業した廣瀬は、海軍少尉に任官した後、明治二十四年九月から翌年四月までの七ヶ月間、遠洋航海に出発します。グアム、オーストラリア、ニューカレドニア、ニューギニア、フィリピンなどを歴訪する航海訓練で、彼にとつて初の外国体験と云へるものでした。実はこの長い遠洋航海の途次で廣瀬はある事件に遭遇するのです。ある事件とは何か。それはみずからの航海記録『航南私記』の中に手記として記されてゐます。

遠洋航海も終盤に近づく頃ともなりますと、いくつかのトラブルが発生してゐました。三月十三日、南緯十二度三十七分、東径百二十度四十二分の海洋を航行してゐましたが、その日早朝より悲劇が生じた。廣瀬は日誌冒頭に「ア、此十三日ハ、我軍艦比叡ノ此航海ニ於テハ、如何ナル最大悪日ゾヤ。ア、書クモ忌マハシキ悲シキコトノミ起リ、一艦上下ヲシテ一驚ヲ喫セシメシノミナラズ、再驚ヲ喫セシメタリキ。又豈ニ一驚再驚セシメシノミナラシヤ、実ニ酸鼻流涕ニ堪ユル能ハザラシメキ。」と書き出してゐます。「書クモ忌マシキ悲シキコト」とは、マラリヤに冒され病床にゐた中村与太郎二等水兵が、病床の釣床を抜け出し、破頭に身を投ずるといふ事件でした。早朝に中村二等水兵不在の報せを受けた廣瀬は部下に探索を命ずるとともに自らも艦内隈なく搜索の限りを尽くすのです。その搜索の徹底した様がこの手記の中には精細に綴られてゐて、読むものの胸を打ちます。しかし中村二等水兵の姿を発見することは出来ず、結局いくつかの手がかりから推して未明の四時から五時半の間

に病氣を苦に艦上より身を投じたであらうことが判明するのです。愕然とした廣瀬は、事の顛末を記した後、次のやうな所感を書きつけてゐます。

彼ハ不幸ニシテ病ニ罹レリ。不幸ニシテ其病ハ勢甚ダ強カリシナリ。其病ハ甚ダ激シカリシナリ。アア、彼ハ此病、此苦ニ遭ヒ、其ト者ノ言ヲ信ゼリ。其運命ノ完ザルヲ信ゼリ。ア、寧口死スルナラバ、一思ヒニ早く此病苦ヲ脱セントセシニ非ザルカ。自ラ進ンデト者ノ言ヲ証セシニ非ルカ。ア、惜ムベキカナ、痛（マ）シキカナ。中村与太郎ハ二等水兵ナリ。丈高く、色稍白く、眼明カニ、髻跡青クシテ、事ヲ為スニ実着、陰日向（カゲヒナク）ナクヨク勉ム。又一介ノ良水兵タリ。ア、出帆ノ際、三百六十一人。弘瀬ハ死セリ。松岡ハ逃レリ。今又此中村ヲ欠キ、都合三人ヲ失ヒ、総員三百五十八人トナリヌ。武夫（モリウツ）ノ目ニモ涙ノ一雫。

長い苦難を共に励んで来た部下の一水兵の心のうちをしのびながら悲痛の心情を吐露する廣瀬の文章を読んでみると、私は、先に紹介した中佐の最期の場面が浮かばずにをられません。「杉野は何処（い）、杉野は居（い）ずや」と呼号して砲弾飛びくる甲板を再度三度捜し回つて散華した廣瀬を彷彿と呼び起こすものを感じてならないのです。

海軍士官としての出発に際して遭遇した中村二等水兵搜索の時の廣瀬少尉も、十余年後の杉野兵曹長を探し求めて沈みゆく老朽船上をかけまわる指揮官廣瀬中佐も同じ広廣武夫に他なりません。

ロシア留学

時を過ててはるでも中村二等水兵と杉野兵曹長を必死に搜索する中佐の行動には一貫した心情の流れをみる事が出来ます。しかしそれはたまたま一致した行動がとられたに過ぎないといふことではないやうに思ふのです。人の一生には若き日の心情と行動が、人生の深い体験を積むことで鍛へ抜かれて後の世の行動に結実するといふことがあるのです。中佐にとつてこの二つの事件の間にロシア留学といふ豊かな体験があつたのです。まづ初めに中佐がロシアにおける五年間の留学体験を終へて帰朝する際に書き綴つたロシア生活回想の手記をみてみませう。彼の遺品のひとつに『墨革の手帳』といふものがありまして、ロシア時代の生活記録が走り書きで記されてゐます。その記録の中で異彩を放つて丁寧な筆跡の一文があります。この一文はさういふ筆跡からみて中佐のロシア留学の決算書とでも云へるものと思はれます。

たとひ異国（ちがうくに）とはいへ、四年余（よととあまり）の星月（ほしづき）を打暮せしことなれば、いとゞ名残の惜まるゝに、まして「へてゐるふるぐ」の知己（ちかひ）など、吾を視る猶をのが一家（いっか）のものゝの如く親しみしことになれば、彼の人々と立別れんも中々辛（つ）らき思あるに、彼の人々の中には涙を浮ぶるあり、小供どもには声を挙げて泣き号（なげ）ぶもありて、吾も亦彼等の情に誘（さそ）はれて、思はずも涙ぐみぬ。（中略）

武夫が久振に立帰るとて、最も待ちうけ最も悦ばるべき者は誰ぞ。噫矣、吾が尤も恋ひ慕ひ参らせし老祖母様も父上様も、武夫が露西亜に留まりし間に身（みまが）逝れぬ。吾が帰を最も待、最も悦るべき人の、今や此世に在（いま）さぬ人となりぬ。噫矣、且つ弟潔夫（日本発途以前ニ其死去ノ報知ヲ得）も吉夫も亦無き数に入りぬ。之を念ひ彼を思へば、喜ぶべき本国への首途（かみぢ）にも、示ふ可らざる感慨の胸に満ちぬ。

かゝる感慨を齎（もたら）らし、親しき人々（在聖都ノ日本人ハ殆ド総員、露人ニ）に見送られ、「にこらゑふすきー」停車場を立去りしは、正に明治三十五年一月十日あまり六日（露曆千九百二年一月三日）の夜拾時なりき。

翌る朝の十時過に墨土科（モスコ）に着き、「スラウヤンスキー、バザール」に身を投じぬ。

墨土科にては日頃の勞（耶蘇誕日ヨリ新年又暇）を休めんとせしも、夫々に手紙（今年ニ入り一）（通モ認メズ）

を送ることや切符を買ふことなどに追はれ、且つ翌日聖都より「ペテルセン」博士も来り会せければ忙敷、そこ／＼に十八日の夜九時四十分発の汽車に乗込みぬ。博士は其夕其知友の許へ武夫を誘ひ、又停車場へ見送り呉れぬ。

同博士一家の者とは武夫も至テ心易くせしが、其子息「をすかる」の吾を信ずること深く、吾を二つとなき年長の朋と頼みたりしが、聖都出発の砌見送に遅れたりとて無念がり、其父によりて永き手紙を寄せたりしが、其真心も溢る、許りにて、武夫も之に動されて幾度となく此文繰返／＼し、果ては酸鼻（なんだくし）までに至りぬ。

読んでおわかりのやうに、この記録には中佐のロシア体験がいかなるものであつたかがまざまざと滲み出てゐます。公務としての課題のみならず留学中の肉親との死別の体験とロシアの人々との出会ひと別れが哀切なまでに綴られてゐて読むものの胸を打ちます。武骨一筋といはれた中佐は以上の如き体験を積んでゐたのです。彼のロシア体験は、軍人としての見識を高めただけではなく、人生の悲哀をも見定める体験を与へてゐるのです。

中佐は嘉納治五郎の講道館に学んだ柔道四段の腕前として大層強かつたらしい。身の丈は一七五センチもあり、当時としては大男で、ひげをはやし威風堂々とした雰囲気は漂はせてゐたやうです。一方で酒もたばこも一切たしなまず極めてストイックな生活に終始した男で

もあります。さういふ生活が板についてゐたと云つていゝでせう。その中佐が外見とは裏腹に悲しみに似た文章でロシア留学を締括つてゐるところに彼独特の体験があつたことを予感させます。この手記に記された中佐の体験が如何なるものであつたか、皆さんと一緒に迫つてみたいと思ひます。

祖母の死

中佐は折にふれて誰はばかることなく「吾を生むは父母、吾を育むものは祖母」といふ言葉をお口にしてみたださうです。幼少の頃実母に死別してゐた廣瀬少年を育て上げたのは祖母の力によるものでして、ロシア留学に際しても心暖まる激励を受け出發してゐます。その祖母の期待に應へるべくペテルブルクの地を拠点にロシア研究に精出し始めて三ヶ月後、祖母死去の悲報が中佐の許へ届くのです。彼の驚愕と嘆きがいかにかりであつたかは次の父あて書簡の文面に察することが出来ます。

明治三十一年一月二十日 父あて

今夕

御凶報ニ接ス。唯々驚愕悲嘆、途方ニ暮レ申候。

御祖母様御高齢ニ被レ渡候へ共、平素ノ御健康、特ニ武夫欧州ノ首途ニ、ワレ年老ヌレバ、両三年ノ齡モ覚束ナシ。併シ汝此度国ノ為ニ、遠ク露国へ旅立ツコトナレバ、汝ノ無事御役ニ立チ帰朝スル迄ハ、決シテ死ヌマジ。安心シテ勉強セヨト、御励被レ下、武夫モ踴躍当地ニ旅立仕候。

右ノ御元元氣故、マサカ昨今御長逝ナドトハ、夢ニモ測リ不レ申キ。然ルニ今此ノ悲報アラントハ。九腸寸断、筆ニモ口ニモ尽シ難ク、痛恨罷在候。

母上様ノ御死去ノ砌ハ、未夕頑是ナキ小児ニ有レ之、充分悲嘆ノ如何程ナリシヤ、当時記憶致シ不レ申候ヘバ、実ニ今回御祖母様ノ御長眠コソ、武夫ニ生来嘗テ有ラザル最大悲痛ヲ与ヘ申候。

まことに激しい嘆きが噴き出すやうに書きつけられています。文末の「武夫ニ生来嘗テ有ラザル最大悲痛ヲ与ヘ申候。」の言葉通り、すべてを打ち捨てて泣き枯らす中佐の姿がここにあらはれてゐます。とうとう幾夜も泣き続け眼病を患ふまでに至つたといひます。かうした絶望の中佐を救つたのが同じくロシアに滞在してゐた先輩八代六郎大佐です。異郷において人生最大の悲しみに呆然自失した中佐を八代大佐は精魂こめてよみがへらせるのです。この

生涯の先輩八代大佐がゐるなければ中佐はどうなつてみたかわからない。それ程までの悲しみであつたのです。

ともかく八代大佐のなくさめで甦つた中佐は再びロシア語修得をはじめ様々の課題研究にとりかかつてゆくのです。ちやうど当時は、中国において義和団事件が発生した頃でした。中国を舞台に各国の思惑が複雑にからみ合いながら動乱の様相を呈して来ます。中佐の任務もいよいよ重要さを増して来たのでした。彼はロシアの南下政策について研究するわけですが、その際地中海につながる黒海への南進の実態をまづ調査します。クリミア半島のセバストーポリ軍港の視察をはじめ西欧各国をも歴訪するのです。一方かうした軍人としての活発な調査研究の傍らペテルブルクにおけるロシアの人々との交流も深まり、祖母を亡くした痛手も次第に癒されて来ます。

この頃父にあてた手紙に「露人ト私交上ノ関係ハ、至テ円満ニシテ、春風暖処ニ逍遙スルノ趣有^レ之、殆ド旅路ニアルノ考モ起リ申サズ候。」といふ一節がみえます。すつかりロシアの中の生活と交流に馴染んできてゐる中佐の心の風景がみてとれるやうです。

かうして本来の任務に精励し出した中佐は、軍事、政治、社会制度、風土のあらゆる角度からロシア研究に没頭することになります。その研究の成果を端的に示す資料をご紹介してをきませう。彼は研究のたびに本国の海軍省に報告書を送つてをりましたが、明治三十三年にまとめたもののひとつに『随感』と題したレポートがあります。

当時ロシアは義和団事件鎮圧後、満州に兵を駐留させ一向に引く気配をみせず、むしろ極東制圧の兆しすらみえる有様でした。わが国は当然危機感を抱き、対策を講ずる必要に迫まられます。日本国内には二つの対露戦略が論じられてみました。ひとつは「満鮮交換論」と呼ばれる協調策で、もうひとつは「ロシアを満州から排除せよ」といふ強硬策です。「満鮮交換論」といふのは、満州はロシアが管理し、朝鮮半島については日本がその保全を守り、干渉は相互にしないといふものでした。ところがこれに対してロシアは満州を手に入れば必ず朝鮮半島に南下してくる筈で、従つて満州からロシアを撤退させることが急務であるとしたのが強硬論です。

かうした対露戦略のいづれにも与みせずロシア滞在の中佐は独自の見解を展開するのです。

まづロシアの對外政策をその歴史に照してかう断じてみます。

ピョートル大帝以來、露國ノ國是ト示フベキモノハ、所謂大帝ノ遺訓ト称スル世界併呑主義ニシテ、時ニ隆替アリ。或ハ大ニ或ハ小ナリト雖モ、ソノ外面ニ伸ビントスルヤ始終一貫セリ。平和ノ宣言者トシテ後世紀ニ盛徳、否、寧^{ムシ}口御人好^{ヒトヨシ}ノ名ヲ残スベキ、現ニコライ二世皇帝ノ御代ニ於テモ、絶東ニ、波斯^{ペルシヤ}ニ、小アジアニ、ソノ政略ヲ擅^{ホシイ}ニスルヲ見ルニ、皆膨脹主義ニ非ザルハナシ。時ニ、ソノ抵抗ノ強キモノニ逢ヘバ、或ハ躊躇シ、或ハ時ニ退嬰スル如キアルモ、ソノ終局ハ進マズンバ止マズ。彼ノ水ノ浸タトシテ進ムガ如キハ、是レ露國ノ勢ナリト謂^イフベシ。

つまりロシアといふのは、對外政策に時として多少の変化があらうとも、その根底には一貫して「世界併呑主義」（膨脹主義）を抜き難く備へてゐる国だと見抜くのです。そもそもロシアはトルコの弱体を背景に黒海から地中海への南下を企ててゐました。ギリシア獨立戦争、エジプト||トルコ戦争、クリミア戦争、露土戦争と相次いで南進をねらつたのですが、結果的に挫折してしまひます。そこで極東への南進に本腰を入れるわけです。日本への三国干渉を主唱し、干渉が成功するや東清鐵道敷設権を獲得したのも黒海での失敗を極東で返さうと

するもくろみだつたことはいふまでもありません。そしてさらに虎視眈々と南進を狙つて朝鮮半島をうかがひつゝ、あつたわけです。「或ハ躊躇シ、或ハ時ニ退嬰スル如キアルモ、ソノ終局ハ進マズンバ止マズ。」と中佐が洞察した通りの様相がロシアの動向には歴然とあらはれて来たのです。ところがそのロシアにとつて不都合な相手として立ちはだかつて来るのは、ほかでもないわが国日本の存在となるに相違いないと中佐は述べ、さらにロシアとイギリスの敵対關係に言及して次のやうにいふのです。「露英ノ關係ハ已ニ世ノ知ル処ナリ。ソノ敵視スル英國ガ絶東ニ於テ、最モ優勢ナル海軍ト陸軍ヲ有スル日本ト手ヲ連ネ、シナ問題ヲ解釈セントセバ、問ハズシテ露國ノ勢力ヲ挫キ、ソノ進運ヲ阻止スルノ挙ニ出ズルヲ知ル。露國ノ之ヲ忌ムヤ、實ニ想像ニ余リアルモノト云ツベシ。」すなはち日英兩艦隊が連帶して海上を封鎖すれば、ロシアの旅順、ウラジオストクへの海軍増派は不可能に陥つてしまふ。さういふ懸念を当然ロシアは抱いてゐる筈だといふわけです。そしてペテルブルクにあつてしばしば耳にする極東への陸兵十五万人動員の情報に、その増派のねらいを「ソノ対スル処ハ重ニ我日本國ニ在ルナリ。我日本ノ態度ニ就テ、不安ナレバナリ。」と見抜くのです。ニコライ二世は日本など眼中にないそぶりをみせてゐるが、とどのつまりは日本の動向を一番恐れてゐるといふわけです。従つてロシア側もしきりに言ひ始めてゐる「滿鮮交換論」は純然たる日露協調策ではなく、体制が整ふまでの戦略に過ぎず、体制さへ整へば牙をむくであらうとい

ふリアルな洞察を中佐は開陳してゐます。そこで中佐はロシアが日本の動向を恐れてゐる今こそ、「一日モ早く朝鮮問題ヲ決シテ、全ク我勢力ノ下ニ置キ、他ヲシテ一指ヲ触ルルコトヲモ得セシム可ラズ。」と提言するのです。満州におけるロシアの体制が未完の今こそ朝鮮問題の解決に絶好の機会であるといふのです。ロシアの弱点を正確に見据ゑた策であり、当時の協調策と強硬論を綜合した外交観と云へます。

ロシアが与へた人間的なレッスン

かうしてロシア研究の成果を得つゝ、あつた明治三十四年、再び中佐のもとへ一通の悲報が飛び込んで来ます。それは父の訃報でした。中佐の悲嘆は察するに余りありますが、しかしここでご紹介しておきたいのは中佐の悲しくも豊かな心のひろがりを示す書簡です。悲報に接した中佐はしばらくして廣瀬家に長く仕へるおかつといふお手伝ひさんに次のやうな手紙を書き送つてゐるのです。

明治三十四年六月七日 有巢かの（かつ）あて

最モ目ヲカケ使ヒ被^レ下シ、祖母様モ御逝^(ナクナリ)去^レ被^レ遊、最モ其成^(オヒクダシ)長ヲ榮^レミシ芳夫モ黄泉^(ヨミヅ)へ旅立チシニ、又モヤ最モ力ニ思フ父上様ト相別^レ候次第ト相成リ、貴様ノ力落シモ嘸々ト察ルニ余リアリテ、思ハズモ涙ヲ催シ候。去^レト飛驒以來ノ古キ昵懇^(ナジミ)トシテハ、於登代モアリ、斯ク云フ武夫モアリ、兄勝比古様、衛藤叔父様モ其時代ヨリ御承知ノ筈、且ツ母上様ニ於テモ、已ニ拾数年御使ヒ被^レ遊シ間柄ナレバ、必ズ必ズ力ヲ落サズ、不^レ相変^レ奉公專一ニ相勤^メ、吾々共ニ代リ、当時尤モ便ナキ母上様ニ册^(カシ)キ参ラスベシ。尤モ奉公人ノ分限ヲ忘^レズ、従順ニ、万事万端母上様ノ御指揮ヲ受ケ、相逆ラハザル様心掛クベキモノナリ。貴様が当年迄広瀬家ニ対シタル忠勤ニ向ツテハ、武夫モヨク承知ナレバ、貫様ヲ見棄ル様ナルコトハ決シテ致スマジク候ヘバ、必ズ必ズ安心シテ、祖母様、父上様御存命ノ如ク相働キ可^レ申、我^(ワガママ)儘ナル仕打シテ皆々ニ厭ハレザル様、心掛可^レ然ト存候也。

中佐は自己一身の悲嘆にうちひしがれてはゐません。長く仕へた一家の主が亡くなつてわが身の処し方に寂寥を覚えてゐるであらうお手伝ひさんに対して深切極まりない手紙を書いてゐるのです。「貴様が当年迄広瀬家ニ対シタル忠勤ニ向ツテハ、武夫モヨク承知ナレバ、貫様ヲ見棄ル様ナルコトハ決シテ致スマジク候ヘバ、必ズ必ズ安心シテ」と呼びかける中佐の

言葉にこの老ひたお手伝ひさんがどれほど力づけられたことか、想像に難くありません。

この老女に寄せる中佐の豊かな心情はいかにして育まれたものであらうか。祖母の死に対してあれ程他の者を顧みることなく独り嘆くのみであつた中佐が、同じ深さの悲しみにありながらも心を閉ぢずにお手伝ひさんまでにもかくの如き行き届いた優しさあふれる手紙を綴る。この胸打たれる行為に中佐の豊かな成熟を覚えざるを得ません。この豊かさは、女性の心の機微が理解し得て初めてなせるものでせう。名著『ロシヤにおける廣瀬武夫』の著者島田謹二博士は、この点について「これまで女が眼中になかつた廣瀬にロシヤが教えたいちば人間的なレッスンの結晶をこの手紙に見るようである」と指摘され、さらにロシヤの女性との交流をその背景にあげてをられるが、さういふことは充分に考へられるのではなからうかと思ひます。

先程、祖母の死に対する嘆きから立ち直つてゆく中佐に触れた折紹介したロシヤの人々との交流を示す「春風暖処ニ逍遙スルノ趣有^レ之、殆^ト旅路ニアルノ考モ起リ申サズ候。」といふ一節には、実はアリアズナといふ女性との出会ひが含まれてゐるのです。アリアズナといふ女性は、中佐がロシヤで家族的つきあひをした海軍少将コバレスキー一家の娘で、当時十八歳ぐらゐでした。

彼女との交流の具体的な様子は今は知る由もありませんが、しかし残つてゐるわずかの資

料を読むだけでも二人の間にめばへてゐた思慕の情らしきものがほのみえます。或る時アリアズナから誘はれるまゝに中佐はプーシキンの詩を漢訳して彼女に渡してゐます。

夜思 「プーシキン」原作

四壁沈々夜 四壁 沈々の夜

誰破相思情 誰か破らん 相思の情

懷君心正熱 君を懷うて心まさに熱し

嗚咽独吞声 嗚咽して独り声を吞む

枕上孤燈影 枕上 孤灯の影

可憐暗又明 憐れむべし 暗くまた明るし

潺湲前溪水 潺湲せんかんたり 前溪の水

恰訴吾意鳴 恰あたしも吾が意を訴えて鳴く

恍乎君忽在 恍うとして君忽ち在るがごとし

秋波一転清 秋波 一転して清し

花顔恰微笑 花顔 恰も微笑して

似頷吾熱誠 吾が熱誠に頷うなずけるに似たり

吾身与吾意 吾が身と吾が意と

唯一向君傾 ただひたすらに君に向つて傾く

もちろんこの詩はプーシキンの訳文ではあるにしても、「花顔恰微笑」と訳す一瞬に中佐の眼前にアリアズナの面影が浮かばなかつた筈はあるまいと思ふのです。あきらかにひとりの娘に己の心が動くさまを感じとつたことと思はれてなりません。そしてまたアリアズナが自分に寄せるかれんな思ひをもあらためて知つたことでせう。中佐の体験のひろがりがしの

ばれるやうです。

おかつにあてた書簡にみられる女性の心のうちをねんごろにはげます中佐の優しさにも相ひ通ずる心情ではないでせうか。ロシア女性との交流が島田博士の言ふ如く人間的なレッスンを廣瀬武夫に与へたと云つていいやうに思ふのです。

帰朝、そして日露開戦

さて中佐の許に明治三十四年十月ついに帰国命令が下ります。翌三十五年一月いよいよペテルブルクを発ち、シベリア經由で帰朝の途につくわけですが、その際認められた所感が先に挙げた『黒革の手帳』の手記なのです。「春風暖処ニ逍遙スルノ趣有^レ之、殆ド旅路ニアルノ考モ起リ申サズ候。」と記した人々との惜別の情はことのほか深い。

明治三十五年三月東京に帰着するのですが、中佐のロシア交流の体験とは裏腹に日露の対決は避けられない事態を迎へてゆきます。この頃緊迫した推移の中でロシアのウイルキツキイといふ青年から一通の手紙が中佐の許へ届きます。ウイルキツキイなる青年はやはり中佐が家族的交流を持つたパブロフといふ医学博士の息子でした。中佐がロシア留学時代は海軍士官候補生だったので、その後海軍少尉に任官し、ロシア最強の軍艦「ツェザレーヴィ

チ」に乗り組み皮肉にも旅順に入港し日露決戦に備へるといふことになつたのでした。ウイルキツキイは中佐を日本語で「タケ兄サン」と呼んで兄の如く慕つてゐたといひます。そのウイルキツキイから親愛をこめた手紙が寄せられたのです。それは開戦に先立つ一ヶ月前のことでした。中佐は対峙する羽目になつたのですが、わが弟の如く思はれてならない彼に返信を出します。これは資料として残つてをりませんが、手紙の内容を海軍の同僚に中佐が語つてをりまして、その同僚が回想談の中に記録してゐます。

今度、不幸にもあなたとの国と戦うことになつた。何ともいいようがないほど残念である。しかし、これは国と国との戦いで、あなたに対する個人の友情は昔も今も少しもかわらない。いや、こんな境遇のうちにいるからこそ、却つて親しさも増してくる。平和が回復するまでは、かねて申上げたように、武人の本懐をお互いに守つて戦い抜こう。げんに武夫は九日のひるには戦艦「朝日」の十二インチ砲を指揮して、旅順沖の貴艦隊を熱心に砲撃した。それさえあるに、今度は貴軍港を閉塞しようと願ひ、「報国丸」を指揮して、今、その途上にある。さらば、わが親しき友よ、いつまでも健在なれ。

これは中佐がロシアに発信した最後の手紙であります。かうして廣瀬武夫は旅順港口の閉

塞作戦に赴くことになりました。そして冒頭に紹介したやうな最期を遂げるわけです。

廣瀬中佐戦死の報はただちにロシア内にも報道されたやうです。この報せを知った廣瀬に深く関つた人々は戦ひを越へて深い悲しみに打たれたことと察せられます。『黒革の手帳』に出て来た医学博士ペテルセンのひとり娘マリヤもそのひとりでした。彼女は交戦中であつたためドイツ語で手紙を認め、ドイツ經由で広瀬の兄嫁にあてて弔意を伝えて来たのです。小堀桂一郎氏の訳がありますのでご紹介してをきます。

尊敬する奥様！ あなたにお手紙をさしあげることはずでに長い間私の願いでございました。それもただひとえに、かけがえのないお方をおなくしになつて沈痛な嘆きに沈んでいらっしゃるあなたのことを、私どもが本当に心からの御同情をこめてお慰び申上げているということをお伝え致したかったからでございます。弟御のタケオサンの御逝去は、私どもにとりましても大きな喪失でございました。私どもは深い悲しみをあなたとともに致しております。あの方は私どもにとつて決して忘れることのできない、なつかしい、誠実なお友だちだったのでございますから。あの方の思い出は私ども心の中に恒に生きつづけているのでありましょう。私どもはあの方の情け深く誠実なお心を決して忘れることはございません。あの方は本当に偉大で、高貴な、たぐい稀なお方でございます。（中略）御存

知のことかと存じますが、奥様、タケオサンは殆ど私どもの家族の一員だったのでございます。そして御自身でもたしかに私どもの家を居心地よく感じておいででした。(中略)それにしまして、おそらくは御家族の方々にとって唯一の慰めとなる思いは、あの方が、御自分からお望みになっていた通りの御立派な最期をお遂げになったということでございます。あの方は、愛する、尊い国のために英雄として死んでゆかれました。そしてあの方の思い出は永遠に、歴史の中に、御家族の心の中に、又多くの友の心のなかに生きつづけてゆくことでございます。それでは、奥様、どうか私の御挨拶をおうけ下さい。そしてあなたのお嬢様にくれぐれもよろしくお伝え下さいますよう。お嬢様のことは私どもの忘れることのできぬお友達が、くりかえし私どもに語っておきかせ下さったものでしたから。

深き敬意を以て

マリヤ・ペテルセン

サンクト・ペテルブルク

一九〇五年一月十五日

今日の私どもは軍人と云へば、何かしら遠ざけてしまふ傾向があります。しかし軍人であ

れ、文人であれここに見てきたやうにその人生をしかとみつめてみれば人の胸を打つドラマがひそんでゐます。廣瀬武夫は三十六歳で生涯を閉ぢましたが、彼の遣した手紙は二〇〇〇通にもほります。そこに書き留められた言葉の数々からわすかばかりとり上げたわけですが、それでも以上紹介したやうな人生の豊かで深い体験がキラリと光つてゐます。ロシア留学を中心とするこれらの体験は、「杉野は何如いづか杉野は居すや」と捜し求めて悲業の戦死を遂げるあの中佐の最期の行動に結実してゐるに相違ないのです。あの文部省唱歌に親しんだ日本人の多くは、直観的にさういふ人生の真相をつかんでゐるに違ひないのです。副題につけました「清く、直く、温かく、しかも力あり」といふ言葉は、廣瀬中佐がロシアからの帰途に立ち寄り、しばらく交遊したウラジオストクの日本貿易事務官川上俊彦の妻常盤のメモワールに出てくるものです。ロシアと廣瀬武夫との間の深い交渉は、常盤が評したこの一句にあらはされる如き男子を育てたのです。

今上天皇の御歌

九州造形短期大学教授

小柳陽太郎



ツユクサ（ツユクサ科）

歪められた報道

幼少のころの御歌

「船出」から御成婚まで

宗教、神秘の世界

沖縄に寄せられる御心

肉親の情

歪められた報道

昨日、合宿の導入講義で山内先生がおつしやつたやうに現代は情報化時代とは言はれてをりますが、常に偏つた、独善的な情報が巷にあふれて、人々の心を曇らせてゐる。本当に残念なおもひがいたします。これからお話し上げようとする天皇の問題などその最たるものと言つて宜しいかと思はれます。これだけ皇室のこと、天皇のことが語られながら、肝腎の天皇陛下御自身の御心は殆んど国民に伝えられてゐないのではないか。

例へば丁度一年前、平成元年の八月四日、天皇、皇后両陛下が記者団と御会見になりましたね。ところがその翌日の新聞には、すべて「天皇は憲法を守ると言はれた」といふことが横文字で大きく印刷されてをりました。たしかに天皇はさう仰言つた。「憲法は国の最高法規ですので、国民とともに憲法を護ることに努めていきたいと思つてをります」と仰言ひました。憲法についてどう思ふかといふ質問が出された時には、天皇の御立場としてさうお答へになるのは当然でせう。しかしそのあとで、陛下は非常に大切なことを補足していらつしやう。それは「しかし、天皇は憲法に従つて務めを果たすといふ立場があるので、憲法に関する論議については言を慎みたいと思ひます」といふお言葉でした。これは正に問題の核心に

ふれたお言葉であつて、憲法が正しいとか間違つてゐるとか、改正すべきだとか否とか、さういふ議論についてはそれぞれの考へもあるだらうし、それは大いに議を尽してほしいが、自分の立場としては、そのことについて発言することは慎みたいと仰言つてをられるのです。このお言葉を正確に読みとつてさへいけば、天皇は世にいふ改憲か護憲か、といふ対立の中で、護憲の立場をおとりになつたといふことに決してならない。それを「天皇は護憲を表明された」と見出しをつければ、天皇の御心は全く国民に伝はらない。天皇がおつしやる「憲法を守る」といふことと、巷の護憲派の「護憲」とは全く次元が異なるのです。

この他にもその時の陛下や皇后陛下の御言葉で是非伝へてほしい言葉が沢山あつた。それを殆んどどの新聞も報道してゐないのですね。例へば「即位されるにあたつて心に期された点がおありでせうか」とか「今後の皇室のあり方について」といふやうな質問が出されたのですが、それに対して天皇陛下は

「憲法に定められた天皇のあり方を念頭に置き、天皇の務めを果たしていききたいと思つてをります。国民の幸福を念じられた昭和天皇を初めとする、古くからの天皇のことに思ひをいたすとともに、現代にふさはしい皇室のあり方を求めていきたいと思つてをります」とお答へになられました。遠い遠いにしへから続いてきた天皇のあり方、それはたゞ国民の幸福を念じたまふ一筋の道であつた。その深い歴史に、いま陛下は心を馳せてをられるのです。



この同じ質問に対して皇后陛下は「陛下の御即位後、先帝陛下の御霊をお偲びする諒闇の一年でもあり、この大切な時期に過去のことをよく学び、これからも自分のあり方について考へたいと思ひます」と仰言つたのです。私はこのお言葉の、「先帝陛下の御霊をお偲びする諒闇の一年」といふ一節に深く心をうたれました。浮ついた世の風潮のたゞ中で、両陛下は、この諒闇の日々を実に慎み深くおすごしになり、その間、遠く歴史の彼方に思ひを寄せてえられる。記者団の上つ調子な、物欲しさうなあのざわめいた世界と、いかに異つた厳肅な世界に両陛下は生きてをられるのか、私は本当に深い感動をお

ばえました。

このほか、会見の最初の質問として昭和天皇の崩御のこと、天皇のあり方などについての感想を求められたとき、天皇陛下は「お顔を見つめながら、とうとう崩御になったことに深い感慨を覚えました。皇位を継承したことを心に刻んだのはひとときしてからのことです。天皇のあり方については、(昭和天皇に)お接しした時に感じたことが大きな指針になつてゐると思ひます。人への思ひやりなどについても学ぶことが多くありました」とお答へになつてをり、皇后さまは「お長かつたご不例の日々をお治りになるといふ希望を捨て去ることが出来ませんでしたので、崩御は本当に悲しいことでした。その時、ある思ひが去来したといふよりも、おそばで過ごさせていたゞいたかけがへのない日々が、とうとう終わりになつてしまつたといふ寂しさだけを感じてをりました」と、しみじみとしたお言葉で答へていらつしやいました。「おそばで過ごさせていたゞいた、そのかけがへのない日々がとうとう終わりになつてしまつたといふ寂しさ」——本当に身にしむお言葉ですね。しかし当日の新聞はそのことについて遂にふれることはなかつたのです。

このあふれるやうな皇室ニュースの中で、実は天皇御自身の御心については殆んど報道されてゐないといふことがおわかりいたゞけたと思ひますが、さういふこともふくめて、今日は、今上陛下がこれまでに御発表になつた約二百四十首ほどのお歌の中から、それぞれの時

代を代表するお歌を選んで、そのお歌を通して、陛下の御心を、皆さまとご一緒にお偲びしていききたいと思つてをります。

幼少のころのお歌

最初に御幼少のころのお歌をご紹介しておきませう。陛下は昭和八年にお生まれですが、ご存知のやうにそのころから、戦争が激化、昭和十五年、学習院の初等科にご入学になつたその翌年大東亜戦争が勃発するのです。そして六年生におなりになつた五月、沼津に疎開、七月は日光に、さらに奥日光にお移りになつてそこで終戦をお迎へになります。そのころおよみになつたお歌

見わたせばあやめ虎の尾こきまぜて戦場ヶ原に夏ぞ来にける

僅か十三歳、満年齢では十一歳の少年のお歌ですが、その堂々たる格調「見わたせば」といふ初句からしてまさに王者の風格を感じさせるお歌といふべきでせう。その戦場ヶ原からさらに奥にはいつていきますと、湯の湖といふ湖があるのですが、そこに疎開されてゐた時

陛下は

いつの間に色づきたるか落葉松からまつの葉にやはらかに雨ぞ降りける

とよんでをられます。結句が「夏ぞ来にける」「雨ぞ降りける」といふ同じ構成ですが、こちらは前の気迫のこもつたお歌に比して、実にこまやかなお歌ですね。自然の推移に深く心をとめてをられる、少年の歌とは思へない格調があると云へませう。

この後陛下は東京にお帰りになつて赤坂離宮にお住まひになるのですが、その頃のお歌
ぬばたまの夜は来つれども空埋む鳥の群のいつ寝つくらむ

日は暮れて黒々とした夜になつたが、あの空を埋めてゐた鳥は何時時どきどきに帰るのだらう。——このお歌の背景には焼け野が原になつてしまつた傷々しい戦災の東京の街がある。自分の家を失つた無数の人々の嘆き、悲しみをこのお歌のバックに置いてみると、何か象徴的なおもひさへた、へた、すごいお歌だと思はれてくるのです。

その翌年、皇太子殿下のお側にお仕へしてゐた内舎人うちしやにん（うとねり）の信国といふ人が退官す

る、その時のお歌

うちよする波のごとくに思ふかな今は信国いかに居るらむ

親しく自分に仕へてゐた内舎人をお慕ひになる御心、それを「うちよする波のごとくに思ふ」といふのは何と大膽率直な、しかも純真な御表現であらう。「大海の磯もとゞろに寄する波」といふ、あの実朝のうたさへ思ひおこさせるほどの、力に満ちた、情感あふれるお歌だと思ひます。かういふ大膽なお歌と一緒に、その二年後ですが

春の日を受くる刈田の薄氷あわをふくみて白く光れり

といふやうな実にもつを見る目のたしかな、観察の行き届いた歌もおよみになつてゐることもあはせて心にとゞめておくべきでせう。陛下は学問的であることを非常に大切にされる。それは皇室の伝統とさへ云つてをられるのですが、感情に走らず、自分の目でしっかりと確かめて一歩々々ふみしめて歩いてゆく、さういふ人生態度をこのやうな歌をおよみになることによつて鍛へてこられたのではないでせうか。

昭和二十六年五月十七日、お祖母さまの貞明皇后が狭心症の発作で、急におかぐれになつてしまひました。その時のお歌

御園生みそのふの草木は青くにほへども音しづまれるとののきぎはし

今一度あひたしと思ふ祖母君に馬の試合の話をもせず

新緑の色も美しいお庭の草木、初夏の日に輝くまぶしいほどの自然、だがそれと対照的に、今、お祖母さまは突然世を去つてしまはれた。皆のみるところから一人離れて御殿の階段のかたはらに佇んでをられる御姿、あたり一帯を占める静寂。次のお歌は楽しみにしていらつしやつた馬の試合のこと、早く御耳に入れたかつたけれども、今となつては叶はぬこととなつてしまった。一寸した思ひ出なのでせうが、それがいまふきあげるやうに陛下の御心につきあげてくる。一首は静寂な自然の描写、一首は心情をそのまゝに吐露されたお歌ですが、あはせて実にすぐれた挽歌であると思はれます。時に陛下は御歳十九歳、満年齢で十七歳であられました。

「船出」から御成婚まで

翌昭和二十七年十一月、陛下は成人式、立太子礼をお挙げになり、皇太子のみ位におつきになるのです。折しもサンフランシスコの講和条約が締結されて、長かつた占領の時代は終りを告げました。そしてその翌年、昭和二十八年三月三十日、皇太子殿下は昭和天皇の御名代として、イギリスのエリザベス女王の戴冠式に出席のため、ヨーロッパへの旅に旅立たれるのです。その年の一月行はれた歌会始めの御題は「船出」でしたが、その折におよみになったのが次の一首でした。

荒潮のうなばらこえて船出せむ広く見まはらむとつくにのさま

荒潮といふ言葉で思ひ出すのは大祓の祝詞の中に出てくる「荒潮の潮の八百道の、八潮道の潮の八百会」といふ一節です。その古代の、雄大なスケールと、海の動きを一点に凝縮したやうな言葉のもつ力とがここにこめられてゐる、その荒々しい渦の真只中に自分はこれから出てゆくのだ、そしてこの目で世界を見てくるのだ、その若々しい力が漲るやうなお歌で

すね。

たゞこの御歌は三句目ではつきり切れてゐる。一首が二文になつてゐる。歌は一首一文が原則で、このやうに二つに分れる場合は、よほど大きな力が全体を統一しなければ一首は二つに分裂してしまふ。しかし、この歌では「船出せむ」「広く見まはらむ」といふ、たたみかけるやうな潑刺とした意志が、その分裂を回避して、実に力のこもつた歌となつてゐる。日本の船出を全身に背負つていかれる若き皇太子の力強い意志力が、この歌を統一に導いてゐるのです。

かうして旅立たれた陛下は見事にその責を果たして十月十二日、故国の土を踏まれるのです。

半年の旅より帰りいま望む雲の合間の日の本の土

「雲の合間の日の本の土」——その「の」の連続の中に、日本の国土に吸ひ寄せられるやうな、日本の国土がぐんぐんと目の前に迫つてくるやうな、さういふはづむやうなよろこびが伝はつてくる御歌です。その時、父君昭和天皇は次のお歌をよんでをられます。

皇太子を民の旗ふり迎ふるがうつるテレビにこころ迫れり
すこやかに空の旅より日のみこのおり立つ姿テレビにて見し

天皇がお子さまを「ひのみこ」と呼んでゐらつしやるのが心にとまります。そこには天皇のお子さまにしてお子さまに非ず、いつの日にか次の御位をお継ぎになる「ひのみこ」なのです。そこには常に厳肅な日本の国の姿がある。戦後の苦しい試練に耐へぬいた日本、その日本の国のこれからの運命が開けて行くか否か、それはすべてこの皇太子殿下の御外遊にかつてゐる、天皇はさういふ切実なおもひで御覧になつてゐたのでせう。さればこそ、その「ひのみこ」を、数多くの国民が日の丸の旗を振つて迎へる姿、そこに新生日本の第一歩を御感じになつたのです。「心せまれり」といふ、昭和天皇の御歌の中でも類稀れな表現を敢へなされた天皇の御心を、深くお惚びすべきだと思ふのです。

それから六年、陛下は昭和三十四年四月、正田美智子さまとの御成婚の日をお迎へになります。

ほの暗き神の御前に告文を開きゆく手のかすかにふるふ

はりつめるやうな緊張、厳肅な御姿が、そのかすかな手のふるへの中に実によく表現されてゐる。あの御成婚のあとの華やかなパレード、国民のよろこびの声にお応へになるお二人の姿、それは私たちの目に焼きついてはなれない新生日本の象徴的なお姿でした。しかしその華やかな裏に、神様の前で告文をお読みになる時の、この厳肅な世界があつたといふことを私たちは心の奥深くしつかりとどめておかなければいけないのです。そこに日本の皇室独自の何とも言へない深い宗教的な神秘さ、いはゞ奥行きを私たちは心をこめてお慰びすべきだと思ひます。

宗教、神秘の世界

その御成婚の二年前、昭和三十二年の歌会始の折、陛下は「ともしび」といふ題で次の一首のお歌をよんでをられます。

ともしびの静かにもゆる神嘉殿琴はじきうたふ声ひくく響く

神嘉殿といふのは皇居の中にお祀りしてある「宮中三殿」の西北にあつて、毎年行はれる

新嘗祭、その年初めてとれたお米を天皇が神々と一緒にお召しあがりになるといふ、年一度の大切な儀式ですが、その新嘗祭にお用ひになる御殿なのです。従つてこのお歌は、その前年の十一月二十三日、新嘗祭の折におよみになつたお歌でせう。その厳肅な神事の折に琴が奏せられるのです。琴を奏しながらうたふ声が低くひゞいてくる。「琴はじきうたふ声ひくく響く」、2、3、3・2、3、3といふ独自のリズム、しかも「うたふ」といふのは次の「声」を修飾するのでせうから、さらに入りこんだ構成になつてくる、そこには琴の音と神樂の歌声が、微妙に入り混りながらはりつめるやうな緊張をた、へた、時の流れがある。陛下には昭和六十一年、美智子妃殿下と御共著の『ともしび』といふ歌集をお出しになつてゐるのですが、その歌集の題の「ともしび」は、このお歌の題からおとりになつたものではあるまいか。とすれば、陛下の歌の世界の中心、といふことは、陛下の御人生観の中心に、この神嘉殿に静かに燃えるともしびがある、さう考へてもいいと思ふのです。この深い神秘の世界、それを陛下の御心の奥深くお偲びすることが出来なければ、陛下のお姿はわからない。ここには軽薄なジャーナリズムの報道からは想像も出来ない世界があるのです。

さらに昭和四十五年、陛下はこの新嘗祭での御体験から、改めて七首の連作をよんでられます。私はこのお歌を、いま申し上げた『ともしび』といふ歌集の中で初めて拝見いたしました。実に深い感動をおぼえました。時の流れに沿ひながら、新嘗祭全体を御表現になつた

その構成といひ、緊張した調べといひ、陛下のお歌の中の代表作と申し上げてもいいかと思ふのです。

新嘗祭

松明たいまつの火に照らされてすのこの上歩を進めゆく古思いにしへひて
新嘗にひなめの祭始まりぬ神嘉殿ひちりきの音静かに流る

ひちりきの音と合せて歌ふ声しじまの中に低くたゆたふ

歌声の調べ高らかになりゆけり我は見つむる小さきともしび

歌ふ声静まりて聞ゆこの時に告文つげぶみ読ますおほどかなる御声

拝を終へ戻りて侍るしばらくを参列の人の靴音繫し

夕べの儀ここに終りぬ歌声のかすかに響く戻りゆく道

一首目の「古思ひて」の「いにしへ」は単なる過去といふのではなく、やはり古代の世界、神代の世界でせう。とすればいま簀すの子の上に歩を進められるお姿、それは高天原の世界、神々の世界に一步步々近づいていかれるお姿ではないか。

二首目の「ひちりき」といふのは横笛の一種、その「ひちりき」の吹奏によつて、新嘗祭

の幕は開くのです。その「ひちりき」の声と一緒に神聖の歌声がしま——あたりをこめる静寂の世界の中に静かに流れはじめ。新嘗の祭りといふのは夕べの儀と暁の儀の二つに分れてゐまして、このお歌によまれてゐるのは「夕べの儀」、従つて時刻は六時すぎ、晩秋の冷い宵闇の中に、いま新嘗の祭ははじまらんとしてゐるのです。この三首目の最後の「低くたゆたふ」といふのは不思議な言葉ですね。何かしんしんとした、人一人ゐない海辺で岸辺にさーつと打ち寄せられる波、その波がまたさーつと引いてゆく、さういふ感じが目に浮かんでまゐります。

四首目、次第に高まつてくる歌声、祭りの中心に近づいてくる高揚感、その中で陛下の目は一点の小さなともしびに集中する。この高鳴つてくるおもひと、一つに凝縮してゆく力と、この一首にはその両者の激しい緊張、今にも分裂しさうな、崩れてゆきさうなギリギリ一杯のはりつめたおもひがある。それが次の五首目の、神前に告文をおよみになる父君天皇陛下の「おほどかなる御声」によつて救はれ、統一を与へられるのです。高なる歌声が静まつてゆく「この時」、その瞬間、すべての空間、時間が一点に凝縮されるやうな一瞬、その時、天皇の御告文をおよみになるおほどかな声が闇に閉ざされた神殿の中からきこえてくるのです。四首目の切迫感を五首目の統一感、上りつめた緊張が大きな世界に掬ひとられて、静かに緊張はとけてゆくのです。

そのあといくつかの儀式が行はれて、皇太子殿下の拝礼となる。拝礼を終へられたあと天皇さまのおそばに待つていらつしやる時、参列した人が参拝を終へて帰つてゆくその靴音が響くきこえてくる。神代の世界は終つて現実に帰つてゆく。この神代と現実の対照もまた、このお歌に独自の力を添へてゐると思はれます。そして最後の七首目、ここでまた歌声の余韻がひびいてくる。ひちりきの音、歌ふ声、その調べが高まり、静まつて、一首おいた最後の歌にもさらにその余韻がつゞく。それはまた神話の世界の余韻でもあるのでせう。

この新嘗祭は毎年行はれてゐるのですが、天皇が即位されたその一番最初の新嘗祭、それを大嘗祭といふのです。御承知の通りその大嘗祭が今年の十一月の二十二日から二十三日にかけて行はれるのです。この大嘗祭は宗教的な色彩が強いから、国家行事として行ふことが出来ないとか、皇室行事として行ふべきだとか、憲法にもこだはつた、つまらない議論が盛んに行はれてゐますが、日本の国は、この神秘的な宗教的な世界が、その一番奥にあるからこそ統一を保つことが出来てゐるのです。それは何も日本だけではない、どの国も、或いは一つの国家をとつてみても、集合体の中心に宗教的なものがなければ、全体は必ず崩れてしまふ、神棚のない、佛壇のない家庭生活は必ず崩壊する。まして宗教的な世界を失つた国家は何時の日か必ず亡国の悲運が訪れるのです。だからこの国でも宗教的なものを国の中心に据ゑてゐるのです。アメリカなどでも歴史が浅ければ浅いほど、強く宗教的なものを求め

てゐる。それは大統領の就任の儀式がどのやうに行はれてゐるか見れば明らかでせう。それなのに日本だけが、これほどすばらしい、世界の人も羨む宗教的世界をもつてゐるはずなのに、「政教分離」といふ一片の言葉で、このかけがへのない宗教の世界を無残に捨て去らうとしてゐる。それがいかに恐ろしいことか、とりわけ若い皆さまがたに本当に考へていたゞきたいことだと思ふのです。

沖繩に寄せられる御心

時間をごさいませるので最後に、沖繩に寄せられた陛下の御心について若干お話申し上げます。おきたいと思ひます。

昭和五十年七月、陛下は沖繩海洋博の開会式に御出席のため、はじめて沖繩の地を踏まれました。その時御存知の通りひめゆりの塔に御参りになつた直後、壕の中にかくれてゐた過激派が火焰びんを投げつけ、陛下のすぐそばで爆発するといふ実に危険なことがあつた。その時陛下がいかに我が身を省ず、おそばの人々のことを気遣はれたか、その御態度の御立派さに沖繩の人々は強く心をうたれたと伝えられてゐます。その直後沖繩最大の激戦地摩文仁マブニが岡にいらつしやるのですが、そこで次のお歌をよんでをられます。

戦火いくさびに焼きつくされし摩文仁が岡みそとせを経て今登りゆく

「みそとせを経て」とは三十年の月日が経つてといふことですが、終戦の年から三十年、沖繩といふ悲劇の島に絶えず心を寄せつゞけてきた、そのおもひがかなつて「今」この摩文仁の岡を登つてゆく。大変に深い感慨のこもつたお歌だと思ひます。さらにその翌年の歌会始の御題は「坂」だつたのですが、陛下はここでも再び、摩文仁の御体験をおよみになるのです。

みそとせの歴史流れたり摩文仁の坂平らけき世に思ふいのちたふとし

二句目、三句目、四句目がそれぞれ句切れになつてゐる、胸中の悲しいおもひが、絞り出すやうな切迫した調べとなつて表現されてゐるやうに思ひます。なほこの「坂」といふ御題では美智子妃殿下も同じく沖繩の思ひ出をよんでいらつしやいます。

いたみつつなほ優しくも人ら住むゆうな咲く島の坂のぼりゆく

苦しい、悲しいおもひをいだきながらも、とげとげしい気持になることなく、温く、優しく、柔らかな心を失はずにこの沖繩の人々は日々をすごしてゐる。その人らの住むかたはらにいま黄色い常国の花「ゆうな」が咲いてゐる。陛下の心に忘れがたい印象をとめた摩文仁の岡、妃殿下の目に焼きついたゆうなの花、御二方の沖繩に寄せられるおもひの深さがしみじみと感じられます。

なほここで是非お話しておきたいことは陛下が、沖繩の昔から伝へられた八、八、八、六といふ独特の調子をもつた民謡、「琉歌」を御自分でおつくりになつてゐるといふことです。歌集『ともしび』に六首収められてゐますが、そのうちの一首、

花よおしやげゆん人知らぬ魂
戦ないらぬせよ肝ちもに願て

「花をさしあげます、名もない数多くの戦死者の魂に。戦のない平和な時代であれかしと心から願つて」といふ意味でせう。これは「魂魄の塔」といふ沖繩でつくられた最初の慰霊塔にささげられた歌です。

だんじよかれよしの歌声の響

見送る笑顔目にど残る

兩陛下は先ほど申し上げた摩文仁にお出ましになつたその翌日、沖繩本島の名護といふところにある、ハンセン氏病の療養所、沖繩愛楽園を御慰問されたのですが、そこを出られた時、人々は「だんじよかれよしの歌」——航海の安全を祈る歌——を歌つてお見送り申し上げた。その時の笑顔が忘れられないといふお歌です。沖繩の人の心の奥^{おく}処^とにふれたい、その切実のおもひが、沖繩の人々でも最近では殆んど作らなくなつた遠い民謡「琉歌」を自分で作つてみたいといふお気持ちにながつていつたのでせう。昭和天皇は、遂に沖繩の地をお踏みになることが出来なかつた。しかしその御無念のおもひを償つてあまりある陛下の沖繩の人々に対する愛情、何とか沖繩の人々の身になつて慰めてあげたい、そのお気持ちがこれらのお歌には溢れるやうに感じられるのです。

肉親の情

沖繩の人にかぎらず、陛下の目は、常に人の世の苦しみ悲しみを一身に背負つて生きてゐるやうな人々、幸せうすき人々に注がれてゐる。それは父君昭和天皇も全く同じお気持ちでいらつしやつたと思ふのですが、陛下が「昭和天皇の御心として」と仰言る時は常にそのやうなことが陛下の念頭をよぎつてゐるのではないか、私にはさう思はれてなりません。さういふお気持ちで、陛下は、全国身体障害者スポーツ大会が昭和四十年に開催されてからは、一回もかゝることなく御臨席、障害に苦しむ人々を常に暖かな目で見守つてこられました。さういふお歌も数多くございますが、ここでは昭和五十六年、これも歌会始の折、「音」といふ題でおよみになつた次の一首を紹介しておきませう。

うなりゆく車椅子の音きしる音籠球場は声援に満つ

会場を埋めつくす声援に、我が身ものりだして、その中に溶けこんでいらつしやる、その様子が実によくわかりますね。車椅子のうなる音、きしる音がそのまゝ、きこえてくるやう

な、すばらしいお歌だと思ひます。その歌のすばらしさも、作者のおもひの深さ、障害者への愛情の深さがなければ決して生まれません。この一首のお歌をよみながらしみじみとさう思はれます。国民と一緒に生きてゆく、歩んでゆく、それはもう肉親の愛といつていい、さう思はれてならないのです。その歴代の天皇方の御心、それを信じる以外、私たちには一体何が出来るのでせう。

最初に申し上げましたが、このやうな御心は、ジャーナリズムの歪められた報道によつて、非常にわかりにくくなつてゐる。しかし私達は何とかその報道の乱れを正し、天皇の御心を正確に私たちの心にうけとめ、その深い御心におこたへしなければならぬ。それは決して天皇をいたづらに美化することでもなければ、理想化することでもない。たゞ数々のお歌に表現された天皇の御心の真実、その真実に迫り、それを信じるだけなのです。

憲法における天皇の地位についてさまざまの論議が交はされてゐる。たしかに憲法の問題はそれとして、正すべきものはしつかりと正していかなければならない。しかしそれ以前に憲法でどのやうに規定されてゐようと、とにかく天皇と国民の間には、このやうな心のつながりがある。信じあへる世界がある、それを信じる以外に道はない。その事実に従順し、その事実に含まれて生きてゆく以外に道はない、私はこれら昭和天皇や今上天皇の数々の御歌にふれるとき、そのやうなことをとりわけしみじみと感じないではをられないのです。

最後に私達の先輩、夜久正雄先生の次のお言葉をご紹介してお話を終らせていただきます。「人をおとしめたり、疑つたりするのは努力しなくても勝手に出来るが、人を信じて敬ぶのは、努力しなくてはできないことだ。天皇についてもこれを卑しめる勝手な空想は、子どもでもできるが、天皇の心を信じて敬ふことはその心を知る努力をしなければできないことである。

日本歴史はこの国民の努力によつて支へられてきた、とも言へるのである。この努力の衰へるとき、日本は分裂の悲劇に見舞はれるほかない。」（流行の天皇観にふれて）

日本文化と天皇

作曲家

黛

敏

郎



ムラサキ (ムラサキ科)

世界の中の日本——国体とは

三島由紀夫さんのこと

政治概念としての天皇——権威の象徴として

京都御所と江戸城——権威と権力の違ひ

文化概念としての天皇——祭祀王として

鎮魂祭と大嘗祭——古代人の死生観

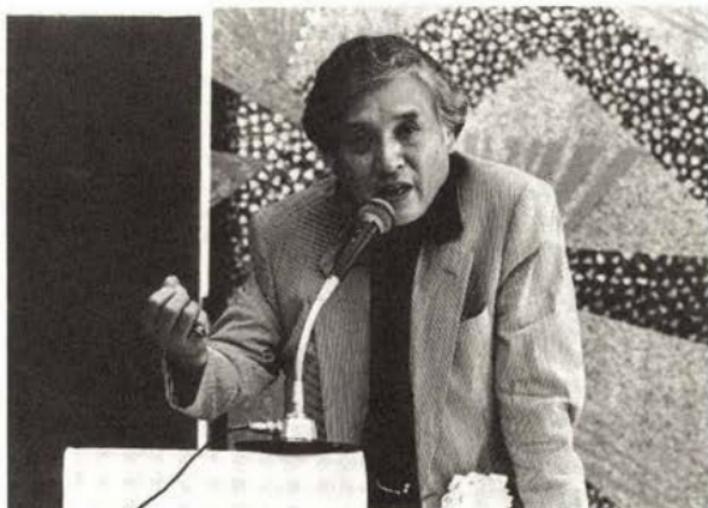
質疑応答

世界の中の日本——国体とは

私は音楽家でありまして、若い時分から外国にも勉強に行きましたし、音楽といふ芸術の持つてゐる性格上、いろいろな民族、文化圏の人たちと接触し、世界的な視野において自分の仕事、生き方を考へざるを得ない立場に置かれてゐます。かういふ人間は、自分の所屬してゐる民族、社会が、他とどのやうに違つてゐるのかといふことを感じざるを得ません。他と区別し、自分を自分として認識する、つまりアイデンティティーといふことですが、これを考へる時に一番大きな問題となつたのが、天皇といふご存在でありました。

昨年の初め、御世代りといふ大きな事件があつた。それを肯定的に捉へる人はもちろん、否定的に捉へる人にとりまして、天皇といふご存在は一体何なのかといふ、抜き差しならない大きな問題を突きつけられたといつても過言ではないと思ふ。皆さん方も恐らくそれを痛感され、それぞれに考へてをられると思ひますが、その問題に入る前に「国体」といふことについてお話ししたいのです。国の成り立ち、国の姿といふ意味での「国体」であります。これには政治、思想、文化、すべての問題が総括されます。今さういふ言葉を使ふのは稀かもしれませんが、やはり日本人として生きられる皆さんには、是非この「国体観」を持つて

ゐてもらひたい。いかなる人間もたつた一人で生まれることはできない。当然両親の存在が必要だ。その両親が生まれるためには、そのまた両親が必要になる。かうして幾世代か遡ると等比級数的に増えていくわけですから、それは天文学的な数になる。その天文学的な数の人間がゐるはじめて一個の自分といふ存在がある。これは縦の関係における自己といふものの認識ですね。一方、横の関係においては、やはりさうやつて生まれてきた不特定多数の同胞、親戚の延長のやうな存在がある。これが共同体といふものを作つてゐる。それが民族、国家といふものであり、「縦」、「横」の繋りがあつてはじめて一個の人間の存在が確立されてゐるわけでありませう。さう考へますと、歴史的及び地理的に一個の自分といふものを把握するためには、やはり私のいふ「国体」と、その中枢に存する「天皇」といふ存在にどうしても想ひを致さざるを得ない。私の経験から云つても、世界に出ていき、日本人と外国人の伝統や歴史、生き方がどう違ふのかと考へた時、いつも立ちほだかつてくるのが天皇といふ存在であつた。つまり日本と他の社会を区別する唯一の拠り所は天皇だと思ふのです。百六十余りある国家の中で、天皇といふご存在を持つてゐるのは日本だけです。もちろんその独自性を以て、日本が特別に優れた国であると言つてゐるのではない。ただ差別はいけませんが、区別は自ら存在するわけであつて、皮膚の色はどんなに無視しても、黒、白、黄色の違いはあるわけです。年の違ひや社会の階層の違ひもあります。それを差別するのはいけないが、



区別するのまで止めてしまへといふのは、暴論だらうと思ふのです。さういふ意味で、日本民族および国家といふものが、他とどう違ふのか、この違ひをはつきりと認識するのは必要なことであらうと思ふのです。

三島由紀夫さんのこと

そこで天皇といふご存在を考へます時に、私が一つの拠り所にしてゐるのは、三島由紀夫氏の考へてゐる天皇観であります。三島さんは昭和四十五年十一月二十五日、東京の市ヶ谷の自衛隊東部方面総監部に切り込み、壮烈な自刃をされますが、それまでの二十年間、非常に親しくお付き合いをした私の友人でありました。昭和二十七年に私はパリに留学してをり、三島さんは世界一周旅行の途次、パリへ立

ち寄つたんです。日本では会ふ機会がなかったのに、不思議なことにパリで出会ひまして、そこで約一か月間生活を共にして、肝胆相照らす友人になりました。当時すでに三島さんは新進気鋭の作家として文名を上げてゐました。出世作となつた『仮面の告白』の続編である『秘薬（ひぎょう）』を書いてゐた時代であつた。私の帰国後、交遊関係はますます／＼緊密となり、『潮騒』や『金閣寺』が生れる頃は非常に近くにゐたので、話しだせばきりがありません。四十五歳で亡くなる前の十年位は、例の文武両道論をひつ下げて、日本の伝統文化は文だけでは守れない、武が伴つてゐなくてはならないといふ立場から、『楯の会』といふものを作つて、非常に華々しい話題を巻き起こした。そして昭和四十五年にあの壮烈な、一種の諫死を遂げられたわけでありませぬ。

三島さんは「君たちは自衛隊に所属してゐながら、その自衛隊を否定してゐる憲法のために死ぬのか。それでいいのか、義のために共に起つて戦つて死なう。」といふことを自衛隊のバルコニーから演説したが、聞く耳を持つ自衛隊員はほとんどゐなかつた。そして絶望の果てに壮烈な最期を遂げるわけですが、聡明な三島さんは、呼び掛けに応じて自衛隊が決起しようとは思つてゐなかつたに違ひない。三島さんは吉田松陰と同じやうに、あへて警世の行動を起こすことによつて、心ある人たちの魂を覚醒させようとしたのです。つまり物理的なクーデターではなく、精神的なクーデターを志したのだ、と私は言ひ続けてきたのでありま

す。

その三島さんが天皇といふものをどのやうに考へてゐたか。三島さんは、天皇といふものは政治概念であると同時に文化概念であり、この二つの側面を持つた存在であると明確に規定されてゐる。私もこの分け方に同感してをりますので、これに沿つてお話を始めさせていただきます。

政治概念としての天皇——権威の象徴として

政治概念としての天皇といふのは一体何か。これは大東亜戦争終結時に天皇がとられた態度に集約されてゐると思ひます。ご承知のやうに大東亜戦争は、天皇のご聖断があつて初めて終つたのであります。昭和十六年十二月八日に日米が開戦して以来、日本は世界中のほとんどあらゆる国を敵として戦ふことになります。初め、東アジアの大部分が日本の勢力範囲に入りましたが、特に欧米の帝国主義によるアジア征服の拠点であつた香港とシンガポールを日本が手中に収めたといふことは、象徴的な意味を持つてゐたのです。白人社会の帝国主義の牙城が、黄色人種によつて奪回されたといふことは、白人種にとつては驚天動地の大変な出来事でした。しかし緒戦の戦果も束の間で、日本は余りにも戦域を広げすぎたために、

補給に困難をきたし、後退を余儀なくされる。

昭和二十年になると敗色は日に日に濃くなり、そこに無条件降伏を呼び掛ける「ポツダム宣言」が発せられた。これにどう対処するかといふことで、日本の最高司令部、重臣および軍部が日夜額を集めて協議したのですが、中でも最も重要な討議が、八月に入つてからの御前会議でした。この御前会議で、「徹底抗戦、本土決戦」を主張する軍部、特に陸軍の意見と、「ポツダム宣言」の受諾を主張する文民側の意見とが相半ばして、結論を見るに至らなかつた。そこで鈴木貫太郎首相は、陛下の前に進み出て、「お聞きのやうに結論ができません。このうへは誠に前例のない恐れ多いことでありますが、ご聖断をいただきたくございます」といつて、陛下のご聖断をお願いしたのであります。旧帝国憲法下におきましても、天皇は内閣の輔弼によつて最終的な裁可は下されるけれども、天皇自ら命令される、重要な政策を決定されるといふことは前例のないことでした。ですから御前会議を主宰されても、陛下がご意見をお述べになるといふことはなく、御前会議の結果をご裁可されるのがしきたりであつたわけです。その前例を破つて陛下のご裁可をお願いするといふことは、由々しいことであつた。しかしさうまでしなければならぬほど、事態は切迫してゐたわけですから。そこで陛下は「自分は東郷外務大臣の意見に賛成である」と仰せられた。東郷外相は、「ポツダム宣言の条件付き受諾」を主張してゐたわけですから。陛下がご聖断を下されれば、いかなる強硬意見を持つて

る軍部といへども従はざるを得ない。そこで「ポツダム宣言受諾の報」が連合国側に届けられ、連合国側から返答がある。それをめぐって再度御前会議が開かれ、また甲論乙駁がなされたさうですが、陛下のご態度は終始変はらなかつた。これ以上国民に災禍をもたらさないうために、ここは隠忍自重してポツダム宣言を受諾しようといふことを終始主張せられたのが陛下であつたわけです。そして八月十五日、陛下自らマイクを握られて終戦の大詔が渙発された。そこで「大東亜戦争」はあつといふ間に終結したわけであります。このことを後に陛下は御製の中に詠んでをられます。

身はいかになるともいくさどめけり

ただ倒れゆく民をおもひて

自分の身はどうならうとも、ただ倒れてゆく民のうへを思つて、この自分が戦争を止めたのだ、といふ陛下の決然たるご意志といふものが、このお歌の中に如実に現はれてゐる。ここで感銘深いのは「いくさとどめけり」と、この手で戦争を止めたのだ、とおしやつたことです。だが思へば、これだけ自信を持つて言ひ切れる方は、陛下以外にどなたもみらつしやらなかつたのであります。つまり私は、ここにこそ、日本の歴史の上において天皇といふこ

存在が持つてゐる政治概念としての確たる姿があるのではないか、といふことを申し上げたいのです。

この終戦の危急存亡の時にあたつて、もし天皇といふご存在がなかつたならば、恐らく軍部の強硬な主張が通つたに違ひない。もしそれが通り、八月十五日の終戦が実現しなかつたならば、どういふことになつてゐたであらうか。後に連合軍が発表したところによると、同じ年の九月末には、南九州に連合軍が上陸する予定であつたらしい。そして十月か十一月には、関東地方にも上陸を敢行する予定であつたと言はれてをります。さうすれば日本の蒙る損害は計り知れないものになる。その時に降伏しても遅いのです。もう本土のいろいろな所に敵軍が上陸してゐるわけですから、東西に分割されたドイツと同じ運命が待ち構へてゐたに違ひない。日本は分割占領され、そのままの状態が続いたでせう。四十五年前の八月九日、ソ連軍は日ソ中立条約を破り、無法にもソ連国境を突破して戦闘を開始します。一週間を経ぬうちに終戦が成立してもソ連軍は侵略を続け、北方四島を占領したまま未だに返さうとしない。その理不尽なソ連軍のことですから、戦争が続行されたならば北海道、東北にも上陸し、停戦になつてもそこに居座つて、日本は分断国家になつてゐたに違ひないのです。最近八月になりますと、戦争に対する懺悔一色に塗りつぶされた報道番組が放映されますが、この悲劇を回避し得たのは誰のおかげなのか、といふことを、正しく説いた報道がなされた

ことはかつてありません。しかしこのご聖断によつて、われわれの生命も財産も国土も救はれ、今日の平和と繁栄の基礎が築かれたのだといふことは、どんなに強調しても強調しすぎることはない、と思ふのであります。私どもが天皇といふご存在を持つてゐたといふこと、その天皇がかくも英邁であられたことを、私は本当に有難いと思ひます。「ただ倒れゆく民をおもひて」といふ大御心が貫かれたからこそ、日本の現在も将来もあるのだといふ思ひをひときは大きくするのです。つまり三島由紀夫氏が規定した、天皇の政治的な概念、政治的な機能の象徴といふものが、この八月十五日の終戦をもたらしたご聖断にある、と言ひたいのであります。

翻つてみますと、天皇といふご存在は、必ずしもいつもかうした政治の実権を發揮されたご存在ではなかつた。奈良朝、平安朝は主として藤原氏が実権を握り、鎌倉幕府設立以降は武家の政治が行なはれてきた。その間、天皇は権威の象徴としてをられただけで、権力の象徴ではなかつた。天皇御自ら政治の実権をみそなはされたといふ時代は、日本歴史の中でも数へるくらゐしかありません。神話的な神武天皇は措くとして、実際に政治権力を行使された最初の天皇は、天武天皇だらうと思ひます。天武天皇は、壬申の乱によつて混乱した日本を強力に統一し、律令制度を確立する必要があつた。『萬葉集』で「大君は神にしませば」と神になぞらへて詠まれたのは、ほとんどの場合、天武天皇であります。つまり神に等しい権

威を實際に持たれた最初の天皇、といつても差し支へないと思ひます。しかしその後、藤原氏が実権を握り、その次に天皇が実権を握られたのは、南北朝時代だらうと思ひます。この時代もやはり一種の体制の危機ですから、後醍醐天皇が政治の実権をになはれた。そしてまた武家政治に戻る。しかし三百年間の徳川時代にも京都には嚴として天皇といふご存在があり、このご存在が続いてゐたればこそ、幕末の混乱期を乗り切ることができた。幕末は將軍家の指導力も覺束無くなつて、尊皇か攘夷かで国論が二つに分かれ、薩長連合軍が幕府に刃向かつて日本は内乱状態になる。当時西洋諸国は、虎視眈々とアジアを狙ひ、ことに最後の宝庫であつた日本を狙つてゐたわけですから、一朝ことを誤れば、日本は他のアジア諸国と同じやうに、欧米諸国の植民地と化してゐたに違ひない。それが内戦の危機を辛くも回避して、植民地にならないですんだのはなぜか。薩長連合軍が江戸に入城し、打ち出した体制が「王政復古」であつた。つまり政治の実権を天皇にお返しして、天皇を中心に日本を近代国家として建て直さう、といふ意識が芽生へてゐたからです。もし幕末に、天皇といふ象徴的なご存在がなかつたならば、あの内戦でどちらが勝つたにせよ、恐らく欧米の列強はそれにつけこんでくちばしを入れてきたでせうし、日本は悲劇的な運命に見舞はれてゐたに違ひない。幸い日本には天皇といふご存在があり、政権を天皇にお返ししようといふことによつて、明治維新が達成された。しかも明治大帝は、類ひ稀なる英邁なる君主であられ、すぐさま時代

の趨勢を察知されて「万機公論に決すべし」といふ「五箇条の御誓文」を發布される。ここに日本は民主主義国家として、近代国家として生まれ変わったのです。これは世界史上の奇跡といつて差し支へないでせう。そして今日、敗戦や経済危機に見舞はれながらも、このやうな繁栄を誇つてゐるその基礎は、やはり明治維新に築かれてゐた、といつて良いと思ふのです。ここにも天皇といふご存在の政治的な機能が發揮されてゐる。日本歴史を振り返つてみますと、天皇といふご存在は、いつもはそれほど大きな力を持たれない、しかし一朝ことがあり、日本が国家の運命を賭けるときになると、そこで天皇が眞価を發揮される。少なくとも大東亜戦争の終戦時と明治維新、天皇といふ御存在の姿を示す、はつきりとした証拠である、といつて差し支へないと思ひます。

京都御所と江戸城——権威と権力の違ひ

自らは力をお持ちにならず、しかし力を越えた権威といふものを持つてをられる。そのことを象徴してゐるのが京都御所だらうと思ひます。京都盆地の平地の真つただ中に、簡単な築地塀がめぐらしてあるだけで、こんな塀は誰でも乗り越えることができる。歴代の天皇方はその中に、千年もの間お住まいになつたわけです。もし天皇を亡きものにして自分がとつ

て代はらうとすれば、非常にたやすいことだつた。しかし千年の間、さういふ無謀な企てをしようとしたものはなかつた。天皇といふご存在は力によつてではなく、もつばらその權威によつて守られてきたのです。太田道灌が築いた江戸城が今皇居になつてゐますが、私は何回か入れていただいたことがあります。その時いつも思ふのですが、鬱蒼たる森や池、さういふ大自然の面影を残した一角が、あれほどの広さにわたつて町の真ん中に残つてゐる都会は、東京の外にはありません。

十数年前ですが、あの皇居の中で皇宮警察官に講演させていただいたことがある。皇宮警察の本部長が、今の若い警察官たちは、自分がお守りしてゐる皇室の重要性が今ひとつわかつてゐないので、日本にとつて天皇、ご皇室がいかに大事なご存在かといふことを講義してほしいとおつしやる。それで今日と同じやうなお話をしますと、本部長が大変喜ばれて「皇居の中でご覧になりたいところがあつたらどこでもご案内ませう」とおつしやるので、「では賢所を見せていただきたい」と申しあげたんです。賢所といふのは宮中でも一番神聖な所でありまして、天照大神をはじめとする皇祖皇宗の霊、神々をお祀りされてゐる宮中三殿のうちの一つでございます。ここにお参りしたいと申し上げたら「結構です」といふことで、吹上御苑の奥深く、山あり谷ありの中を車で走り、堀越しに遙拝させていただきました。この時、本部長が「この皇居は実に要害堅固な所なので、わずかな警察官でも皇室をお護りで

きます。太田道灌さんには本当に感謝してゐます」と言はれました。そこで私は、京都御所を思ひ合はせたのですが、徳川將軍は自己の安泰を図るために、あれだけ堅固な城を築かなければならなかつた。それに引き替へ京都御所といふのは、ただ塀がめぐらしてあるだけです。つまりここにこそ、権力と權威の違ひを如実に見る思ひがしたのです。力によつて成り上つたものは、力によつて滅ぼされるわけですから、十重二十重の堅固なものを作らなければならぬ。しかし、權威によつて成立してゐるものは、力で守る必要はない。天皇にならうといふ野望を抱いたのは、奈良時代の怪僧、道鏡一人です。天皇の長男に生れなければ次の天皇になる資格がないといふ、この一見簡單で、しかし厳しい規則の中にこそ、天皇の神聖性といふものが保証されてゐるのです。力や金によつて權力を得ることはできません。しかし天皇になることはできない。これは素晴らしいことだと思ふのです。それは決して前近代的なことではなく、權威の象徴とは、さういふものだらうと思ふのです。

最近、秋篠宮がご成婚を迎へられました。これは誠に慶賀すべきことですが、俳優の結婚と同じ次元でもてはやすのは間違ひだと思ひます。そこには、日本の皇室のよつてきたる尊厳さといふものがある。お二人の微笑ましい写真を宮内庁が差し止めたのはけしからん、といふ論議がありますが、差し止めたのは当然です。カメラマンが写真を撮るのは自由でせうが、それを注文した宮内庁の許可なく勝手に公表したのは、許し難い約束違反です。ものに

は節度があり、ルールがある。皇室が身近になるのは素晴らしいことだと思ふ。しかし皇室といふものはやはり権威の象徴であり、自らおのづかわれわれと画すべき一線がなければならぬ。それを取り去つてしまふのが、皇室と日本の将来のためになる、といふ考へ方は間違つてゐる、と思ひます。天皇の権威によつて今日の平和と繁栄があるのですから、権威は権威として守らなければならぬ。

天皇は神ではないといふ論もあります。確かに昭和二十一年元日、昭和天皇がいはゆる「人間宣言」を出された。しかしこの「人間宣言」なるものを用意深く読めば、自分は人間だとしてどこにも言はれてゐない。「人間宣言」といふのはマスコミが勝手に作つたスローガンです。「日本国民と自分とのつながりは神話的な関係ではない」と確かに言はれてゐる。しかし自分は神ではないとは決して言はれてゐない。これは十分考へなければならぬことです。

私は日本の天皇は神であると思ふのです。日本の神道では、人は死ねば神になります。キリスト教やイスラム教の神はただ一つの存在ですが、神道、多神教の世界では、神の存在は複数である。われわれも死ねば神になるのですから、実に無数にゐるわけです。その神々の中で、やはり天皇は別格に高い位置にあられる神です。さういふ意味において天皇はまさに神である。

外国の中には、かういふ権威の象徴が欲しくて仕方がないといふ国がたくさんあります。

アメリカもソビエトもさうに違ひない。さういふ国には大統領がゐますが、天皇に比肩するご存在といふものはないのです。大統領は任期がくれば辞めなければならぬ。それが共和制といふ政体の国の元首です。これは一見民主的であるやうに見えるが、こんなにはかないものはない。つまり一票でも多く取る政治家が現はれば、自分は終はりとなつてしまふ。しかし天皇は亡くなるまで天皇といふ地位を保証され、次の天皇におなりになる方も決まつてゐる。こんなに安定してゐる政体はありません。諸外国を眺めてみますと、天皇に準ずる存在を持つてゐる国がいくつかあります。英国、デンマーク、スウェーデン、オランダ、タイ等がさうです。さういふ国の国王は日本の天皇と同様、実際に政治の実権を持つてゐるわけではなく、首相などの国民の代表が実権を持つてゐる。しかしさういふ国は、いはゆる共和国に比べて、はるかに政治上の安定性があります。それはやはり、長い歴史の間に培はれた王家の支へがあるからです。しかしその王家も、天皇家とは比較にならないやうな浅い歴史しか持つてゐません。ヨーロッパの王室で一番古いとされる英国でも、たかだか千年足らずの歴史しかなく、王朝の交代も何回かあるわけです。それに比べて日本のご皇室は、非常に長い歴史を持つてゐる。しかも祭祀王としての、プリースト・キングとしての特性を兼ね備へてゐるといふ点において、これは全く世界に類例がありません。

文化概念としての天皇——祭祀王として

ここで、それでは一体どういふ理由で天皇が權威の象徴となり得たのか、政治概念としての天皇のバックグラウンドは何か、そこにお話を変へたいと思ひます。現在、他国の君主が持つてゐない機能、それを三島由紀夫氏流にいへば、文化概念といふことになります。日本の天皇が持つてをられる文化的な機能、その主なるものは祭祀王、祭祀を司るといふことでもあります。「まつりごと」といふ古い言葉がありますが、これには二つの意味があります。一つは政治です。「政」といふ字は「まつりごと」と読むことができます。もう一つの意味は読んで字のごとく、お祭であります。従つて神を祀ることがイコール政治、人民を治めるといふことと一致する。古代の国家とは、大半がこの形態であつた。古代国家において為政者のなすべきことは、自然と折り合ひをよくしていくことであつた。古代、人間は自然の脅威のまにまに生存してゐました。早魃がくれば飢饉になり、洪水になれば田畑が押し流される。だから雨乞ひをし、治水をする。水を治めることが、古代の為政者の最大の仕事であつた。これは人間の力を越えることであり、専ら神に祈りを捧げなければならぬ。空海や最澄も、京都の水飢饉を救ふために祈禱合戦を行なつた。つまり雨を降らせる力を持つた人が、最大

の政治力を持つことになる。時代の差を感じますが、現代の科学万能の世の中でも、人間が
いかに威張つたところで、自由自在に雨を降らせるまでにはいつてゐません。やはり最後
は神様といふものが出てくる。現代の世界情勢においてもさうだと思ふのです。テタントで
米ソが仲良くなつて、戦争の危機が回避されたと思つたとたん、イラクがクウェートに攻
め込んだ。日本の石油備蓄も半年足らずしかないので、また大変な経済危機に見舞は
れるかもしれない。「政治の世界は一寸先は闇だ」といはれますが、政治の世界だけではあり
ません。人間の世の中といふものは、一寸先は闇です。科学、科学といひますが、神のおほ
しめしいかんによつては、われわれ人間なんてひとたまりもありません。現在でもさうなの
ですから、古代における神といふものの存在は非常に大きかつたに違ひない。牧畜民族や狩
猟民族にとつても同じですが、殊に日本のやうな農耕民族にとつて雨は重要です。作物を作
るためには、最低限、土と水と日が必要である。しかもこの三つがそれぞれ過不足なく与へ
られなければ、充分な収穫が得られない。しかしこれは人間の力ではどうすることもできな
い。そこで神に頼る。雨を降らせる神、日を照らせる神に祈りを捧げるのです。

私は日本民族といふのは、非常に現実的な民族だと思ふのです。例へば、われわれに恵み
をもたらしてくれるやうな、都合のいい神様を作り出してしまふ。日本の国民的宗教である
神道は、八百万の神といふくらゐ、神様の数が多い多神教であります。この神々の身元調べ

をしてみると、興味深いことにそのほとんどが自然神、自然の成り代はりです。『古事記』の最初の神代の巻には、無数の神様が出てきます。私は今、『古事記』を元にしたオペラを作つてをりまして、丁度「国生み」が終はつた所を書いてゐるのですが、『古事記』の一番最初に「天地初めて発けし時、高天原に成りし神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神、この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき」

とあります。つまり天地開闢の時、天の一角に高天原といふところがあり、そこに天之御中主神といふ神がをられた。天之御中主といふのは、天地の中心といふ意味です。この神を真ん中にして高御産巢日神と神産巢日神とがをられた。物事を作り出すことを「むすぶ」といひます。産巢日はさういふ意味です。この三柱が最初にをられたが、みな独身の神であつて、いふならば觀念上の神、実体のない神です。ですからすぐ姿を隠してしまつた。それから神代・七代にいろいろな神様が出てきますが、その一番最後に伊那那岐命、伊那那美命といふご夫婦の神が現はれる。この神の、いふならば夫婦のまぐはひによつて生まれるのが、日本の国土、大八島の国です。これにもいろいろあります。最初のご夫婦が契りを結んだ時には失敗致します。夫婦の契りを交はされる時に、奥さんの伊邪那美の神の方が最初に声をかけるが、それは神意に背くのです。女は慎重深いものですから、男より先に声をかけてはいけない。それで水蛭子といふ、できそこないの子供が生まれてしまふ。ですから日本

の神々の最初のまぐはひは失敗です。これは非常に人間的な神話だと思ふのですが、ともかく天の神はもう一度やり直しを命ずる。すると今度は神意になつて、続々と子供が生まれてくる。それが九州、四国、淡路島、本土、佐渡ヶ島といふ大八島、日本列島です。これが国生みといふ伝説であります。

さらに伊邪那岐、伊邪那美の神は、おびただし数の神を生むのですが、その神々のほとんどが、天地自然の成り代はりです。山の神、木の神、土の神、水の神、火の神といふふうには、森羅万象あらゆるものを司どる神様が生れてくる。八十三柱の神々が生みだされるのですが、中でも一番感動的なのは、火の神を生んだ時の話です。自分の体内から火の神が生まれるわけですから、お母さんの伊邪那美の神は、産んだとたん到大火傷を負つて死んでしまひます。それで夫の伊邪那岐の神は、おいおい声を上げて泣きます。大変な愛妻家だったのです。涙はたまつて池になる。私も見に行きましたが、奈良の橿原にある「泣沢の池」といふ小さな池です。その涙にも泣沢女神といふ神様ができる。今、池のそばに「泣沢神社」と呼ばれる祠があります。さて奥さんが死んで黄泉の国へ行つてしまつたので、伊邪那岐の神は非常に悲しんで、諦め切れずに黄泉の国まで追ひかけていきます。黄泉の国の戸口に立つて、節穴か何かから中を覗くと、伊邪那美の神は見るも浅ましい姿になつてゐる。学者はこれは死体の描写だといひます。蛆が湧いたり、変なものが生へてゐる死体を見てハッと声を

あげてしまつたため、死んだ奥さんが気がつく。そして「こんな浅ましい姿を見てしまつたのね」と言つて非常に怒るのです。この女性心理が私ども男性には不可解な所なのですが、自分が死んだのを嘆き悲しんで、夫が黄泉の国まで追ひかけて来てくれたのですから「まあうれしい」と言つて感謝するのが当たり前だと思ひますが、女性はどうもさうでないらしい。怒り心頭に発して、黄泉の国の軍勢を差し向け、せつかくやつて来た夫を追つ払つてしまひます。伊邪那岐の神は這々の体で「黄泉比良坂」といふところまで逃げ返る。これも鳥根県と鳥取県の境に実在しますが、『古事記』の神話はかうして実在するといふのが素晴らしいと思ふのです。

伊邪那岐の神はやつと高天原に戻ると、黄泉国へ行つて目が汚れてゐますから、禊をつかふ。つまり体をきれいに洗ひ清めます。左目を洗つて、そこに現はれた神様が天照大御神であります。次いで右の目を洗ふと月読命が、鼻を洗ふと建速須佐之男命が生まれる。この三柱の神は、清浄な水で禊をつかつた最後に生まれた神ですから、一番大事な神です。その大事な神が、天地自然のものを司つてゐる。天照大御神は太陽の神、月読神はお月さままで、最後の須佐之男命は、ワタツミの神、海の神です。太陽、月、海といふ、森羅万象を司る一番大事なものを象徴する神を生み終へて、伊邪那岐命の神生みが終はる。

この『古事記』の最初の神話こそ、日本の神々が持つてをられる性格を如実に現はしてゐる。

る。つまり非常に現実的な日本民族といふものは、自然そのものを神様にして神棚に祀つてしまふ。そして雨をお降らせ下さいといつてお願いする。よしきた、といつて雨を降らせてくださる。照つて下さい、といつてお願いする。天照大御神が十分な日光を提供してくださる。このやうに神と人との対話によつて、コミュニケーションによつて古代の日本人の生活が成り立つてゐた。この接点にあるご存在、それが天皇であります。つまり天皇といふものは、天地自然を象徴する神々の一員であつて、同時にまた、天地自然の恩恵を受けるわれわれ国民の代表でもあるといふ、仲介的なご存在である。天皇は、神々の意志を人間に伝へる仲介者として、また、人間の祈りを天の神々に届かせる仲介者として、その丁度中間に位する祭祀王の役割をなされてゐたのです。いふなれば神道の大祭司であり、政治概念としての天皇の象徴性、重要性の保証は、そこに基づいてゐたのであります。古代の中国、ローマ、ペルシャや英国、エチオピアなど、君主の大多数は、さういふ祭祀王的な性格を持つてゐた。ごく最近まで世界の何箇所かに、かういふ祭政一致の面影を残した君主がをられました。現在は絶滅してしまひました。

天皇が政治上の支配者であるかどうかについては、異論が出るかもしれませんが、少なくとも昭和二十年までは、日本における最高の権威であり、現在も精神的にはさうであらうと思ひます。現在これだけの権威を持つてをられるのは、世界広しといへども日本の天皇だけ

です。大袈裟に言へば日本の天皇は、世界の文化史の中における非常に貴重な存在として位置づけられるべきだ、と思ふのです。このやうに、民族の英知によつて、三千年の長きにわたつて持ち続け、日本文化の象徴としての保証性を持つてゐる天皇といふご存在を、單なる政治上の配慮から否定してしまつていいものであらうか。これは実に大きな問題であります。今われわれが賢^{さか}しらに、浅薄な民主主義的風潮におもねつて、掛け替への無い天皇といふものを軽んじてしまつたならば、日本民族の歴史の中の一大汚点となり、悔いを千歳に残すことになると思ふのです。

鎮魂祭と大嘗祭——古代人の死生観

今年の秋には即位の大礼が予定されてゐますが、皇位継承を巡る様々な行事といふものは、非常に大事な意味合ひを持つてゐるのです。もしこの御世代はりの行事にわれわれが関与の仕方を誤つたならば、取り返しのつかない大きな過ちを犯すことになる。この種のこととは前例として残りますから、後々の時代まで拘束することになるのです。考へてみれば、われわれは空恐ろしいほどの大きな責任を負つてゐることになる。私は日本の文化の一翼を担つてゐる人間の一人として、こんなことはどうでもいいといつて見過ごしてしまふわけにはいか

ないのです。実に多くの日本国民が、あの御大葬のもたれ方に疑問や不満を持つてをられる。そしてご即位の礼、特に大嘗祭のもたれ方に対しても、非常な危機感を持つてをられる。私もその一人であり、何とかして日本の伝統に則つた皇位継承礼を実現させたいと思つてゐます。そして天皇のよつてきたる意味合ひといふものを、世界にはつきりと示すためにも、ご即位の大礼をどう行なふかといふことは、大変重要です。特に大嘗祭は、ご即位後初めて迎へられる新嘗祭であり、天皇が天皇としての資格を身につけられる最も重大な儀式であります。

新嘗祭は、現在は十一月二十三日の「勤労感謝の日」に宮中で行なはれる祭祀儀礼で、明治の前までは旧暦霜月の下の卯の日（霜月は旧暦の十一月で現在の十二月。この月の一番目の卯の日）に行なはれてゐた。そしてこの新嘗祭は、前日の寅の日に行なはれる鎮魂祭（たましづめのまつり）とセットになつてゐます。鎮魂といふのは何かといふと、古代人は人間の死とは、魂が肉体を離れることだと考へてゐた。仏教渡来以前、日本の民族宗教では、人間が死んでもすぐそれを死んだとは言はないのです。肉体から離れた魂は、その辺に浮遊してゐるわけですから、また肉体に戻つてきて生命を吹き返すかもしれない。ですからそれまでの間、モガリと称して遺体をそのまま安置しておくといふ風習があつたやうです。そして魂がどうしても戻つてこないとなると、はじめて諦めてお墓に納める。これが古代人の死生観であつ

た。

日本には、肉体を離れて浮遊してゐる無数の魂が集まつてゐる所が三つあり、三大霊場と申しますが、その一つが下北半島の恐山おそれざんです。そこにはイタコといふ、魂を呼び降ろす婦人がをりまして、私もおじいさんの魂を降ろしてもらひました。これは死者の供養のための儀礼のやうなものです。このやうに魂が肉体を離れると死ぬわけですから、離れてしまつては困る。昔は寿命が短いので、三十位になるともう死を考へるやうになります。そして晩秋の頃になると田畑の取り入れも終り、一年の労働で心身ともに疲労困憊する。すると魂が肉体から離れようとしていますから、離させまいとして魂を鎮めるわけです。この鎮魂の方法には代表的なものが二つあります。奈良の石上神宮に今も残る儀式では、神殿の中を真つ暗にし、まして、そこで榊さかきの枝に麻縄まがたまで勾玉まがたまを結びつけるのです。「むすぶ」といふのは、物事をつくりだすといふ象徴的な行為ですが、ヒー、フー、ミーと節をつけて一種の呪文じゆもんを唱へ、鈴を振りながら十回結びつけていくのです。これをセツトになつてゐるのですが、神奈川県の阿夫利神社に、昔石上神宮から伝へられたウケ船うけふねの所作といふのがあります。これは小さな棺桶くわんぼくのやうな楕円形だえんけいの木の船の上に玉鬘たまかづらをつけた巫女みこさんが乗り、ヒー、フー、ミーといふ呪文に合はせて錫杖しやくじょうといふ鈴のついた杖でウケ船を突くのです。するとポーン、ポーンと音が出ますが、その音によつて肉体を離れようとする魂を覚醒させ、閉ぢ込めるのです。宮中で

行なはれる鎮魂の儀式は、これと同じやり方で行なはれるさうです。宮中三殿の傍らにある神嘉殿の中で、天皇が「まとおふすま」といふ寝具の中に休まれ、肉体を離れようとする魂を閉ぢ込めるといふ所作をされる。さうして、疲れた天皇のお体から離れようとしてゐる魂を鎮めて元気を回復していただき、翌日の卯の日に、その年に取れた新穀を召し上げる。新穀は天地自然のエネルギーの結晶であり、これを天皇が摂取されることによつて、新しいエネルギーが体内に蓄積される。すると新しい年を迎へる活力が湧いてくる。ですから新嘗祭といふのは、春を迎へる行事として非常に重要な意味合ひを持つてゐたわけでありませぬ。民間でも霜月祭といふのがいろいろな地域に残つてをり、その元は、新嘗祭の時に行なはれる郷土芸能だといはれてゐます。この時間はだいたい冬至と一致するわけですが、冬至といふのは一年で一番太陽の力が衰へる日で、農耕民族は非常に不安な気持ちをする。それで太陽の起死回生のお祭りをするのです。しめ縄を張つた所で大釜にお湯を煮立たせ、湯気で辺りを浄化して神様に収穫を感謝し、太陽の力を取り戻して下さい、とお祈りを捧げながら、夜通しお神楽を奉納する。かうして鎮魂と新嘗祭と冬至のお祭は一体となつてゐました。

新嘗祭が行なはれる霜月下の卯の日といふのは、古代人が冬至に近く設定した日取りに違ひないのです。実はクリスマスマスの祭りも、元々古代ローマの民族宗教、ミトラ教の冬至の祭りでした。ローマにキリスト教の渡来後、キリストの生年月日がはつきり分かりませぬから、

今まであつた冬至のお祭りをつくつた。このやうに古代人は共通して冬至を大事に考へてゐたのですが、それを昔あるがままの姿で、数千年の長きにわたつて持ち続けてゐるのは、日本だけであり、それを厳然とおやりになつてゐるのが天皇であります。私どもは、これをどれほど大事に考へても考へすぎることはない。それほど重大なことなのです。高々四十年前にできた憲法の政教分離の原則に遠慮して、或は議会運営上の迷惑のために行なはない、などといふことになれば、日本民族の一大痛恨事です。さういふものを超越した民族の伝統、歴史といふものがあり、私どもはそれを継承していく義務がある。左翼の学者は、原始社会の奴隷制の残滓である天皇制を大事に思ふのは何事か、といふやうなことを言つてをります。が、全く逆であります。二十一世紀を目前に控へた時代であるからこそ、掛け替へのない文化遺産であるこのお祭りを、大切にしなければならぬと思ふのです。皇室と天皇、そして大嘗祭といふものが、現在において文化的にどれだけ大きな意味合ひを持つてゐるかを、殊に若い諸君に肝に銘じてお考へいただきたい、といふことを力説致しまして、私の講演を終らせていただきます。

質疑応答

〈問〉「大嘗祭や皇室について、現在国民はあまり関心を持つてゐないやうに思ふのですが、

なぜ関心が薄れてしまったのでせうか」

〔答〕昭和二十年に戦争に負けて、社会の物の考へ方が変はつた、また変へさせられたといふことがある。負けたのは政治が悪かつたからだといふ反省すべき面も多々あるのですが、占領軍は日本を六年間占領してゐる間に、東京裁判や新しい憲法を作ることによつて、戦前の日本が持つてゐた、連合軍にとつて脅威になる種を全部根絶やしにしようといふ政策を徹底した。と同時に日本人といふのは負けずれしてゐなかつたために、今までのことは全てだめだつた、と百八十度考へ方を変へてしまつた。ヨーロッパの国なら勝つたり負けたりしてゐるから、負けても次に勝てばいいですむ。しかし日本は初めて負け、国が減ぶのかといふくらゐの絶望に陥つた。ところが日本はなくならない、しかも平和といふのは素晴らしきことだといふので、押しつけられるものを全て無



批判に受け入れすぎてしまった。これではいけない、いくら負けても伝えるべきものは伝へなくてはいけない、と言ふと、平和ほけといふか、占領政策で洗脳されてしまった人たちが、今さら昔に戻る必要がない、戦争への道を繰り返すのか、と言ひ出す。日本の歴史における天皇についての正確な認識もなしに、さういふものはないはうがいいと論ずる勢力が強くなつた。戦後の教育はさういふ偏向した歴史認識で塗りつぶされてしまつた。それは悲しいことです。四十五年間さういふ世の中が続いてきてしまつたわけです。非常に困難なことだと思ふけれども、これからの日本を背負つていく君たちは、事の是非を見極めて、正しい主張をしていつてくれないとだめだと思ふ。

〈問〉「日本文化を考へる時に、周囲の環境、例へば言葉や習慣の問題、友人や彼女のことには関心が持てるのですが、新嘗祭のやうに天皇が体現されてゐる文化に対して、リアリティを感じる事ができません。天皇とわれわれはどう関はつてゐるのでせうか」

〈答〉文化の概念規定にも関係してきますが、文化といふのは、本を読んだり、音楽を聴いたりといふ特別なことではないので、例へば美味しいものを食ふといふのも文化です。中華料理だつて、中国の長い歴史と国民性が生み出したわけです。すべて人間が行なふ営みといふものは、何らかの意味で文化と関係があると思ふのです。彼女とゐる時でも何を食はうか、

何の映画を見ようかといふ選択の意志が働かし、雰囲気をよくするための工夫もあると思ふ。そこには日本人の感受性や考へ方といふものが自ら反映してゐるのであつて、日本人の自然観、伝統といったものと、やはりどこかでつながりがある。そしてその伝統の総括者として天皇といふものがある。宗教だつてさうです。自分には宗教なんて全く関係ないと思つてゐるかもしれないけれども、日本には仏教的な倫理観が非常に入つてゐて、あなたのもの考へ方にもやはり影響してゐるわけです。天皇とか大嘗祭といふものは、われわれが行なう活動に対して非常に大きな影響力を持つてゐる、さういふ根源的な存在としてあるのだ、といふ認識をして欲しいと思ふのです。

黒上正一郎先生著

『聖徳太子の信仰思想と』

『日本文化創業』に就いて

ニリンソウ（キンポウゲ科）



金文図書出版販売株

廣木

寧

輪読について

黒上正一郎先生の略歴

「悲痛動乱の生」

「学に殉ぜり」

文化の戦ひ

黒上先生の「太子の人間洞察」観

輪読について

ただ今から「輪読導入講義」に入らせていただきます。この「輪読」といふのは、複数の人で同じ文章を読むのです。複数で読みますから、自分の意見だけでなく、相手の意見もあるわけです。書かれてある文章が何を言はうとしてあるのかについて、相手が発言する。まづ、その意見をよく聞くのです。つまり、聞く事から出発するのです。勿論、自分としては、目の前の文章をよく読むといふ事から出発する。だから、よく読む事と相手の話をよく聞く事、この二つの訓練なのです。かう言ふと簡単な事のように思はれるかも知れませんが、それがなかなか出来ないのです。本文を離れて自分勝手な意見を述べたり、相手の意見をよく聞かなかつたりするわけです。この事は、一日目の山内健生先生の話を受けての班別討論から、ずつと皆さんは具体的に経験してをられるので、「輪読」といふ言葉の意味合ひを体得しつつあるだらうと思ひます。

黒上正一郎先生の略歴

それでは、まづ黒上先生がどういふ人であるのかといふ事から話を始めたいと思ひます。黒上マサイチロウと読みます。「正」の字は楠木正成から取られたさうです。黒上先生は徳島の染物問屋の嫡男として明治三十三年にお生まれになります。(以下「略年譜及び著作年譜」参照)一人息子で他に兄弟はをられませんでした。大正三年に徳島県立徳島商業高校に入学され

黒上正一郎先生 略年譜及び著作年譜 (「」は著作名 著作は年代が明確なもののみ)

年	数へ年	関連事項
明治三三	一	徳島の商家の嫡男として生まる
大正三	十五	徳島県立徳島商業学校 入学
八	二十	同校 卒業 (在学中に菅原道真論有り) 阿波商業銀行に勤務
九	二十一	「磯長参籠」(詩)
十	二十二	「親鸞の七十五首和讃」

十一	二十三	「親鸞伝研究に就いて」 「時代思想を背景としたる阿波国仏教芸術の研究」
十二	二十四	「聖徳太子の芸術とその御歌に就いて」
十三	二十五	「聖徳太子の三経義疏と日本文学」 阿波商業銀行を退職
十五	二十七	東京帝国大学文学部教育学教室において「聖徳太子の研究」と題して講演
昭和 二	二十八	「人文現象の研究態度と日本精神序説（明治天皇御集研究序論）」 「教育思想家としての伝教大師」
三	二十九	「日本人の芸術的精神」 「聖徳太子の人生観と政治思想（十七条憲法思想考証）」 「弘法大師の体験過程と青年時代の教育論」 甲府に三井甲之先生を訪ふ。
四	三十	第一高等学校に昭信会、東京高等師範学校に信和会を設立。 「聖徳太子の人生宗教と国民精神」 「教育思想家としての弘法大師」 「聖徳太子三経義疏の国文学的研究 特に法華義疏の独創的内容を論ず」
五	三十一	「祭政一致の精神と聖徳太子の大乗仏教批判綜合」 九月 歿

ます。家が商家で、跡継ぎですから、是非家を継ぐやうにといふ要請があつて、さういふ人生を歩み出されてゐるのでせう。大正八年に卒業されますが、在学中に菅原道真公についての論を書いてをられます。そして、阿波商業銀行に勤務され、その翌年、難解な、格調の高い、聖徳太子研究の出版を告げる「磯長参籠」といふ詩を発表なさつてをられます。先生二十一歳の時です。「磯長」といふのは、聖徳太子の御墓がある所なのです。そこに参拝され、ぬかづかれて、この詩を詠まれたのです。その後、親鸞についての研究をされ、それから太子の研究に進まれたのです。大正十三年に、阿波商業銀行を退職され、その翌々年の大正十五年に、それまで銀行員であり、学歴も高くない黒上先生が、東京帝国大学に呼ばれて講演をなさつてゐます。(この事は後述の「黒上君之碑」参照)この講演で黒上先生の名前が大いに著はれるのです。その後、最澄、空海、それから聖徳太子についての研究論文を発表なさいます。そして、昭和五年九月、数へ年三十一歳の時に肺結核でお亡くなりになります。人生としては大変短い人生です。これが黒上先生の大まかな略歴です。

「悲痛動乱の生」

次に黒上先生の大正九年の書簡を読んでみませう。僕は学生時代に小柳陽太郎先生が合宿教室の「輪読導入講義」でこの書簡を紹介されました時に非常な感銘を受けました。（『日本への回帰第十二集』参照）

先日祖父を失ひ候ひてその、ち遺骨をもちてひとり墓路を納めにと歩きし時ほど、かぎりなきもの、ひゞきの身にきたることは無之候ひき、しみじみと死の問題につきて思はされ申候。親教師友みなひとたび別れては再びあひ得ぬこの世のことに悲痛動乱の生を味はされ申候。それにつけても同信海中につながらせて頂き度念じ候。

（『伊都之男建』第四卷第四号 昭和十年）



御祖父様が亡くなられ、——この時はもう御父様は家庭にをられず——御祖母様と御母様の三大家族になられたわけです。御祖父様の遺骨を御墓に納めに行かれる時の感じを「かぎりなきもの、ひゞきの身にきたることは無之候ひき」と表現されます。非常に鋭敏な感受性を持つてをられるといふ事が、この表現でおわかりになると思ひます。その次の文章もすごい文章です。二十歳位の人が「しみじみと死の問題につきて思はされ申候」と表現されてゐる事について、皆さんも同年代なので、自分と照らし合はせながらお考へになると、この文章のすごさといふものがおわかりいたゞけるでせう。「ひとたび別れては再びあひ得ぬ」——一度別れてしまふともう二度と会へないこの世のことに「悲痛動乱の生を味はされ申候」。先生はここで、いろいろな生があるのではない、「悲痛動乱の生」しかないのだと言えるのです。人生そのものが「悲痛動乱」なのだといふ黒上先生の体験的かつ直感的認識だらうと思ひます。これは、人生に対しての深い認識です。「悲痛動乱」といふ言葉は、この黒上先生の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の中でも多く使はれてゐる大事な言葉です。人生が「悲痛動乱」だからこそ、学問に励まれたのですし、次の「同信海中に」——同じく信じてゐる人と人とのつながりに、「つながらせて頂き度念じ候」といふ強い哀願も、人生が「悲痛動乱」だからこそなのです。繰り返しますと、誰もが「悲痛動乱の生」を歩まざるを得

ないのだから、皆が一つにつながつてゆける道があるはずだと黒上先生は考へてをられたのだと思ふのです。

この書簡を読んで、僕は初めて黒上先生の肉声を聞いたやうな気がしました。それまで、黒上先生の著書に難解さのみを感じてゐたからです。この書簡を読んで、初めてこの本は黒上正一郎といふ男が書いた本なのだ、さう思つて読まなければいけないだと思ひました。それから、黒上正一郎といふ男の話が聞けるといふ気持ちで、この本が少しづつ読めるやうになつてきました。

「学に殉ぜり」

次に「黒上君之碑」といふ文章を見て下さい。黒上先生の碑は徳島市の佐古清水寺（せきみづ）といふお寺の境内にある黒上家の御墓の所に立つてゐます。これは、その碑文の漢文体の書き下しです。この碑文は黒上先生の御人柄が非常に端的にわかる文章だと思ひましたので引用いたしました。

「黒上君之碑」

あ、黒上君逝けり。何ぞ天、才を奪ふの早きや。君、名は正一郎、徳島市西船場街の人。考(父親)を益一と曰ふ。母は三木氏。少くして穎悟(きとく賢く)学を好む。初め徳島商業学校の業を畢へ、阿波商業銀行に入る。是より先、君自ら感ずる所有りて仏道に志す。学匠(学者)井貝智見師に就きて諸経典を修む。師、徳高く識博く、人に可として許すこと少く、独り君の操守の堅きを喜び、以て大成を期す。既にして銀行を辞し、専心学に従ひ尤も聖徳太子を尊信し、其の学を講明し、教へを興し道を弘むるを以て志と為し、刻苦研鑽、積年倦まず。東京帝国大学教授入澤博士宗寿の、事を以て来遊するに会す。君訪ねて説を質す。博士其の篤学に感じ、遂に君を大学に招く。其の蘊蓄する所を講述すること数次、造詣の深き、間前人未発の見有り。聴く者驚嘆す。君の名大いに著はる。人言ふ、太子の学は君を推して第一と為すと。松本彦次郎・三井甲之・井上右近・蓑田胸喜の諸先輩、皆君と交はるを悦び、而して諸生徳を慕ふ者相謀りて其の教導を受く。其の第一高等学校に在るは昭信会と曰ひ、東京高等師範学校に在るは信和会と曰ふ。君すなはち之を太子の遺教に稽へ、又、之を明治天皇の大訓に照らし、誘掖懇到(懇切にいねいに導き)躬行(自ら先に立つて行ひ)之を率ゐる。諸生心服して視ること慈父の如しと云ふ。昭和五年九月二十一日病を以て没す。享年僅かに三十一。甲者皆曰く惜しい哉此の篤学の上を失ふと。

佐古清水寺に葬る。未だ娶らず。君、平生知を近角常觀師に受く。師諡を命じて敬信正法居士と曰ふ。人と為り温雅にして、恭儉長に事へ、友と交りて藹然（氣持が和らぎおだやかなるさま）として情誼有り。体本強健ならざれども学を好み、道を求むるの篤きこと、数寢食を廢す。友人或は其の生を傷けんことを恐れ、勸むるに少しく休養するを以てするも、君意に介せず。遂に病を獲て起たず。学に殉ぜりと謂ふ可し。若し之に仮すに年を以てせば、則ち其の成る所必ず更に名を世に赫然（さかんなさま）とするもの有らん。何ぞ、天、才を妬むの酷なるや。余君と交りて親し。このごろ碑を建つるの挙有り。乃ち為に行実を略叙すること此の如し。其の学説及び著書の訓は、別に梅木正衛翁の撰述する所に具ふ。銘に曰く、

天、才学を授く、何ぞ命の長からざる。志業卓たる（すぐれたこと）有り、其人亡びず。

昭和八年癸酉四月

対南岡本由撰併びに書

（国民文化研究会刊「黒上正一郎先生のうたと消息」）

正しく黒上先生の一生は、「学に殉ぜり」といふ生涯でした。「殉ずる」といふ言葉は今迄

んど死語と化してゐますが、これは何かのために命を捧げると言ひます。だから、「学に殉ぜり」といふ事は、学問のために命を捧げるといふ意味です。黒上先生の本を読むといふ事は、「学に殉」じた人の本を読むといふ事になるわけです。黒上先生が求められた学問は、普通の学問ではなく、「道」といふ意味合ひが大変強いものです。

黒上先生の師に当たられる方に、「碑」の文章にも出て来ましたが、三井甲之先生といふ方がをられます。この三井先生が、黒上先生が亡くなられた四年後の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』が出版されました時、その巻末に載せられた長詩があります。ここに黒上先生が学問をする時の烈しさ、切実さといふものが描かれてをります。

黒上兄のことを思へば

どうしても忘るゝことのできぬのは

甲府市のほくのすまひを訪ねられた時のことである。

その時、ほくは村を去つて、こゝに対共産主義戦闘の陣地を前進せしめたときであつた。

(『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』二六四頁)

ロシアで一九一七年(大正六年)に革命が起こり、共産主義が世界に広がり始めます。日本

も例外ではありません。それに対して三井先生は果敢に戦ひを挑まれるわけです。思想戦です。言葉の戦ひなのです。

(中略)

この時に、黒上兄は、ぼくの狭まくるしい書齋に、夜ふくるまで語りつゞけたのであつた。その求道の熱情は、忘れやすくにぶりゆくぼくの心にも忘れられず、否、永久に忘れられぬであらう。

黒上兄の、緻密の質問に対応するに十分の気力を保つてをられなかつた僕の答はつひに無内容の返辞となりゆくのであつた。

その質問は「明治天皇御集研究」についてのそれと、三經義疏との参照についてのそれとであつた。

(同上)

この『明治天皇御集研究』(昭和三年五月刊)といひますのは、三井先生の代表作です。「三經義疏」は聖徳太子が書かれた三つの經典(法華經・勝鬘經・維摩經)の註釈書です。三井先生の研究方法論と聖徳太子の三經義疏を黒上先生はなんとか総合されようとされて、三井先生の甲府の御宅を訪ねられたのです。それが深夜の、徹夜の質問になつてゆくわけです。

しかし知識の不足と研究の怠慢とは、ほくの返辞を空虚の肯定とならしめてしまつたのである。

ほくは力なくもたゞ黒上兄の熱心に驚くのみであつた。

ほくは作業と休養との交代を説いたのであるが、その時はつひにそれを強い意志と結合せしむる氣力を欠いてをつたのであつた。

話しつゞくるうちに、あたりは静まり、夜はふけてゆき、やがて、そのあくる日の、暗い朝となりつつあつたのである。

やすみ給へ、とほくがうながせば、蚊帳をつらずに、これで十分ですといつて、机にもたせた蚊帳をかぶつて、一二時間もねむられたであらうか。

黒上兄は求道者の苦業をつゞけつゝ、その内心に往来してをつた思慮の細目をしづかにほくに語られたこともあつた。

(後略)

(同上)

ここに先程の「黒上君之碑」の中に述べられてゐた「学を好み、道を求むるの篤きこと」の具体的な姿が描かれてゐると思ひます。非常に烈しい勉強です。

黒上先生の生涯を調べてみますと、黒上先生は三井先生の御宅を一度しか訪問されてゐないのです。昭和三年の一回だけだつたらうと思ひます。三井先生の御宅を訪問され、徹夜で質問なされた、その帰りの事も三井先生が長詩に詠まれてゐます。

(前略)

わがふる里を

君とひまして

東^{ヒムガシ}の都にふた、びかへりますとき

わが家^ヤの北を流る、

さびしき河のほとりに

君と袂をわかちしときに

わが影の消ゆるあひだは

堤^{ツツミ}の上に

立ちとゞまりて、

わが影を

見おくりたまひし

君のこゝろを

忘れて思へや、

(後略)

(『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』二五八頁)

この詩にある「さびしき川のほとりに」といふ箇所を読みますと、先程言ひました「悲痛動乱の生」といふ言葉が思ひ出されます。さびしき人生といふのは、正しく「悲痛動乱の生」であり、そこに橋を架けるといふ事は、ここに述べてあるやうな、言葉をかけるといふ事だらうと思ふのです。相手の影が消えるまでの間は堤の上に立ち止まつて、ずうつと見送つてゐる、さういふ、人に対する思ひだけが、さびしい人生、「悲痛動乱の生」といふものに大きな橋を架けてくれる、人と人との間につながりを持たせてくれるものではないだらうかと思ひます。

三井先生の二つの詩を読みましたが、学問に対する烈しさ、道を求める強さ、人に対する気持のかけ方、それらが、黒上先生をよく知つた方の、具体的な体験として述べられてゐると思ふのです。

文化の戦ひ

さて、少し皆さんには奇異に感じられるかも知れませんが、御紹介したい文章があります。これは、いはゆる自然主義の作家正宗白鳥氏が、昭和三十四年に文芸評論家の江藤淳氏と対談した時の文章です。

いまさつき、ローマの前のエトルスク美術の展覧会を見てきたんだが、それは紀元前五世紀から八世紀ぐらいまでのもので、幾変遷をしている。エトルスクは百年ばかり続いていた国だな。初めギリシャの感化を受けて、それからサラセンに侵入され、ついにはローマに化せられてしまった国なんだ。（中略）そこでは、はじめは自分たちの文化を持って、来世というものはこの世の続きだ。おもしろい来世があるんだと信じて、楽天的気分でした。それが陶器にも現われている。それが次第に外国に攻められるし、それから生活の交流もあったので、そこにいろんな空想が入れられるんだな。そうしてしまえば、実に人生はかなしいもの、ということになった。そういうときに、どこかに救いがあるものだが、エトルスクにはなんの信仰もないんで、救いは全然ない。（中略）そういう社会は、僕

は昔、たくさんあったと思うんだ。五十年、百年栄えて、まるで残酷に扱われて亡んだりした社会……。

（正宗白鳥 対談「日本文学の流れのなかで」昭和三十四年）

日本が豊かになり、国際的地位が高まつて、国際交流が盛んになつてゐます。僕らは、ギリシア文化とオリエント文化が融合してヘレニズム文化が生まれたことを、何か素晴らしい事のように教へられました。考へもなく、文化と文化との交流を美しいこととして認めてゐます。しかし、この正宗氏の文章に書かれてゐる事は、文化と文化との交流接触に於いて、一方の文化がはつきり滅ぼされてしまふ時があるといふ事です。人生は楽しいと思つて生活してゐた国民が、外来文化との交流接触の後に、人生は悲しいものだと思ふ様になるのです。これは、エトルスクの文化が負けたのです。恐い事だと思ひます。

さういふ事がどうして今日の日本に起きないと言へませうか。日本の文化だけが滅びないといふ保障はどこにもないのです。文化と文化とが出会ふといふ事が、ハッピーエンドで終はるといふ保障は全くない。日本人が常に外来の文化と戦つてゐなければ、負ければ、日本の文化は滅びるのです。

この事に関連して、黒上先生が日本の歴史をどう見てをられたかに触れたいと思ひます。

非常にグローバルな見方です。

我が國民生活は外來文化との接觸によつて前後二回の重大轉機に遭遇したのである。先に東洋文化を受容せし推古朝と、後に西洋文化を輸入せる明治時代とは正に此の二大轉機に外ならぬのである。而も國民はこの重大時機に當つて、かくの如き指導的人格を國民生活の核心たる皇室に仰ぎまつたのである。近く、明治天皇の大御稜威の下に、わが民族が内、平等に皇化に浴せしめられ、外、世界文化に有力なる地位を確立したることは、われら國民の等しく仰ぎまつるところである。この心は又遡つて推古朝の時代に大陸文化を批判綜合し給ひ、わが國民を哀愍教化せられたる、聖徳太子を憶念しまつるのである。

(『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』二頁)

これが黒上先生の太子研究の大きな理由なのです。外国文化との接觸によつて非常に重大な轉機を迎へる。日本は明治時代に西洋文化を輸入し、それによつてもたらされた外來文化の交流接觸についての結論はまだ出てゐないわけです。現に今も交流接觸を続けてをり、戦ひつゝ、あるのです。

黒上先生の「太子の人間洞察」観

昭和三年、黒上先生が亡くなられる二年前に、一高生の重松鷹泰さんといふ方に宛てられた書簡の一節によつて、黒上先生の聖徳太子研究の具体的な事に触れてゆきたいと思ひます。

太子が当時の大陸の思想学芸をひろく御探究遊ばせしに拘らず、それらの理論よりも先づ人としての体験「共にこれ凡夫」と仰せられしごとき人間の欠陥罪惡の反省求道より出発せられ、そこに自己が自ら英雄として超越するのではなく、相共に凡夫として相助けあふべき協力の人生を念じたまひしところに吾らのひとしくゆくべき道の体現宣布者としてのみ心を仰がしむる次第であります。

(『黒上正一郎先生のうたと消息』)

太子は当時の大陸の儒教、仏教といふ非常に優秀な学問を体験融化してをられる、最高の知識人です。それにもかゝらず、太子がさういふ該博な知識や、知的理論よりも、人としての現実の体験を重んじられ、「共にこれ凡夫」といふ体験を告白してをられることに黒上先生は着目されるのです。この「共に凡夫」といふ表現は、十七条憲法の第十条に出てまいりま

す。黒上先生の書簡からは少し離れてしまひますが、先に第十條を読んでみます。

十、に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心各執有^上り。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖に非ず。彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎^なぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、環^{み、がわ}の端無きが如し。是を以て、彼の人瞋^{いか}ると雖も、還^{かへ}つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧^あげへ。
 (『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』二二六頁)

「忿^{がみ}」も「瞋^{しん}」も怒りといふ意味です。怒りを捨てなさい、人が自分と違つてゐる事を怒つてはいけません。皆、心を持つてゐる。心といふのは執着しやすすいものだ。彼がこれを良いと言ふ時は、自分は駄目だと言ひ、自分が良いと言ふ時には、今度は彼が駄目だと言ふ。かういふ経験^{けんげん}を皆さんは班別討論などでしませんでしたか。彼の言ふ事の逆をいつも言つてやらうとか、彼にだけは負けたくないとか、自分よりも優越^{ゆうえつ}したものを認めたくないとか、さういふ邪^{よこしま}な、傲慢^{ごうまん}な心がいつも人間の中にあるのです。太子はそれを凝視^{けいし}してをられるのです。しかし、自分だけは別だと太子は言はれてゐるのではないのです。自分は必ずしも聖人ではない、彼は必ずしも愚者ではない、「共に是れ凡夫のみ」、お互ひに欠陥^{けつがん}を持つてゐる人間で

はないかと、言はれるのです。だから、これは太子自身の告白なのです。お互ひに凡夫だから、相共に助け合ふ、協力の人生を太子自身が願はれた、さういふ所に我らの等しくゆくべき道、皆が歩いてゆける道がある、太子は自らそれを体現なさり、そしてそれを「宣布」された。さういふ太子の御心を黒上先生は仰がれてゐるのです。

ここで黒上先生の書簡の続きを読みます。

そして太子の御著述を辿り又片岡山に飢ゑて死せる乞食をあはれみ給ひし御うたの内容を辿るとき、太子が人と共にと仰せられしみ心には、名もなくして終り或は悲痛な運命にくるしみ死しゆくごときひとの生を洞察同感あらせられし痛切なる人生観、人のなやみをわがなやみと感ずる切実の人生体験を内容とすることを偲はしめます。

「名もなくして終り或は悲痛な運命にくるしみ死しゆくごときひとの生」とは僕ら自身の「生」でせう。僕らは恐らく名もなくして、あと何十年か経てば、死んでゆくのだらうと思ひます。それは、大多数の国民が歩む道なのです。そこに意味のある道をつけなければ、英雄の道だけに意味があるのであれば、僕らに生きてゆく意味はないのです。

聖徳太子の御著述は、思想混乱の時代にあつて、いかに生くべきかを問うて、生き迷ふ国

民の「くるしみ」「なやみ」をわが「くるしみ」「なやみ」とされる痛切な文章であると黒上先生は憶念されてゐるのです。

黒上先生の文章は昔より難解をもつて聞こえましたが、それは切実・痛切な人生体験を内容としてゐるのです。

われらが祖国・日本を、
真の独立国に立て直すには

国民文化研究会理事長
小田村寅二郎



ハナシノブ（ハナシノブ科）

現在の日本の教育・学問の一般的傾向は、祖国日本のすばらしい歴史・伝統について、かなり自信を無くしてゐるが、なぜさうなつたのか

マッカーサーの占領政策の内容

朝鮮動乱の勃発

日本人の精神は骨抜きにされてしまつた

東欧諸国民の共産党独立からの離脱宣言を、われわれ日本国民はどのやうに受けとめるべきか

一日も早く「占領政治終結宣言」を

「立体的なもの」(歴史・伝統)を勝手に「平面的なもの」(現在のな感覚)だけで判断してしまつてはならない

日本語・日本のことばもまた、長い年月をかけて祖先たちが創造してくれた「立体的なもの」の一つである。それを守ることも国を守ることになる

今日は、「われらが祖国・日本を、真の独立国に立て直すには」といふ題を付けました。日本は今、紛れもない独立国の形態と体制を整へてゐますが、中身はといふと、必ずしもまともな独立国らしからぬ状況のまままで推移してゐますので、これをなんとか名実ともにそなへた独立国にしたいといふのが私の素志でございます。さういふ意味でレジュメを整へて皆様のお手元に差し上げたいです。

現在の日本の教育・学問の一般的傾向は、祖国日本のすばらしい歴史・伝統について、かなり自信を無くしてゐるが、なぜさうなつたのか

昨日の黛敏郎先生の御講義のあとで、早稲田の学生さんが、「なぜさういふ日本になつてしまつたのか」といふ質問を出されましたが、私も、「なぜさうなつたのか」といふことは非常に重要なことなので、それを中心にお話いたします。

といふのは、従来この合宿の講義では、極東裁判、いはゆる東京裁判で生み出された歴史観に縛りつけられた状態から一日も早く脱却しなければならぬ、と繰り返し叫ばれたのですが、なぜそのやうなたわいな思想が日本にはびこつてしまつたのか、について、一度は講義しておくのが良からうと思つたからです。レジュメをごらんください。

「皆さんはマッカーサーの占領政策なるものについて、概括的には知つてをられるが、具体

的には、どういふものだったのか、それをお知りになつておく必要がある。今日は皆さんと共に、連合軍最高司令部（GHQ）が占領中に強制した政策を、具体的に振り返つてみます。」

もう戦後四十五年を経過してゐますから、皆さんはマッカーサーの占領時代といふものは直接体験していらつしやらない。したがつて、直接体験をしなかつた当時のことを、私のお話を通して今日はここで「追体験」して欲しいのです。「追体験をする」といふことは、昔の時点に自分の心を移しかへて、そこに自分も生きてゐたかのやうに自分の気持ちを整へて、その時々、の事象に自分自身が対応する、あるいは当時の人々の対応の仕方を味はひ返してみる、といふことです。この「追体験の努力」をすることは、大切な学問の仕方ですので、そのつもりで努力して下さい。

マッカーサーの占領政策の内容

昭和二十年（一九四五年）降伏後の日本は、連合軍最高司令部（マッカーサー）の占領下に入りましたが、連合軍最高司令部マッカーサーは、「指令」「覚書」などの形式で色々な命令を次々に出してきます。日本の側には終戦連絡中央事務局といふものが作られてをり、



この終戦連絡中央事務局へそれらの命令を伝達しました。中央事務局は、それを受け取った場合は、その内容が、経済問題であれば大蔵省に、教育問題であれば文部省にといふやうに各省に伝達します。それを受けた各省は、それをそのまま「国内法」として日本がその政策を実行する、といふ仕組みになつてみました。

因みに、この占領管理によつて出された指令は、外交関係二六六件、軍事関係四九件、政治関係九二件、経済関係七二二件、社会関係四〇件、文化関係四〇件、司法関係一八件、合計一、二二七の指令・覚書等が出されてをります。その一、二二七の指令・覚書等の中から、私は重要なものを拾つて皆さんにご説明したいと思ふのです。そこで、まづかういふことを念頭に入れてください。昭和二十年の八月五日に日本は連合国に対して降伏いたします。同時に

終戦の御詔勅が出されます。それから、二週間経た八月二十九日にマッカーサーが軍用機に乗つて来て、厚木飛行場に着陸して日本に足を印します。そこで本格的な占領政治を開始する体制が連合国軍側に出来ませんが、具体的にはアメリカが中心になつて次々にさまざまなのが出されてくるのです。

八月二十九日にマッカーサーは日本に着いた。数日をおいた九月二日から次々に指令が出されてきます。九月二日に指令第一号として、まづ、一切の日本軍に対し、戦闘の即時停止と武装解除等を命令。武装解除といふのは、武器に関はるものは一切放棄しなさいといふこと。丸裸の軍人にしてしまふ、といふ命令です。その段階で日本は武器がない国になりました。それが九月二日です。

翌九月三日になりますと、指令第二号として、今後は占領軍が活動するための用意です。「占領軍へ石油、労務、住居、飛行場を全て提供せよ」といふことで、「石油はほとんど占領軍に出しなさい、労務も無限に用意しておけ、住居、連合軍の将兵の住む住居は直ちにしかるべきところを空けて入れるやうにしろ」となります。私の経験の中で、私の家の隣はかなり大きな邸宅でしたが、それが住居提供に該当しまして、とにかく「即刻出て行け」となりました。するとそのあと、建物の中を調べてアメリカ人や外国人が住みやすくなるやうに直ちに修復にとりかかりますが、修復するのは労務です。だから、日本人の技術能力その他を

即日稼働させて、彼らの住居が設営されていきました。ですから、その辺から日本人は、何もかも占領軍の命令に従つて協力させられる体制に入るわけです。

そして、更に一週間たちますと、色々な不満が国民の中から出ます。それに対してまづかういふ命令が出ます。「言論及び新聞の自由に関する覚書」。覚書に違反した場合は、その印刷物は発行停止にする。また、連合軍の動静及び間違つた風説を出した場合は、その出版物は発行を禁止にする。これで、まづ言論を抑へました。

翌日、直ちに五つの大改革指令といふものを作りまして、マッカーサー自身が当時の日本の総理であつた幣原喜重郎男爵に口頭で指示いたします。

まづ、参政権賦与による婦人解放。日本の婦人には全て参政権、投票権を与へよ。それから労働組合の助長、資本家に対しては労働組合を強固なものとして発達させる。その次、教育の自由化と民主化。教育に対する指令は実に厳しいものが次々に出ました。

また、秘密の検束及びその濫用の廃止。日本の国内にはやはり一般的な犯罪もありますから、それは日本の警察に取り締まらせるべきですが、その場合でも秘密的な検束をしてはいけない、濫用してはいけない、といふ厳しい枠組みが張られたわけです。それから経済機構の民主化も命ぜられました。

それから十日ほどたつ十月二十二日に、「日本の教育制度の管理に関する覚書」といふ形

で、教科書・教材から軍国主義的な箇所を除去を指令。今までの日本の文部省を中心として小・中・高校等で使はせてゐた教科書の中に、軍国主義的な箇所があれば、それを削除せよ、といふ指令が出て来たわけです。それに従つて日本の役人・教師・生徒たちが協力させられるわけですから、向ふの言ひなりにやらなければならぬ。いざ削除するといつても、本を直ぐ作り替へる経済力はありませんから、墨の筆でそこを黒く消すのです。『墨塗り教科書』といふ言葉がそこに流行り出しました。子供たちは、中学生や高校生が持つてゐた教科書にみんな墨で箇所をつつ、あるいはあるページ全部を『墨塗り教科書』にしたものです。日本が戦争で降伏して二ヶ月たつたらもうさういふ状況になつてゐた、とご理解いただければよいと思ひます。

その十月の末にはつづいて、「教職ページ指令」といふのが出ます。子供たちを教へる教職員の思想調査、資格決定に関する覚書。今までは文部省その他の規約によつて資格をもらつてゐた先生でしたが、新しく占領軍が教員の資格を作つてきたわけです。かくかくしかじかの前歴のある者、またさうしたことを主張した者、これらは教職には相応しくないから追放せよ、との指令が出たのです。これで、軍国主義者及び占領軍に反意を示す者は一切、教職の地位には就いてはいけぬ、といふことになりました。

さらに十一月六日になりますと、今度は財界に対して「財閥解体指令」といふものが出ま

して、三井・三菱・住友・安田等の四大財閥が解体させられます。一例で言へば、三菱財閥の傘下には、三菱重工業・三菱セメント・三菱商事その他がコンツェルンをなしてゐたのに対して、それぞれを切り離させてしまつたのです。一つ一つの企業を一つづつ独立させたといへば、大変いいことのやうに取れますが、実はその三菱といふ大財閥が持つてゐた経済界における機能を潰したわけです。それは三井も、住友も、安田もさうだつたといふことでした。

そして十一月十八日、「皇室の財産に関する覚書」によつて、皇室及び皇族の財産を封鎖し、一切の取引を禁止させ、皇室経費も封鎖。要するに皇室並びに皇族が持つてをられた色々な財産を全部封鎖してしまつて、勝手にそれを使ふことは許しませんよ、と指令して、天皇さまの周辺及び各皇族家の資産を全部動かさないやうにしてしまつたのです。そしてその二週間後の十二月二日、梨本宮殿下以下五十九名に対して「戦犯逮捕指令」が出され、戦争犯罪人として逮捕、一応牢屋に入れてしまふ、さらに一週間後の十二月九日には、「農地改革指令」が出され、不在地主の土地は小作人に売却すべし、となります。要するに、今までは農地といふものは地主があり、その下に大勢の小作人がその土地を借りて耕作し、小作人は出来たお米の何分の一かを地主に地代として差し出す、といふのが、地主と小作人の関係でした。それはよろしくないから、地主は自分が耕作して生活する分だけは残してよろしいが、それ

以外は小作人に譲り渡しなさい、といふことで、日本の農業はそこで大きく崩れていつたわけです。

更に重大なのは、その十二月の十五日に出た「神道指令」なるものです。正確には「政府による国家神道・神社神道の保障・支援・保全・監督に関する覚書」といふ名前の指令です。日本古来の民族的習俗ともいふべき神道を宗教の一つと規定し、信仰の自由に従つて国家から切り離すべし、との断定を占領軍が下したのです。すべての神社が、それまでの内務省の神社局を経て受けてゐた資金援助を完全に封鎖され、各神社ごとの自立が命ぜられたこととなります。それに合せて公教育における神道の禁止。小・中学校は義務教育ですから、そこで神道に関する授業をしてはならない。『神まつる昔のてふり』も教へてはいけないし、神話も全てカットとなり、要するに神道に関することは全部潰された形になります。二週間後の新年を迎へますと、占領軍の命令で天皇は「詔書」をお出しになります。それが一月一日の「新日本建設の詔書」で、世にいふ『天皇の人間宣言』とマスコミが名付けたものです。『天皇は神（現人神）ではない』旨が折り込まれた詔書でした。

さきの十二月十五日の「神道指令」とこの「新日本建設の詔書」の中で、皆さんがぜひ忘れないで記憶していただきたいことがあります。それは、英語で意味するゴッドと、大和言葉でいふカミ（神）は全く違ふ内容であるにもかかはらず、GHQも、GHQに協力してゐ

た日本の知識人たちも、ともにそれに気づかず右の指令を出し、天皇の詔書を要求した、といふ点です。キリスト教のゴッドは、全知全能の神格をもつた存在であり、かつ人間は絶対にゴッドにはなれない、とされてゐます。従つて、生きながら神であるといふ「現人神」といふ表現は、キリスト教のゴッドとしては絶対に容認できないのは、もつともなことです。ところが、大和言葉のカミ（神）は全く違ひます。生きてゐたときに素晴らしい人物であつた、とみんなが讃へ、死後もお慕ひ申し上げる人が、死んだあとにカミ（神）として祀られてきました。明治天皇の御製の中にも「あた波をふせぎし人はみなと川神になりてぞ世を守つたものです。生きてゐた時はあた波（国賊の意）、皇室に齒向かふものと戦つた楠木正成ですが、生きてゐた時の志が讃へられて、その死後には湊川神社に神として祀られたのです。それが日本語でいふカミ（神）の実体です。ゴッドとは全く異質であることがお判りです。明治の初めに聖書と讚美歌を日本語に翻訳するときに、ゴッドを神と訳したのが間違ひのもつたのだのです。もつと昔の織田信長、豊臣秀吉の時代では、ゴッドはデウスと翻訳されてゐて、少なくともゴッドとカミ（神）を一つにはしなかつたのです。要するに、明治の初めの翻訳のときに大失敗をしてしまつたのです。外国文化の輸入に対しての配慮が欠けてゐた、といふほかはありません。日本が戦争に負けて占領軍の支配を受けるに至つたときに、その

間違ひの最たるものが「神道指令」と天皇に「人間宣言」を強要するといふ占領政策になつたわけで、このことはぜひ忘れないで記憶いただきたいと思ひます。

この二つが出された中間の十二月二十二日、GHQの間接指令により、文部省によつて伊勢神宮の遙拝等は学校の行事にしてはならない、学校の先生が生徒を引率して神社を参拝したり遙拝することはいけない、とされてきましたが、これらはみな「神道指令」の続きですね。

そして占領された年の最終日の十二月三十一日には、GHQから直接出た覚書で「修身・国史・地理の学科課程停止に関する覚書」といふのが出されます。要するに、日本で教へてゐた修身とか歴史とか地理はみな軍国主義なのだ、だから、さういふ教科書そのものを廃止させる、となります。この年の大晦日に、修身・国史・地理の授業は、日本の小・中学校から完全に消えていつたわけです。

年が明けて一月四日には、いよいよ「公職追放令」が出され、各界の指導層を再び公職に就けてはならない、として追放いたします。そして、次の月の二月十三日、早くもGHQは勝手に「日本国憲法の草案」を作ります。そして、それを政府に渡し、「これを何日以内に決めろ」と言つてくるのですから、めちやくちやな専断を強制してきました。（そしてわづか一ヶ月足らずで内容が決められ、八ヶ月後の十一月三日に公布となりました。）

二月二十九日には、「刑事裁判権の行使に関する覚書」によつて、連合国人及び法人には、日本の裁判所は刑事裁判権を行使してはならない、と指令します。占領軍に關係する法人にも個人にも日本の裁判権は何も及ぶことはできない、となります。一方、日本人に対しては、占領軍に対する反対とか、占領目的に反する行為をした場合には、占領軍の裁判でどんどん処理していく、と宣言したわけです。日本人の身辺が一層厳しくなつてきたことがお判りです。

三月三十日になりますと、米教育使節団の報告書を日本側に渡します。従来は小学校は六年、中学校は五年でしたが、高校を合せて「六・三・三制の制度に変へよ」となります。制度を変へるといつても、これは大変なことを日本はやらされるのです。中学校の五年制を、中学は三年、高校は三年の二つにするには校舎が一つ足りません。新しい土地を求め校舎も作らなければ六・三・三制は実行できません。戦後の日本には財政力も何もないのですが、そこへ「直ちにそちらへ向けてスタートせよ」といふ指令が出たわけです。具体的にはその翌年、昭和二十二年、一九四七年四月一日、GHQの間接指令により六・三・三制発足、新制中学・新制高校の発足となり、教育関係者や地方の自治体は、死物狂ひになつて取り組まなければならなくなりました。

かくして昭和二十一年五月三日、「極東軍事裁判」が開廷されます。いはゆる東京裁判がス

ターゲットします。戦争責任追求の法廷が出来ました。そして十月八日には、それまでは日本国民のバックボーンをなしてゐた「教育勅語」の奉読をしてはいけない、と決められます。さらに二年後の昭和二十三年、一九四八年六月十九日には、GHQの間接指令により、衆議院では「教育勅語等排除に関する決議」をさせられ、参議院では「教育勅語等の失効確認に関する決議」を、わざわざ両院にさせてをります。

話を二年前の昭和二十一年に戻しますと、さきに申した「日本国憲法」の公布が十一月三日、それから九日間経た十一月十二日にGHQの間接指令により、「現代かなづかひ・当用漢字」の強要使用を閣議で決定させられます。これから先は、現代かなづかひや当用漢字で全ての公文書を作らなければならなくなりました。十二月二十四日には、十一宮家が臣籍に降下され、十一の宮家は普通の国民の籍である臣籍に降りられます。ついで十二月三十日、GHQの間接指令により文部省は「六・三・三制教育」を実施する制度を決め、翌年の四月一日にスタートさせることとなります。その四月一日の前日、すなはち昭和二十二年の三月三十一日に、「教育基本法・学校教育法」の公布・施行がありました。この二つの法律に基づいて六・三・三制を実施に移せ、といふわけです。

そして、その二十二年十二月二十二日には、GHQの間接指令により「改正民法」が公布され、これと同時に、大事な「家族制度」が否定されました。親子、更にその先代からずつ

と続いてゐた各家庭の家族制度ですが、一人一人の人間は、みんな一人一人独立してゐるのだ、といふ考へ方によつて、家族制度もよろしくない、かういふものはこれからの時代には向かない、だから廃止だ、と民法で謳つていくことになります。この辺までの占領政策によつて、日本人の精神は、伝統的なものからほとんど離脱させられてしまつたやうです。

やがて昭和二十四年になりまして三月七日に、ドッジ・ライン——ドッジといふ人が日本の経済金融政策を中心とした声明文を発表して、以後の日本の経済・財政・金融の行くべき道、向かふべき所を方向付けました。——を、日本に勧告いたします。『勧告』といつても、命令と同じですから、実行するしかありません。これは大変厳しい政策のやうでした。

朝鮮動乱の勃発

ところが、昭和二十五年、一九五〇年の六月二十五日に朝鮮動乱が勃発いたします。北朝鮮が南朝鮮に侵入してきて戦争が始まるのですが、北朝鮮側にはソ連、中共が、南朝鮮側にはアメリカが後押しをいたします。

アメリカはここに到つて、日本の占領政治を少しづつ緩和しなければだめだ、と気付きました。朝鮮動乱が勃発すると約二週間足らずの七月八日に、「警察予備隊創設指令」といふの

を出します。軍備は完全に認めてをらず、警察だけしか残してありませんから、「警察の中に予備隊（兵隊らしいもの）を作れ」と言つてきたわけです。お巡りさんたちのうちの一部を兵隊さんにしなさい、との指令です。

朝鮮動乱の開始によつて、アメリカは共産主義といふものが恐いものだ、とはじめて気付いたので。そこで、GHQの中にはびこつてゐた共産主義者たちを、まづ自ら排除します。そして、同時に、七月十八日には、「共産党の『アカハタ』及びその後継紙の無期限停刊借置指令に関する書簡」といふのを、マッカーサーが出しまして、あらゆる報道機関における共産主義者の排除を指令します。

でも、占領開始から五年間にわたつてはびこつてしまつた言論機関の中の、左翼勢力、共産主義者たちは、幾らでもカモフラージュをする道を十分準備してをりましたから、目的を百パーセント達成することは出来ません。表向きはレッドパージをやつてみても、その中に共産主義者並びに共産党シンパ等が残つてしまひました。それは今日に及ぶ言論界の左翼的傾向が生きつづけてゐること十分証明されます。七月二十四日には、GHQ民生局が新聞協会代表に対し、レッドパージを勧告。かなりの人々をパージできましたが、しかし時すでに遅しでした。

かくてその翌年、昭和二十六年、一九五一年九月八日に、日本は「サンフランシスコ講和

条約」を締結します。アメリカなど四十八ヶ国との条約と、それに調印しなかつた諸国との二国間条約によつて、日本の個別的・集团的自衛権を承認し、日本の再軍備と外国軍隊の駐留継続を許容し、併せて朝鮮の独立、台湾、澎湖諸島、千島列島、南樺太の領土権を日本は放棄する、と規定しましたが、放棄はしたものの、帰属先についての言及がなかつたために、その後、ソ連は、占領してゐた千島列島を依然として武力制圧して今日に及んでゐることに なります。いづれにしても、朝鮮動乱を経験させられたアメリカが、対日感覚を大きく転換したことは、疑ふことなき事実でした。

日本人の精神は骨抜きにされてしまつた

以上で、マッカーサーによる日本に対する占領政治の要点をお話しましたが、果たして皆さんは本当に追体験しながら考へてくださったでせうか。昭和二十年の九月二日の「指令第一号」から、さきほどお話したまでの正味六年間のことを、あなた方のお父さんやお母さんが、当時の一国民としてどのやうに受けとめられたか、その辺りのことも、皆さん各自の追体験の努力を通して心に浮かべて見てほしいのです。

私はさきほど、「講義要旨」のレジюмеに、「なぜ日本人はそのやうな意気地なしになつた

のだらうか」といふことを書きました。初めて戦争に負けた、といふ初体験の中で、占領軍が次々に出してくる指令に対して、「ああ、またさういふことをするのか、またさういふことをするのか」と思ひ続けてゐるうちに、いつの間にか本来の日本人の気質とはちがつたものの考へ方の人に変へられていかざるを得なかつた、といふのが真相であつたかもしれませぬ。

また、マッカーサーから大きな支援を得た労働組合はわが世の春を謳歌して、企業主と対決し出しましたし、日教組といふ教員たちの組合は、子どもたちを人質に取つたやうな傲慢な姿勢で、日本の歴史・伝統に反旗をひるがへす、といふ世間になりました。また、東京裁判で打ち出された自虐的な祖国軽侮に流された進歩的文化人を名のる人が、言論界・マスコミをほぼ占拠したことによつて、結局、労働界、教育界、言論界といふ国民思想に重大な影響力を持つ三本柱が、天下を我がもの顔に闊歩したのだから、それが世相に定着してしまひ、どうにもそれから抜け切れない国民になつてしまつたのも、致し方がなかつたことかもしれない。このことをよくご理解していただきたいと思ひます。では、これからどうするのか、が問題になりませう。

東欧諸国民の共産党独裁からの離脱宣言を、われわれ日本国民はどのやうに受けとめるべきか。

一九八九年の夏以降、東欧諸国は、曲がりなりにも、名実そなはる独立国家への道を次々に歩み出しました。このことは、第二次大戦が残した不自然な後遺症を、当該国民が自力を以て清算しつつある姿とみてよいと思ひます。東欧諸国民によるさきの政変を、このやうな視点でとらへてみますと、かつて占領政治によつて傷だらけにされてしまつたわが国の文化伝統や歴史伝統について、あるべき姿の恢復と復活について、いまだ一向に氣力を燃え立たさうとしないことは、われわれ日本国民一人びとりの祖国日本への忘恩と怠慢である、と氣付いてよいのではないか、と私は切に思ふやうになりました。戦争に敗れたとはいへ、あるべき姿の日本は、祖先が築き上げてくれたさまざま文化の中に、燦然と息づいてきたものですし、占領によつてそれらに覆ひ被せられたベールを、一つ一つ剥ぎ取つていくことこそ、これからの日本国民に課せられた使命と思ふからです。東欧諸国民がそれぞれの、*「祖国への回帰」*を示してくれたことを、われわれ日本人は、*「他山の石」*として、我と我が胸の中に受けとめたいもの、と思ふのです。

一日も早く「占領政治終結宣言」を

そこで、わが日本の「祖国への回帰」のためには、いつの日にかわが政府によつて、堂々とした姿勢を以て「占領政治終結宣言」が宣せられる必要がある、と思ひます。日本の歴史・伝統にベールを被せたのは、いふまでもなく「東京裁判史観」といふマルクス主義と西歐物質主義とのミックスした化け物であり、それと歩調を合せて占領軍が次々に打ち出した歴史・伝統の破壊を狙つての（具体的には日本人の愛国心を摩滅させるために立案させた）諸政策の強要施行とでありました。従つていつの日にか出されるべきわが「占領政治終結宣言」に盛り込まれる内容は、「東京裁判史観」と「歴史・伝統破壊を狙つての諸政策」の二点にかかはる「天業恢宏」の志を主軸にして作るべきだ、と思ふのです。その「宣言」と共に葬り去らるべきものは沢山ありますが、①ナンセンスな内容で綴られてゐる「日本国憲法と教育基本法」のそれぞれの「前文」。②占領終結と共に自然廃棄の運命にあつたはずの、昭和二十年十二月十五日に出された「神道指令」。③当然ながら復活が宣せられるべきものとしては、イ、「大日本帝国憲法の第一条」の内容。ロ、日本国民の精神生活の基盤として欠くべからざる「教育勅語」。ハ、既往の「祝祭日とその名称」。ニ、四大節の「奉祝唱歌」。ホ、太平洋戦

争といふ占領軍が強制した名称を捨てて、本来の日本の名称であった「大東亜戦争」の名称の復活。へ、人生の自然な推移を示してゐる「数へ年」年令と満年令との併用（戦前の日本での慣習）。等々、数へあげればきりがありません。

いつの日にか、それも出来るだけ早い時期に、占領政治から完全離脱する、との宣言を、われわれの政府が堂々と発しなればならないと思ひます。それをきつかけにして、さきほど来細かく説明してきましたGHQが出した指令・覚書等はその場で全部一応の効力を失はせます。その上で、一つ一つを吟味し直すことに取り組む、といふのが、私の主張であり、願ひなのです。立派な政治家が出て来て、それに対応してくれさへすれば、見違へるやうな美しい日本に変つていくであらうし、さうした気運を全国津々浦々から湧き上がらせる努力に取り組むことが、日本を立て直す第一の道、と思ふからです。

「立体的なもの」（歴史・伝統）を勝手に「平面的なもの」（現在の感覚）だけで判断してしまつてはならない

歴史・伝統は長い時間をかけて出来たもの、仮りにこれを「立体的なもの」と名づけてみますと、これらは追体験によつて判つてくるものです。それを、「平面的なもの」すなはち現代感覚だけで判らうとしては駄目なのです。

歴史・伝統といふのは、その時々々に素晴らしい人物が登場しますが、生きてゐた時に書き残した文章、和歌、また行なつた事蹟もあります。それらは、その時代時代において書かれたり詠まれたり、なされたりしたものですから、その時代にわれわれの方から出掛けて行く心を整へて、どんな思ひでなされたかを味はうと努力しながら追体験してゆけば、こちらの心が鍛へられていきます。さうしてこそ、歴史も伝統も今のわが心の中に活き活きと甦つてきます。それをしないで、現代的な感覚だけに頼つて過去のことをとやかくあげつらふのは、大変な間違ひだ、と私は思ひます。

さきほどは、いつの日にかわが政府によつて「占領政治終結宣言」が出されて欲しい、それを私は心から願つてゐると申しましたが、政府に頼つてゐるだけでは、これはいつまでたつても出来さうにありません。国民の中にさういふ氣運が盛り上がつてきて、今のままで、まともな日本人の生活はできかねる、といふ声を下から盛り上げて行くしかなからう、と思ひます。その辺りに国民の足並みが揃つていけば、政府もいつの日かそれをやらざるを得なくなると思ふからです。

日本語、日本のことばもまた、長い年月をかけて祖先たちが創造してくれた「立体的なもの」の一つである。それを守ることも国を守ることになる

ドイツの哲学者であるフィヒテといふ人は、ベルリン大学の学長をなさつたかたですが、一八〇八年、四十八歳の時、ベルリンにフランスのナポレオン軍が侵入、軍馬のひづめの音、太鼓の音を打ち鳴らしながら攻めてきました。そのときにフィヒテはナポレオン軍の軍鼓の響きを聞きながら、「独逸国民に告ぐ」といふ大演説をしました。この演説は大変長い時間をかけてなされましたが、この中でフィヒテが最も主張したことは、「ドイツ人の魂がこもつたドイツ語といふ言語を、この戦争によつて失ふことがあつてはならない」といふことでした。単に「ドイツを守れ」といふのではなく、「ドイツ語を守らうではないか」と演説したのです。フィヒテは、「民族と民族のことばとが結びついてゐるときこそ、国は守れるのだ」と叫んだのです。私は若い頃これを読んで大変感動したことでした。今の日本では言葉が乱れてきてゐますし、テレビ朝日のやうに言語道断な言葉を勝手に自分で作つて、使ふべからざるところで（皇室に関する報道）自分たちの勝手に作つた言葉をしゃべる、などといふ事態になつてきました。（講師は、講義の中で「GHQの占領政治、ならびにGHQ作成の憲法草案に基づく日本国憲法の登場、および極東軍事裁判（東京裁判）」によつて造り出された『歴史観』を、今なほ後

生大事に信奉してゐるわがマスコミ界・進歩的文化人層の持つ「物の見方」は」と題して、今なほ活躍してゐる反日本的な勢力の一例として、即位の礼並びに大嘗祭に関する平成二年七月十日のテレビ朝日「ニュースステーション」の報道内容に言及した。このことについては、月刊『国民同胞』平成二年八月号、小田村「放送関係者が『即位礼』の内容について語るときは、古式ゆかしいその伝統形態に対して、それなりの「慎み深さ」が必要、と思ふ——七月十日のテレビ朝日の放映に寄せて——」をご覧いただきたい。日本の言葉の中には、敬語といふ特殊な言葉づかひがありますのに、それが使へないテレビ記者といふのも、情けない限りです。それでは、日本の歴史・伝統と付き合ふ道も閉ざされてしまひます。テレビの前でペラペラしやべるのは器用かもしれませんが、その心根に到つては、正に日本のテレビの記者であるとは到底評価できない。さういふ評価できないやうなことは、新聞その他にも、あるいは週刊誌でも氾濫してゐます。といふことは、日本語がめちやくちやになりつつあるのです。日本語がめちやくちやになるといふことは、その言葉をしやべつてゐる人の心が、日本の歴史・伝統に結びつく意志もなければ、全ての歴史的、立体的なものを平面の中に並べて納得してゐるといふことです。国の個性を大切にするといふことについて、もし自信を失つては、その国は駄目になると、岡倉天心も言つてをります。

今年の秋に行なはれる大嘗祭は、大昔から繁がつてきた一つの儀式です。その儀式の形態・

システム・その他は、われわれの先人たちが命をかけて最もこれが相応しいと決めてきた伝統でせう。それが一部分は神話に拘はるから止めろ、といふのでは、歴史と伝統を知る資格もなければ、語る資格もありません。テレビ朝日に久米宏さんといふキャスターがりますが、「この大嘗祭と即位式には世界から大勢の方がいらつしやる、東亜諸国からも。東亜諸国の方々には天皇制に対して批判してゐる人たちも来るでせう。さうであれば、その人たちを迎へるについては慎重にならざるを得ないですね」と言つてゐます。久米キャスターの頭の中には、ご即位の盛典なるものは、一つの国際的イベントに過ぎなくなつてゐるのです。天皇制を反対する人に、天皇制をわからせようとするのではなくて、反対に嫌な意見が出ないやうに謹まなければいけないと言ひ、そのためには伝統的な方式はどんどん変へていかなければならないと宣言してゐるやうなものです。これでは立体的なものを全部平面に倒して物を言つてゐるだけではないですか。

これは現代の一つの悲しむべき事態ですし、われわれは、自信を持つて、われわれの国を、また日本の言葉を大切にし、大和島根と大和言葉の結びつきを本当に自分の心の中に正しく整へて、いろいろの学問に励んでいただきたいと思ひます。

皆さんと共に、今年の秋のご即位の大典並びに大嘗祭が、せめてできるだけ歴史・伝統のつとつて行はれることを祈念しながら、私のお話を終はらせていただきます。



短歌入門

短歌創作導入講義

福岡県立玄洋高等学校教諭

矢 永 誠
二



ツクシマツモト (ナデシコ科)

はじめに

短歌創作の意味——経験を見つめること——

短歌の作り方

実朝の歌と正岡子規

はじめに

この壇上に上がって話すとなると緊張して、二時間程前から班室で目を瞑つて、緊張を解きほぐさうとしてみたのですが、やはりそのまま壇上に上がつてをります。私は現在、福岡の玄洋高校に勤務してをりますが、教員になつて今年で七年目になります。さて、皆さんは『短歌のすすめ』といふ本を持つてをられると思ひますが、短歌創作については、この本を読んでいただければ充分で、私のやうにあまり短歌を詠んだこともない者が話をするまでもないんです。しかし『短歌のすすめ』を読まずにやつて来たといふ方もゐるかもしれません。それで、歌を詠むといふことについて少し、基本的なことをお話ししたいと思ひます。

皆さん方はこの合宿教室で三日目を迎へてゐる訳ですが、漸く閉じこもつてゐた部屋から外へ出られる、阿蘇の雄大な景色が待つてゐるといふことで、楽しみにしてをられるのではないでせうか。ところが、この合宿ではレクリエーションの間に、最低一首の歌を作らなければならぬ訳なんです。五、七、五、七、七の三十一音ですから、普通なら三十一音の言葉を書くのは簡単ですが、いざ短歌を作るとなると、それがなかなかできないんです。これから出かけるレクリエーションの行程を追つてみると、まづバスで登山道を登つて行く。

中岳に近づくと、そこには草千里が横たわつてゐる。やうやく駐車場に着く。なんとか中岳まで登つて、そしてバスにゆられて宿舎にもどつて来た。さういふひとときを過すだけで短歌の題材があるといふのだらうか、短歌のことばかり考へて、結局景色も何も見れなかつたといふことになるのでは、と思われるかもしれません。ところが、これは私の経験なのですが、実際はさうぢやないんです。

資料を見て下さい。はじめに「具体的なものが見へて来る」と書いてありますが、短歌を詠むとなると、かへつてその対象となるもののはつきりと見へて来るのです。今までは見過ごしてゐたやうなものが、普段の生活ではわからないやうなことが、これからバスに乗つて出かけられる中で、恐らく見へて来るのではないかと思ひます。それは何故か。かういふことだと思ひます。合宿に来て、最初教室に入つて言葉を交はします。そして、いよいよ合宿教室が始まる。山内先生の御話、色々言はれたけど、なにかわかつたやうでわからない。そして教室に帰つて討論をする。班友が「自分はかう思ひました」、「良かったなあ」、「あの話、初めて知りました、感激しました」といふやうなことを話してくれます。ところが自分にはそのことがよくわからない。「もう一回話してくれ」といふことでそれを聞く訳です。どういふ気持ちで山内先生が御話をされたのか、その言葉にはどういふ気持ちがかもつてゐるのか。さういふやりとりをこの三日間、皆さんはやつてこられたんぢやないでせうか。班友

の言葉を聞いて、その心を一生懸命偲ぼうとしてこられたんぢやないかと思ひます。私達はこの三日間、色々なことを知つたと思ひます。それと一緒に言葉に感じる心、さういふ心を鍛へる、そして自分の心にくつついた概念や先入感が、一つ一つ取り払はれてゆく。そんな経験を私達はしてきたんぢやないでせうか。心を鍛へるといふことを、知らず知らずのうちによつてきてゐるのです。

昨年の短歌創作導入講義の中で、與島誠央さんがかういふやうに言つてゐます。この合宿では、必ず全員が歌を作れる、難しいと思つてゐる歌が作れる。それは何故か。「この合宿で心がきれいになるからです」と言つてゐます。心がきれいになるとは、私が先程申し上げた、心を鍛へつつあるからだと思ひます。さういふわけですから自分も必ず歌を詠めるといふ気持ちでレクリエーションに出かけて下さい。



このホテルに来る時とは違つた景色が皆さんの心には映るはずです。

短歌創作の意味―経験を見つめること―

それでは、短歌を詠むことが一体どういふことなのかといふことについて、少し話をさせていただきます。私は、自分の経験を見つめて、それを確かなものとして、自分の心に刻んでゆくといふのが、短歌を詠むことの一つの大きな目的ではないかと考へてをります。私達は色々な話を聞いて、或は人の姿を見て感動することがあります。しかし、どんなに大きな感動でもやがては薄れていつて、そして忘れ去つてしまふことが多いのが現実ではないでせうか。短歌を詠むといふのは、さういふ自分の感動を言葉といふ一つの形にしてゆくことなのです。自分の経験をもう一回見つめ直してゆくことだと言つてもいいでせう。では具体的に歌に触れながら話をしてみたいと思ひます。

これは昨年の合宿教室の感想文集の中にあつた歌です。戸田建設の青山直幸さんが詠まれたものです。「班別短歌相互批評の折、深夜に至りて」と詞書があります。短歌相互批評といふのが今回の日程にもありますが、それが非常に遅くまでなつてしまひ、十二時を過ぎて一時くらいになつてしまつたのでせう。

班別短歌相互批評の折、深夜に至りて

班室にもどりてみればはや皆は相互批評に取り組みてをり

己が歌声高らかに詠みゆける姿しみれば胸熱くなる

にこやかに笑み浮かべつつ深々とお願ひしますと頭下ぐる友

友の思ひひたしのびつつ言の葉を選びては歌を直しゆく友ら

友ら皆心尽くして言の葉を直さむとすれど思ふにまかせず

友ら皆なすすべなくてただひたに歌みつめつつもだし続けぬ

さ夜ふけて眠気いや増せどみ友らは歌ひたむきにみつめてやまず

やうやうに己が思ひにかなひぬる歌できし時の友の喜び

己が思ひにかなひぬる歌詠みゆける友の顔すがやかに見ゆ

やつたねと肩たたき合ふみ友らの笑み交はす見れば涙こみあぐ

皆さんの中には、今まで合宿に來られて相互批評を経験された方もあるでせうが、初めての方も多しと思ひます。この連作の歌にはその相互批評の様が眼に浮ぶやうに歌はれてゐます。二首目に「声高らかに詠みゆける」とあるやうに、班員が一人づつ自分の歌を詠み上げ

てゆく訳です。そして皆で、その歌を作った人の気持ちを感じながら、歌を直してゆく。ところがうまくいかない。そのことが最初ずうつと詠まれてゐます。五首目の「思ふにまかせず」六首目の「なすすべなくて」、「もだし続けぬ」といふ言葉からは、班全体の苦しい様子が感じられます。「もだし」とは、言つてあげる言葉がなくなつて、黙つてしまふといふことです。だんだん遅くなつて眠たくなつてきますが、それでも一生懸命歌をみつめてゐるんです。そして、さういふことを続けながら、最後の三首にあらはれてゐるやうに、次第に詠んだ人の思ひに叶ふやうな歌が出来上がる、班員皆が力を合はせて直していつた訳だから、皆肩を叩き合ひながら喜びあふ。さういふ様子が、この青山さんの歌を読むと、本当に身近に感じられます。相互批評に班付として入られた青山さんの班員に寄せられる思ひが、はつきりとこの十首の歌の中に詠み込まれてゐると思ひます。

この青山さんの歌を読んだ班の人達は、本当に嬉しかつたにちがひない。この歌は、合宿が終る直前の第二回目の短歌創作で詠まれたものですから、班の人達がこの歌を知るのは、三ヶ月程して送られて来た感想文集であつた筈です。「班付の青山さんはどんな歌を詠まれてゐるだらうか」と感想文集を開いたことでせう。そして、青山さんの歌を読んだ時、班別相互批評のことが思ひ出されて、その時の苦しさや喜びが全てこの十首の歌にすくひとられてゆくやうに感じたのではないでせうか。こんなにも自分達のことを思つて下さつてゐたのか

と、その青山さんの思ひは、すつと班の人達の心の中に入つていつたんぢやないかと思ふのです。

さういふやうに、人の心の深いところから発せられる言葉、人の真心からの言葉といふのは、必ず人の心に伝わつてゆくものです。さういふ力が言葉にはあるんです。そして私達の祖先はそのことをよく知つてゐました。午前中の講義で黛先生が、日本人は和歌を詠むことを敷島の道として大切なこととしてきたと言はれましたが、それは言葉といふものが、時間といふ枠を超へて人の心に伝はり、心を揺り動かしてゆくことを、私達の祖先はよくわかつてゐたんです。万葉集の防人の歌や幕末志士の歌に、心動かされた経験をお持ちの方も多しと思ひます。日本人は古来から歌を詠むといふことを心の修業としてやつてゐるのです。

短歌を詠むといふことから、このやうな話になりましたけど、短歌は決して花鳥風月を樂しむものではなく、その言葉を通して、人と人の心の交流の世界をつくり上げてゆくものだといふことを、これから歌を詠む上で是非押へておいて頂きたいと思ひます。

短歌の作り方

さて短歌を詠むに當つて、私が強調したいのは、まづ一番目に感動を詠んでほしいといふ

ことです。自分にとつてどうでもいいことを詠むのではなく、感動したことを、心動かされたことを是非言葉にするやうに努力して下さい。そして「素直に詠む」といふ点が大切です。強い感動があると、どうしてもオーバーな表現になりがちです。ですから、かういふことを詠んだらおかしいんぢやないだらうかと思はずに、自分の気持ちに沿つて詠んでほしいと思ひます。それからもう一つ、「正確に詠む」といふことです。ありもしないものをさもあつたやうに詠むのは嘘になります。またどんなに大きな感動があつても、正確さに欠けると、作者の思ひは人に伝はつてゆきません。ですから、最初に感動を「素直に」、しかも「正確に」詠むことを心掛けて下さい。資料に挙げてをります歌は、今年の感想文集から採つたもので、千葉大の石川君の歌です。

見上ぐれば大きな岩に堂々と陛下の御歌の刻まれてあり

昨年はこの合宿が雲仙で開かれました。「陛下の御歌」といふのは、雲仙の仁田峠のところに、昭和天皇の「高原にみやまきりしま美しくむらがり咲きて小鳥とぶなり」といふ御製碑があります。この彼の歌はレクリエーションで御製碑を見て詠んだものです。「堂々と」といふ言葉に、石川君が御製碑を見た時の感動が込められてゐます。「堂々と」といふ言葉は日常

使ひますが、素直に感動が詠み込まれてをり、一層力強さが感じられます。

次に私が申し上げたいのは「一首一文」で詠むといふ点です。これは昨日、小柳先生が、今上天皇の御歌に触れられながら話をされました。一首の歌が一つの文章になるやうに詠むといふことで、大体感動に沿つて歌を詠んでゆけば一首一文になります。

それから「字余り、字足らず」について触れておきませう。本来、五、七、五、七、七が短歌の定型ですが、時によつてはその定型の枠を破つて「字余り」になることもあります。次に挙げてゐる早稲田大学の鶴野君と西日本短大の田中君の歌がその例です。歌に傍線を付してゐますが、その部分が字余りになつてゐます。鶴野君の歌は、

今日一日思ひ起せば力足らぬ我が身思はれ寝つかれぬかな

といふ歌ですが、五、七、五の上句が五、七、六となつてゐます。それから田中君の歌は、

故郷をば見むといさみて登れども霞かかりて天草は見へず

と、最後の七音のところが一音になつてゐます。ところが、皆さんこの二首の歌を読んで、

特に不自然な感じは受けられないのではありませんか。それは二首とも、傍線の部分がそれぞれ一番言ひたいことといふか、感動の中心になつてゐるからです。鶴野君の歌には、「初めて班長を務めて」と詞書きがありますが、本当に大変だつたらうと思ひます。班員をリードしてゆくことで、非常に苦勞を重ねる。歌を詠む段になつてその体験が廻り「力足らぬ」とつくづく痛感してゐるんですね。さういふ思ひがこの一句の言葉の裏にあるから、字余りでも不自然な感じを受けません。田中君の歌も、「天草は見へず」と詠んでゐるやうに、彼の残念に思ふ気持ちが進められてゐるから、不自然な感じがしない訳です。一方、「字足らず」はどうか。これはできるだけ避けて下さい。歌を詠んでみて字足らずになつた場合、それは言葉を選び直すよりも、もう一度自分の心を見つめ直して下さい。感動とそれを表現する言葉の間に、どこか無理をしてゐるはずですよ。

用語については、やはり短歌は感動を詠む訳ですから、日常使つてゐる口語より文語を使って詠んだほうが、より感動を表現できると思ひます。ただし、あまりそのことに氣をとられると、またおかしくなるので、できるだけ文語で詠むといふことですけれども、自然に近い、自分の気持ちに一番近い言葉で詠んでほしいと思ひます。

連作短歌については、先程、青山さんの歌を読みましたので、それが手本になると思ひます。幾つもの感動が自分の心の中にある時には、それを全部一首の中に詠み込まうとせず、

一つ一つ丁寧に見つめ返しながら連作の歌として詠んだ方が無理がありません。

実朝の歌と正岡子規

最後にもう一つ、歌を詠むにあたつて是非触れておきたいことがあります。それは正岡子規の歌です。正岡子規といふ人は、慶応三年に四国松山に生まれてゐます。そして明治三十五年に亡くなつてゐますから、三十五歳といふ非常に若くして世を去つた歌人です。若い時に四国から東京へ志を抱いて出てゆくのですが、大学は途中で退学してしまひます。そして日清戦争への従軍とその後の闘病生活。ここでは詳しいことには触れませんが、子規はその従軍後の闘病生活の中で、俳句や短歌の一大改革を行つた人です。短歌の改革と云つても常人の生活をしながらではなく、脊椎カリエスといふ重い病気を罹ひ、ほとんど動けない状態にあつて、激痛に耐へながら成されてゐます。

その子規が、短歌を詠む上で一番大事にしたことが「写生」といふことです。「写生」といふのは、あるがままを写してゆくといふことです。それは短歌を詠む手法といふことだけではなく、子規自身の生きる姿勢と深く結びついてゐることなのです。先程言ひましたが、人の真心を何よりも大事にしていつたといふことです。自分の心を飾つたり、上辺だけでも

を言つたりするのではなく、本当に自分が感じたことから目を反らさずに、歌も詠んだし、実際に生きていつたんです。苦しいこともはつきりと見定め、自らに対して誤摩化しない生を求めていつた子規の生き方には、本当の力強さを感じます。

さういふことを踏まえて次の歌を読んでほしいと思ひます。「金槐和歌集を読む」といふ連作です。これは明治三十二年に詠まれたものですから、すでに病床にあつた時です。「金槐和歌集」とは、鎌倉幕府の三代將軍だつた源実朝の歌集です。

人丸の後の歌よみは誰かあらん征夷大將軍みなもとの実朝

大山のあぶりの神を叱りけん將軍の歌を読めばかしこし

路に泣くみなし子を見て君は詠めり親もなき子の母を尋ぬると

はたちあまり八つの齡を過ぎざりし君を思へば愧ぢ死ぬわれは

鎌倉のいくさの君の惜しけれど金槐集の歌の主あはれ

かういふ歌を詠んでゐるわけなんですな。

一首目の「人丸」とは柿本人麿のことです。万葉集に出てくる柿本人麿の志を継ぐ本当の歌よみは誰であらうか。それは源実朝であると言ひ切つてゐる。非常に強い気持ちです。

二首目に「大山のあぶりの神を叱りけん」といふ言葉があります。これはどういふことを言はんとしてゐるのか。実は源実朝はかういふ歌を『金槐和歌集』の中で詠んでゐます。

時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ

農民にとつて雨は非常に大事なものののですが、時に降り過ぎれば、育ててきた作物を腐らせ、あるいは洪水となつて作物を押し流してしまひ、民の嘆きとなる。八大竜王とは竜神様のことで、その竜神に対して「雨やめたまへ」と叱咤してゐるのです。八大竜王といふ非常に堅い漢語が使はれたり、また歌の構造は一首二文になつてゐますが、さういふことでの不自然さは全て最後の「雨やめたまへ」といふ激しく強い願ひの込められた言葉によつて打ち消されてゐます。この実朝の歌に感動して子規は歌を詠んでゐるのです。大山といふのは神奈川県にある山で、その頂上に阿夫利神社といふのがあり、その神社には竜神様が祀られてゐるさうです。子規は、「將軍の歌を読めばかしこし」と歌ひ上げてゐます。「かしこし」とは、慄然とさせられるものがあるといふことです。実朝の激しい思ひを全身で受け止めやうとしてゐる子規の力強さが感じられてなりません。

三首目の歌は、同じく『金槐和歌集』の

いとおしや見るに涙も止まらず親もなき子の母を尋ぬる

といふ歌に対して詠まれたものです。戦乱があつて子供が道端で泣いてゐる。実朝は近くにゐる人にそのことを聞くと、「いや、親が戦乱で亡くなつたんだ」と言ふわけなんです。それを聞き、泣く子供の姿を見て、「いとおしや」と率直に自分の気持ちを詠んでゐるのです。この言葉にも深い思ひが込められてゐると思ひます。

子規がとり上げたこの二首の歌を読んでをりますと、民に対して、何とかしてやりたいといふ実朝の思ひが時代を超えて伝はつてきます。「見るに涙も止まらず」とは、子供の人生を我が人生として受け止めた実朝の姿といえませう。

四首目の歌には当時の子規の真情があふれるやうに表現されてゐます。実朝は二十八歳で甥の公暁に暗殺されてしまふわけですが、二十八歳の若さでかういふ気持ちを持つて生きたことを思ふと、自分は恥ずかしくて死んでしまふと、それぐらい強く激しい思ひを抱きながら、子規といふ人も生きてゐたのです。繰り返へしになりますが、本当に心の奥底から出てきた言葉だけが人の心を揺り動かして波打たせるのです。そして、さういふ言葉に触れて心を鍛へてぬく努力をすることで、私達自身の生をより豊かにすることができると思はれてな

りません。どうかこのことを踏まへて、あと残りの合宿教室を過ごし、そして心の動くままに歌も詠んで下さることを願って短歌創作の導入とします。

創作短歌全体批評

戸田建設株式会社 開発事業総轄部

青山直幸



ユウスゲ (ユリ科)

はじめに

批評と添削

終はりに

は　じ　め　に

やつと合宿も終はりに近づき、待ちに待った短歌相互批評の時間がやつてきたといふことで、皆さんも期待に胸を膨らませてをられることと思ひます。昨日のレクリエーションの時間に、皆さんは短歌創作に取り組まれました。もちろん初めての方もいらつしやるかと思ひます。今、お手元に配られてゐる歌稿には、皆さんに作つて戴いた歌三三〇首が載つてゐます。これらの歌は、皆さんに提出して戴いた歌を更に国文研会員の方で厳選の上一人最低一首以上といふことで掲載しましたので、実際に提出された歌を集計すると、恐らく一〇〇〇首前後になつてゐるかと思ひます。学生の皆さんを初め、社会人、アルバイトの高校生を含めた事務局の方々、それから国文研会員、諸先生方全ての参加者が歌を同時に作つた訳です。これだけ多くの方が、同じ目的のもとに心を集中して一つの事を行ふといふことは、日常では得難い貴重な体験だと思ひます。今回初めての方は如何でせうか。最初は「果たして自分に短歌なんて作れるのだらうか」といふ不安にかられた方もゐらしたでせう。しかし、実際にやつてみるとなんとかできるものなのです。自分がいかに普段ものを正確に見てゐないかを痛感したり、又心に感じたことを言葉にしようと思つてもなかなか適切な言葉が浮んで

こない等各々に苦しまれたことでせうが、たつたあれだけの短時間の中に、皆さん全員がきちつと立派に歌をお作りになつたのです。初めてのの方が、これだけ立派な歌を作れるといふのは、どういふことなのでせうか。短歌は、確かに一つの芸術ではありますが、特殊な芸術的才能を要するものではない。皆様方が本来持つてゐる歌心といふものが五七五七七といふ詩型を通して自然に発露してくるものなのです。ですから、今まではたまたま歌を作る機縁がなくて作らなかつたけれども、かうした機縁があると、初めての方でも十分に立派な歌が作れる。それは、皆様方誰もが歌心といふものを持つてゐるからなのです。日本の古代の人々は、この歌心といふものが人生においていかに大事かといふことを逸速く気付いて、お互ひに歌を詠み交はす習慣を作られました。その中で自分の心を鍛へてゆくといふことを実践されてきた。それが万葉集といふ素晴らしい歌集に結実していつたのではなからうかと思ひます。昨日、黛先生のお話の中で「敷島の道」といふ言葉が出てきましたが、それは歌心をお互ひに鍛へ合つてゆくといふことではないかと思ひます。

これから相互批評を行つてゆくわけですが批評と言つても、評論家的に歌がうまいとか下手だとか、そんなことを論ずることではありません。批評といふのは、まづ友達の作つた歌を本当に味はつてその友達の気持を丹念に推し量つてゆく。そして作者の気持が本当に正確に表現できてゐるかどうかを考へながら、お互ひに歌を直してゆく作業なのです。ですから、



お互ひの心の通ひ合ひといふことが非常に大事になつてくるわけです。

前置きはその位にして、早速皆さんの歌を味はつてみたいと思ひます。本当は全員の歌をやりたいんですが、時間がありませんのでやはり厳選を致します。この中から選ばれた方は運が良かったと思つて諦めてください。（笑ひ）

批評と添削

班ごとに順を追つてやつてゆきたいんですが、その前に非常に印象深い歌がありましたので、取り上げることにします。実は昨日のレクリエーションの時間にバスで阿蘇の中岳に向ひましたね。その時にちよつとした事件が起りました。その事件を的確に捉へて歌はれた歌です。

火の山に近づき心高鳴れば行くてさえぎる赤牛の尻

この「赤牛の尻」といふのが、非常に印象的です。ちよつとした事件といふのは、バスの行く手の道路の真ん中を赤い牛が悠々と歩いてをりまして、阿蘇では車よりも牛が優先だとのことで、バスも一般の自動車も徐行してゐるわけです。それを全く無視するかのやうに益々ゆつくり歩いてゐる。バスのすぐ前を歩いてゐるわけですから牛のお尻が確かに良く見えて印象的でした。この歌は、その時の強い印象を本当に率直に歌はれてゐるのです。ただ、この歌をよく見てみますと、ちよつと状況がわかりにくいのです。全然知らない人が読むと、どうして突然行く手さへぎる赤牛が出てくるのか、わからない。歌の前に詞書をつけて状況を簡単に説明すると良いと思ひます。又、最後に「尻」といふ言葉が突然出てきてゐますが、これはちよつと誇張と言ふか、ことさら面白くしようとした所が見受けられます。ここは、「赤牛の見ゆ」といふ風にさり気なく歌つた方が自然でせう。特に尻について興味があつて、特に歌ひたいといふことであれば、更に連作して歌へば良いのです。例へば、

バスの前悠々と歩む赤牛の大きな尻を見れど飽かぬかも

（笑ひ）

もとの歌を次のやうに直してみました。

火の山に近づき心高鳴れど行く手さへぎる赤牛の見ゆ

○

それでは、最初に一斑からまゐります。

故郷の阿蘇の山並み見わたせば心はずみて我を忘れり

この歌は本当に作者の思ひが素直に詠まれてゐて、皆さんの心の中にもすーつと入つてくると思ひます。故郷の山々を久々に見た時のなつかしさ、心の中から沸き上つてくるやうな喜びをありのままに表現してゐます。「我を忘れり」といふ表現は非常にいいですね。簡潔ですが、作者の思ひが溢れてくるやうです。本当に良い歌で直す所もありません。

○

阿蘇の地で白き煙を身にあびていふり出される日本の心

「日本の心」といふのは、いふり出されるものでせうか。この歌の作者が合宿に一生懸命に取り組み、又合宿の中で提起されてゐる日本の精神文化といふものを真剣に考へてゐることはよく伝はつてきます。しかし、「いふり出される日本の心」といふ表現はどうでせうか。何か頭の中だけで考へた言葉のやうに思へます。具体性がなく、実感の伴はない、観念的表現と言はざるを得ないでせう。どうも「煙」と「日本の心」を頭の中で結びつけて、「いふり出される」といふやうな比喩的な表現を使つたのではないか。このやうな観念的な表現では作者の思ひが伝はつてきません。「日本の心」といふものをこの合宿で提起されて、自分なりに一生懸命掴まうとしてゐるのだが、なかなか掴めないといふのであれば、その苦しみとかもどかしさをもつと具体的に歌つた方が良いと思ひます。作者の気持が正確に掴めないので、歌を直しにくいのですが、「いふり出される」といふ表現が適切ではないので、その箇所のみを直しておきます。是非班の中で作者がどういふ気持を抱いてゐるかをよく聞いて、作者の気持に沿つてより具体的な歌に直して戴きたいと思ひます。

○ 阿蘇の地で白き煙を身にあびて知らず湧きくる日本の心

○ お話をしっかりと聴かむと針腕にさして眠気をはらふ君かな

いや、私はこの歌を見てびつくりしましたね。この合宿に眠気を覚ます為針まで持つてきて取り組んでゐる凄まじい人がをられるのです。(笑ひ)針といふのが事実だとすれば、本当に凄^{すば}い気魄だと思ひます。この歌の作者は班長さんです。班長として班員一人一人の合宿生活に気を配つてくれてゐるのです。班員の一人一人の凄まじいばかりの合宿に取り組む意気込み、努力をきちつと受け止めて、その感動を卒直に歌つてゐます。班長と班員との間の緊張の中の心の通ひ合ひといふものが感じられる良い歌だと思ひます。

○ 煙はき我を拒むな阿蘇の山振り返りつつ下る坂道

矢永さんの「短歌導入講義」の中にもありましたやうに、短歌はやはり詠みたい一つのことを一つの短歌に詠むといふ、一首一文を原則としてゐます。この歌は「煙はき我を拒むな」と、「阿蘇の山振り返りつつ下る坂道」とに二分されてをり、時点も違ふし、詠まうとしてゐる内容も異なるやうで、一首二文になつてゐます。一つの短歌の中に詠みたいことが二つある為に焦点がぼけてしまひ、何を詠みたいのかわからない歌、勢いのない歌になつてしまふ。又、「煙はき我を拒むな」といふのは、よくわからない。私も山頂にをりましたが、確かに白煙が出てをり、更に強烈な悪臭がたちこめてをりました。悪臭の耐へ難さを自分を拒んで

る証しと捉へたのかも知れませんが、かういふ自然現象を擬人化するのは無理があります。対象をちつと凝視することを止め、対象をモチーフに一種の空想の世界を頭の中で作り上げてゐるに過ぎないのです。かういふ表現は極力避けて、できるだけ具体的に詠んでゆくことが大事だと思ひます。次のやうに平易な表現に直した方が自然だと思ひます。

○ 白煙を吐き続けたる阿蘇の山を振り返りつつ坂道下る

○ 我のため席をあけて待つ班友の顔見れば嬉しき思ひのわき出づ

この歌は非常に良い歌だと思ひます。班友のちよつとした心配り、その心配りに気づいて、本当に嬉しかつた。その喜びを素直に歌つた歌です。この歌を読んで、私は次のやうに感じました。この合宿でも友情といふ言葉をよく使ひますが、友情といふのは、大上段に構へた所に生まれるものではなく、ほんの些細な所にも友達のことを思つて気を配つてゆくことの積み重ねの中から、生まれてくるのではないかと。

○ 阿蘇中岳を下る

友だちと山おりたればちよちよと小鳥のさへづりかすかに聞こゆ

歩をとめて耳をばすませばさへづりは野のあちこちより聞こえてくるなり

歩をとめて耳をばすませばさへづりはげに楽しげに聞こえてくるなり

自然を歌ふのは歌ひ易いやうで非常に難しい。「美しき緑」とか漠然とした表現になりがちです。それは、自然をちつと目を凝らして見てゐないからです。ところが、この歌の作者は実に細やかに自然のひとこまに目を止めてゐる。「ちよちよと小鳥のさへづり」といふ表現の中に、小鳥のさへづりに足を止め、耳をすましてちつと聞いてゐる作者の非常に細やかな心が伝はつてきます。自然のひとこまに心を集中させてゐるといふ点で、良い歌だと思ひますが、表現上若干問題がありますので、指摘しておきます。

二首目の「歩をとめて」といふ言葉は、余り使はない表現です。「足をとめて」といふ言葉に直した方が良いでしょう。「耳をば」といふのは、ちよつと大袈裟なので、「ば」をとつた方が良いと思ひます。「あちこちより」は歌の調べが余り良くないので、文語体で「をちこちゆ」といふ表現を使へば良いでしょう。

それから三首目ですが、これは二首目と歌の内容がほとんど同じです。連作を作る場合の注意なのですが、連作といふのは、一つの歌に歌ひきれない場合に一つ一つきめ細かく歌つ

てゆくわけで、一つの歌に一つの感動を詠んでいかななくてはならないのです。ですから、二首目と三首目のやうにほとんど同じ感動をちよつと言葉を変へた程度で連作にするのは安易です。三首目の歌は特に必要がないのです。もし作るとすれば二首目とは異なつた事象に觸れて生じた新たな感動を詠むべきでせう。二首目のみ直しておきます。

足をとめ耳をすませばさへづりは野のをちこちゆ聞こえくるなり

○
中岳の火口ゆのぼる白煙の空に登りて雲と交じはる
はるばると目路の限りに広がりぬ大阿蘇囲む外輪山は

この歌も阿蘇の雄大な景色を漠然と捉へずに、正確に捉へ丹念に表現してゐます。「白煙の空に登りて雲と交じはる」の表現など自然のありさまを実に克明に捉へて雄大な調べを生み出してゐます。なかなか良い歌です。

○
有毒の煙にまかれ咳しても臨む価値ある阿蘇の中岳

先程の歌にも出て参りましたが、火口の付近は火山ガスがたちこめてゐて喉が痛くなつた方も居られたでせう。さうした火山ガスに悩まされ乍らも何とか阿蘇の中岳の火口が見たいといふ思ひを詠みたかつたのでせう。

ところが、「臨む価値ある」といふ表現は少々問題です。自分の身をどこか高い所において、批評してゐるやうな、観念的表現です。ガスの匂ひが凄くて辛いが、あくまで阿蘇の中岳を見たくてしようがないといふ氣持が強いのであれば、そのまま直接的に歌へば良いのです。ですから、「臨む価値ある」を「見たしと思ふ」と率直な表現に直した方が良いでしょう。ただ、もう一つ作者の氣持がはつきりわかりませんので、班でよく作者の氣持を聞いてみて下さい。

有毒の煙にまかれ咳しても見たしと思ふ阿蘇の中岳

○ 先帝の崩御の事を語りつつこらへきれずに涙する君はも

班の友達が、先帝陛下がお亡くなりになる時のことを語り出した。思ひがこみあげてきたのだらう、目には涙が溢れてゐる。その様を見て、作者は心を動かされたのです。事実をあ

りのままに表現してゐる歌ですが、作者の感動が伝はつてくる、非常に良い歌だと思ひます。ただ最後の「涙する君はも」は九字で二字の字余りです。これでも間違ひではありませんが、やや冗漫なので、「涙す君は」と簡潔に表現した方が緊張感があつて良いと思ひます。

先帝の崩御の事を語りつつこらへきれずに涙す君は

見渡せば友は皆々論じれど我の口より出る言葉なく

班別討論の折、班員は各々に思ひのたけを述べてゐるのに、自分は思ふやうに言葉が出てこない、さういふもどかしく辛い氣持を率直に歌はうとしてゐます。ただ、もう少し適切な表現が望まれます。もどかしい思ひをもつと直接的に表現してみたら如何でせう。次のやうに直してみました。

友ら皆己が思ひを語りゆけど言葉出で来ぬ我もどかしき

さしつまる時をむかへてのひとときふとみる花はとてもかはい

これは男子の歌にしては非常にかはいい歌ですね。（笑ひ）「さしつまる」といふ言葉は辞書を引きますと、差し迫ると同義語で非常に切羽詰まつてゐることです。この歌を読む限りでは、一体何が切羽詰まつてゐるのか、わからないですね。何か生理的な欲求でもあるのでしょうか。（笑ひ）あるひは昨晩の短歌提出のメ切時間直前の状況を指してゐるのでせうか。その辺がわかりませんね。短歌といふのは、自分の主観を表現するものですが、ひとりよがりではいけません。誰が読んでも、その歌の場面や状況が、ありありと浮んでくる、つまり客観性が同時に要求されるのです。私も色々と推測してみました、よくわかりませんので、班の中で作者本人から状況をよく聞いて適切な表現に直して戴きたいと思ひます。

最後の「とてもかはいい」は口語的表現なので、「いと愛らしき」と文語的表現に直した方が歌の調べとしては響きが良いでせう。この歌は、何か切迫した状況の中で、ちよつと見た花が非常に愛らしくて心に残つたといふ、なかなか着眼点の良い歌ですが、詞書を付ける等もう少し客観性を持たせる工夫をするともつと良い歌になるでせう。

さしつまる時をむかへてのひとときにふとみる花のいと愛らしき

○ 楽しいな皆と一緒に美味しいな焼いたとうきび歯ぐきに楊枝

(笑ひ)

私も大変楽しくなつてきました。「楽しいな」とか「美味しいな」とか幼い表現ですが、友達と一緒にとうきびを食べた折の楽しさがこぼれてくるやうな歌ですね。ただ最後の「歯ぐきに楊枝」といふのは、よくわかりません。これは多分とうもろこしを食べて歯ぐきに食べかすが詰まつたのでそれを楊枝でとらうとした、それを表現しようと思つたのでせう。しかし、この歌の前半の内容とは別の内容です。短歌は一首一文が原則ですから前半の内容に焦点を絞つて歌へば良いのです。みんなと一緒に食べたとうもろこしが本当においしかつたなといふ感慨だけを一つの歌に歌ひ込めれば良いのです。「歯ぐきに楊枝」といふのは、ユーモアではありますが、歌に詠む程の感動とは思へないので、蛇道といふことになります。作者の人柄が伺へるやうな非常に楽しい歌ですので、歌の基本に則つてもう少し言葉使ひに留意すれば良い歌になると思ひます。

み友らと焼きとうもろこしを頬張りて語らひゆくは楽しくもあるか

次に、女子班にまゐります。

火の国の門は素直に入れたが心の扉さびて動かず

これはなかなか難しい歌ですね。阿蘇の地で行はれてゐる合宿に参加して、講義を聴いたり、班別討論に参加したりして研鑽を重ねてゐるが、自分の心がなかなか開けない、さうした苦しさを表現しようとしてゐるのでせう。ところが、心が開けない状態を直接的な言葉で表はさずに、「心の扉さびて動かず」といふ比喩的表現を使つて表さうとしてゐる。これだけだと未だ良いのですが、「扉」といふ言葉に引つ掛けて、阿蘇合宿に参加できたことを火の国の「門」に入れたと言つてゐる。作者はちよつと技巧を凝らしたつもりかも知れませんが、これは一種の言葉の遊びです。せつかくの作者の内心の苦しみが、何か茶化されたやうな感じになつてしまふ。つまり歌が作者の真心の表現ではなく、理屈になつてしまつてゐるのである。正岡子規は『歌よみに与ふる書』の中で「理屈を詠むな」といふことを繰り返して述べてゐます。やはり短歌の基本は自分の感動をできるだけ率直にわかりやすく詠むといふことです。次のやうに直したら如何でせうか。

班友に思ひのたけを語らむと思へど心開けず苦し

○ 合宿に來られざる友を思ひて

ふるさとに残りし友の折々にふと浮かびきて胸のつまりぬ

友の分も力の限りうけゆきて学びしことをひたに伝へむ

ふるさとに残してきた友達——本来ならばこの合宿に來るはずだった友達が、よんど拗ろ無い事情で來れなくなつた——の事を思ひ、非常に辛い氣持になつてゐる作者の思ひが率直に表現されてゐて、良い歌だと思ひます。

二首目の「うけゆきて」といふ言葉はちよつとわかりにくい言葉です。「うけ」は講義等を受けるといふ意味でせうか。歌全体の主旨からすると、「うけゆきて」の部分は、合宿に対して一生懸命取り組んでいかうといふ内容の言葉に置き換へても良いと考へられるので「取り組みて」としてみました。

○ 友の分も力の限り取り組みて学びしことをひたに伝へむ

○ 山道を歩きつ牛を見つけてははしやぎて寄りぬ後輩らとともに

よろこびて牛に近づき写真撮る後輩らの笑顔のすがやかに見ゆ

童女のやうに無邪気にはしやく作者の姿が目には浮かぶやうです。本当に楽しさが溢れてくるやうな、非常に素直な良い歌だと思います。この歌には全く気負ひといふものが感じられません。自分の姿、自分の気持をあるがままに表現することがどんなに素晴らしい情趣と調べを生むか、この歌は示してくれます。

○ 友だちの思ひを込めし言の葉をまぶたを閉じてひたすらに聞く

この歌を詠んで、私も瞼を閉じてじつとこの歌を味はつてみたんですが、「まぶたを閉じてひたすらに聞く」といふ何の飾り気もない率直な表現の中に作者の友達に対するひたむきな思ひが溢れてゐると思ひます。友達の言葉をまぶたを閉じてただ一心に聞いてゐる作者の真摯な姿が浮かぶやうです。良い歌といふのは、作者の心が一点に集中してゐるので、歌全体に緊張感が漲つてゐるわけです。

さて、この合宿は多くの人々の目に見えない支援と協力によつて支へられてゐます。今年も事務局の一員として高校生の方々が参加されてゐます。高校生も皆さんと同様にちやんと短歌を作りました。

たくさんの仕事を終へてふろに行き友といつしよに疲れをいやす
仕事を終へ阿蘇の空気を吸ひこめば忘れてしまふ何千もの紙

本当に遅くまでご苦勞様です。二首目の歌の「忘れてしまふ何千もの紙」といふ言葉に注目して下さい。作者は、事務局長から指示を受けて、プリントの印刷の仕事を受け持ったのでせう。何千枚といふプリント印刷に少々うんざりもしたのでせう。やつとその仕事を終へて思ひきり阿蘇の空気を吸ひこんだら本当に気持ちが良くて何千枚といふプリントを印刷したことなど忘れてしまつたとその時の感慨をありのままに表現してゐます。高校生でもこのやうに素晴らしい歌ができるのです。それは先程言ひましたやうに、誰もが、歌心といふものを生まれながらにして持つてゐるといふ証しに他なりません。

○
それでは、時間もまゐりましたので、最後に国文研の会員の歌をご紹介します。良い歌

が数多くありますが、特に心に残つた歌を皆さんと一緒に味はつてみませう。福岡県立山田高校教諭の與島さんの歌で、昨日の「短歌導入講義」の矢永さんのことを歌つた歌です。

矢永先輩の短歌導入講義を聞きて

この日まで発表にこころくだかれし先輩の苦勞の思ひ出さるる

指揮班の仕事はとみに忙しく心を統すぶる間もなかりしに

発表よ成功しませと祈りつつ先輩の話に耳傾ける

発表の終りて駆け寄り「良かつたです」と笑みて告ぐれば先輩笑み返す

指揮班といふ大変な仕事を務めながら、「短歌導入講義」にも取り組まれた矢永さんに対し、我が事のやうに心配し心を砕いてをられる與島さんの心情が溢れてゐます。最後の歌には特に講義を無事に終へた矢永さんにゐても立つてもゐられずにかけて声かけよつて声をかける與島さん、そしてそれに答へて笑みを返す矢永さん、二人の間の友情がしみじみと伝はつてくる歌だと思ひます。

終 は り に

これから皆さんは班別で相互批評に取り組まれるわけですが、先程申しましたやうに、歌の上手下手を論ずるのではなくて、友達の氣持を思ひ友達の氣持に近づいていく努力を是非して戴きたいと思ひます。

歌を皆さんで直してゆくといふ作業を行ふわけですが、それも良い歌にしようといふやうなことを考へるのではなくて、その友達の氣持を正確に擱んで、その氣持を正確に表現するには、どのやうな言葉が最も相応あはしいかといふ観点で、言葉を丹念に選び考へてゆく作業を班員が協力し合つて進めて戴きたいと思ひます。そして、各々の班が一つになつて心の交流を広げていつて戴きたいと思ひます。

■ 青年の言葉

古典を味はふことで
自分自身の言葉を持つこと

福岡県立須恵高等学校教諭

那 須 三 元



ヤツシロソウ（キキョウ科）

合宿も三日目を迎へてをりますが、皆さんはこの合宿に参加されまして、どういふ感想をお持ちでせうか。開会式では、壇上に国旗が掲げられ、国歌を斉唱しました。また、司会の方から「戦時平時を問はず、祖国日本のために貴い命を捧げられた祖先の御霊に黙禱をささげます」といふ言葉がありました。導入講義では山内先生が元号についてお話しをされ、日本国憲法の前文の矛盾を指摘なさいました。さういふ内容に対して、たとへば私たちは、頃声を揃へて国歌を歌ふといふ経験はほとんどありませんから、何かしら抵抗とか反発を覚えられた方も多いのではないでせうか。

私も大学一年の頃初めてこの合宿に参加しましたが、やはり開会式の時の国旗・国歌また「祖国」「命を捧げる」「国のために」などといふ言葉に何か受け入れ難いものを感じたことを思ひ出します。と言ひますのは、やはりそのやうな言葉が、先の戦争を思ひ出させ、戦争といふ悲惨な事態をもたらした国家主義・軍国主義につながるといふ漠然としたイメージがあったからだと思います。人間の命は何よりも大切で、それを圧殺するやうな戦争は絶対に許すべからざるものであり、その戦争につながる感じのするすべてのものを嫌悪してゐたやうに思ひます。

ですから、戦前までの日本の歴史に対しましても、結局は先の戦争を生み出した精神的にレベルの低い、未開の文化の歴史であつたといふ、これもまた漠然とした感じを持つてをり

ました。

ところが、例へば夜ラヂオを聞いてをりますと、放送の最後に「君が代」が流れますが、頭では反発を感じるものの、その一方で何か崇高なものに触れるやうな気がするわけです。また外国人が自国の国歌を高らかに歌ひ、国旗に敬意を払ふといふ場面をテレビなどで見ますと、まとまりとか秩序とかいふものを感じ、立派だと思ふわけです。「命ささげる」といふ言葉に非常に反発を覚えたと思いましたが、戦没学生の方の遺書を読みますと、厳肅な感に打たれて、言葉を失ふといふこともありました。

国旗・国歌に関して、外国の場合は抵抗を感じないのに、なぜ自国の場合に関して強い抵抗を覚えるのか、人間の命は何にもまして貴いはずなのに、どうして命を捧げた戦没学生の遺書が心から離れないのか、これらの相矛盾する事柄をどう考へていけばよいのか、私の考へは混乱するばかりでした。

さういふ中で私によりどころを与へてくれたのは、この合宿で知り合つた友人との日本の古典の輪読であつたと思ひます。皆で一つのテーブルを囲み、お互ひに意見を出し合ひながら、同じ本を読んで行く、このやうな読み方を輪読と言ひますが、私はその輪読の場で、「言葉は味はふ」といふことを初めて学びました。「言葉を味はふ」とは、言葉の表面的な意味だけではなく、文の持つ「調べ」を感じとらうとしながら、言葉がどういふ気持ちで使はれた

のかを素直に想像しながら読む、といふことです。

そのやうな読み方によつて先人の思ひを感じていく、さういふ姿勢を輪読の場で学びました。そのやうにして古典を読む中で得られた感動が、一体何が正しいのかと混乱してゐた私に、何を大切にすべきかを教へてくれたやうに思ひます。

以上のやうな学生時代の体験から、今日は推古朝の聖徳太子の御歌を味はつた体験を述べさせていた
だきたいと思ひます。

お手元の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』
の一五七頁をお開きください。

太子の信仰思想は三経義疏また拾七条憲法に仰
ぎ得るけれども、直接やまと言葉の親しさを以て
大御心を偲ばしむるものは、日本書紀に伝へられ
たる片岡山の御歌である。書紀には、「二十一年冬



十二月庚午の朔の日、皇太子、片岡山に遊行（いでま）しき。時に飢ゑたる者道の垂（ほとり）に臥（こや）せり。仍（よ）りて姓名を問ひたまへども言（まを）さず。皇太子、視て飲食（をしももの）を与へたまひ、すなはち衣裳を脱ぎて飢ゑたる者に覆ひて言（の）りたまひしく、『安らかに臥せ』と宣（の）りて、歌よみしたまひしく』として、

しなてる 片岡山に 飯（いひ）に飢（ゑ）て こやせる その旅人（たびと） あはれ 親なしに なれなりけめや さすたけの 君はやなき 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ

聖徳太子の「信仰思想」は、太子ご自身がお書きになつた「三経義疏また拾七条憲法」を讀むことによつて知ることができるとは、それらのご著作は漢文で書かれてをりますので、「直接やまと言葉の親しさを以て」、つまり、日常私たちが使つてをり、微妙な意味合ひの差異も感じとることのできる「やまと言葉」によつて、太子のお心を直接感じさせてくれるのは、日本書紀に載せられた「片岡山の御歌」である、といふわけです。書紀には次のやうに書かれてをります。「二十一年冬十二月庚午の朔の日」、聖徳太子は片岡山にお出かけになつた。その時、飢ゑた人が道のほとりに行き倒れてゐた。名を随人に尋ねさせるが答へない。そこで太子は、ご覧になつて食物をお与へになり、衣裳を脱いで行き倒れの人にお掛

けになつて、「安らかに臥せ」とおつしやつてお詠みになつた御歌、として、聖徳太子の「片岡山の御歌」が載せられてゐるのです。

「しなてる」とは「片岡山」にかかる枕詞です。片岡山に、飢ゑて倒れてゐる「その旅人あはれ」、「親なしに なれなりけめや」、このやうな悲惨な事態になつたのは親に早く死なれたのか、「さすたけの 君はやなき」、「さすたけの」は「君」にかかる枕詞ですが、たとへ親に死なれたとしても、保護してくれるはづのお仕へする主人はゐなかつたのか。親も主人もゐないやうな心細い境遇で、たうとふ食物もなくなつて行き倒れてしまつたのか、と太子はご覧になつたのではないでせうか。

先程、言葉を味はふ、といふことを申しましたが、輪読会に参加してをりまして、その「言葉を味はふ」といふことが一体どういふことか、最初は全く分かりませんでした。今読みました箇所も、機会ある毎に何度か読んだのですが、歌の意味は大体かういふことだらうと理解はできるものの心は動かないのです。この「片岡山の御歌」に、歌の意味以外に一体何があるのか、全く感じられませんでした。ところが、ある時、いくつかの大学で行ひました研修で、この部分を輪読したことがありました。一五八頁に「一首を限りなき節奏の波動に渾融せしめ給ふ」といふ文がありますが、「節奏の波動」とは、音楽の一つのフレーズが波打つやうに繰り返される、さういふ意味ではなからうかと思ひます。つまり、この本をお書きに

なつた黒上正一郎といふ方は、「片岡山の御歌」に太子のお心の大きなうねりを感じとつてをられるわけです。さうでなければ「節奏の波動」といふ表現はないでせう。

ところが私は何も感じられませんでしたので、大袈裟な表現ではないかといふ反発の気持ちも込めて、「自分は何も感じられない」と疑問を出したわけです。するとそこにお見えになつてゐたOBの先生が「那須君、この歌のリズムが感じられませんか。私はこのやうに読んでみますよ」とおつしやつて、「片岡山の御歌」の一節を一語一語かみしめるやうに読んでくださいました。私はその先生のお読みになる声を聞いてゐるうちに、かすかに、今まで全く気付かなかつた、歌のリズム・調子とでもいふべきものを、本当にかすかではありますが、感じる事ができたやうな気がしました。この時私は、言葉を味はうとして本を読む心の持ち方を、初めて体験的に知ることができたのです。そして、その時に受けた感じを大切に、その感じを心の中でできるだけ味はひ、もつと深いものにしうといふ気持ちで、その輪読が終はつてからも「片岡山の御歌」を読んでいきました。すると、摂政として国政の中心にをられた太子が、名も知らぬ行き倒れの旅人をご覧になるやいなや、すぐにその旅人の境遇に思ひを致し、深い悲しみを抱いてをられる、そのお心が歌のリズムそのものとなつて、私の心に波打つやうに響いて来るその感じを、確かに心に受けとめることができました。

古代史といふと現代から遠く隔たつた時代の歴史であり、無味乾燥といった気さへしてを

りましたが、千三百年前に、この御歌に表現された太子のお心が確かに存在したといふふうに、私には感じられるのです。

この経験が、言葉の持つリズムや調子、つまり「調べ」といふものを、心をひそめて感じ取って行かう、さういふ姿勢で本を読んで行かうとする端緒になりました。それ以後、さういふ気持ちで読む古典を通じて、日本の歴史の一端を窺ひ知ることができましたが、それは私が以前抱いてゐたイメージとは全く違つて、実に深く豊かな内容を湛へており、まさに体の震へる感動をおほへることもありました。虚心に、そして素直に言葉を味はふこと、そして言葉を味はひつつ日本の古典に接して行く、その中から日本の歴史の本当の姿を自分自身の手でつかむことができるのではないでせうか。

初めに述べました国旗・国歌の問題、それから戦争の問題、それらはつまり、日本の国と自分との関係をいかにとらへるかといふ問題に帰着すると思ひます。その問題に対してマスコミその他の受け売りでない真に自分自身の意見や生き方は、日本の国の本当の姿を自分の心で直につかむ中から初めて生まれてくるものだと思ひます。

心を鍛へるといふこと

日本油脂株

上
村
栄
章



アケボノソウ (リンドウ科)

只今、御紹介載きました上村でございます。私がこの合宿教室に初めて参加したのは、宮崎大学の二年生の時でした。宮崎大学からの参加者は私ひとりだけでしたので、心細い思ひをしたことを覚えてをります。しかし、この合宿で得たものは、その後の私にとりましてかけがへのない人生の課題となりました。

実は初めて参加した合宿教室の折に、『昭和史に刻む我らが道統』といふ本を買ひ求めたことがその後の私に大事な示唆を与へることになったのです。この本は小田村寅二郎先生が、この合宿教室の主催者である国民文化研究会が戦前戦後を通し、どの様にして生まれ、活動し、展開をして来たかについて回想された本です。私は大学にもどりまして、どのやうに今後の大学生活を送つていくべきかと迷つてゐた時、この本の中の次の言葉を私の指針にしようと思ふに至りました。それは「学問に励む」といふことは、万人の苦しみ悲しみを、自分の心の中に人一倍敏感にうけとめ得るやうに自分の心を鍛へてゆくこと、を意味することになければなりませんまい。」といふ一節です。私はこの言葉を我が指針として学生生活を過していつた訳ですが、現在、社会生活を送り乍らもこのことが常に心の中に課題として残つてをります。

現在、私は日本油脂(株)で自動車用塗料の研究開発に取り組んでをります。毎日毎日、新製品を開発することが、私の仕事でありまして、一日中実験室に籠つて実験をしてをります。

懸命に取り組んでゐる積りですが、思ひ通りの実験結果がなかなか出ないことがある。あるひは開発納期と言ひまして、ある時期までに開発しなければならぬ任務となると、夜を徹して行なはなければなりません。さうしますと精神的なゆとりがなくなつたり、肉体的に疲れてしまふことがたびたびです。そんな時は、他人のことまで心を働かせるといふことが非常に衰弱してくる。すなはち小田村先生の言葉に示された「心を鍛へてゆく」といふ世界から遠ざかつてゆく自分に気づかされたのでした。

ところが最近、二つの出来事に出合ひ、先程の私の指針として来ました小田村寅二郎先生の言葉を改めてかみしめ直す経験をしましたので述べさせて載きます。

まづその出来事の一つは、昨年私の父が胃癌らしいといふことで手術をすることになつたのです。現在、私は横浜で勤務してをりますが、故郷はこの阿蘇の近くで、菊池市に実家はあります。しかしその頃、実験に明け暮れる仕事を担当してをりまして、看病のために帰省することはかなひませんでした。帰るに帰れない不安な日々を過す中で、私に出来ることと云へば父宛てに手紙を書き送ることしか術はなかつたのです。しかしながらその後父の手術も無事済んだといふ報せがあり、私自身ほつとしました。そして、私の仕事もひと区切りが過ぎましたので、帰省しましてやつと父を見舞ふことになつたのです。入院してをります病院に行きましたところ、父は驚く程痩せてをりました。私の実家は農業をしてをりますから



壮健な父でしたが、それがすっかり痩せてゐるので
す。本当に見るに忍びなく、しばらくは見てをれな
かつたほどです。そんな父でしたが、その父のベッ
ドの傍らに私の手紙が置いてあるのに気づきました。
手紙はしわくちやになつてゐて、何度も読み返へし
た跡がありました。私はこれを見た瞬間、横浜にゐ
る息子の私の手紙をくり返しくり返し読みながら病
氣と闘つてゐた父の姿が浮び、胸にこみ上げてくる
ものを覚えました。その日一日、私は父と一緒に過
しました。考へてみると、私が父と二人で過ごす
といふことは初めてのことでした。父は農業をして、
いつも忙しく、それほど裕福な家庭でもありません
でしたから、一生懸命我々のために働いてゐて、ゆ
つくり休んで休暇を楽しむといふことなどありませ
んでした。ですからこの時は、二人でゆつくりと語
り合ふといふ初めての体験なのでした。

その後父が歩けるやうになつた頃、再び父の病室を見舞つたのですが、ふと見ると父の枕の下にお経がありました。父は自分は癌ではないかといふことで覚悟をしてみたやうです。しかし、この時も自分の不安など全く見せず、私のことをあれこれと案じる風で、私は有難さと申し譯なさで一杯でした。

かういふ体験をして横浜にもどつたのですが、父がいつも自分のそばにゐるやうで、忙しく仕事をしてゐる時も折々に父の姿が浮かび、むしろ私の方が激励されてゐるやうなものでした。

もう一つの出来事と申しますのは、私の父が病気をした当時のことですが、この合宿教室に学んだ先輩で小田正三さんといふ方がをられます。その方のお母さんが、くも膜下出血といふ大病で倒れられた知らせを聞いたのです。私はこのくも膜下といふ病気が専門でないので詳しくはわかりませんが、非常に危ない病気で、頭の中に血管が破裂して血が溜まるものです。私はとても他人ごととは思はず、この先輩に励ましの手紙と短歌を一首添へて送りました。すると、数週間後、小田正三さんから返書と短歌が届きました。

この時双方で交はした短歌を紹介させていただきます。

(上村より小田さんへ)

親思ふ心よ神にとどけましやまひ伏される母よ治れと

この私の歌に対する小田正三さんからのかへしの歌は連作でした。

（小田さんから上村へ）

つね日ごろ親と暮せし身にありて母の病に悲しみ深し

突然の病にたふれし母の身によりそひ祈り夜のふけゆく

手術うけ出でこし母の息せいて何と悲しきいのちのきはみ

病室にねむれる母に呼びかけて手をとりかけし祈りの言葉

医師のわざ親子のゑにしかよふかな母の抜糸の早きにいたる

嬉しかり「母さん」とかけし言の葉に目をひらかれてこたへられにける

アーアーとかへされにける言の葉の言葉もたねどよろこびて在り

母さんの回復ありて兄弟の集ひて喜ぶときの到りけり

なりはひに子育てのいくとせ経られける母の守りし日々偲びまつりぬ

母さんの想ひは海のごとよに家と子らを守りいくとせ

母よ母つたなき子らの母に在り身をかへりみず伏せられし哉

母さんの元気になりて田や畑をたがやす日々のおもひ出できぬ

小田正三さんのお母さんは七十余歳になられる方で、今まで病気など一回もしたことがなく、張り詰めた気持ちで過ごしてこられたと聞いてをりました。一首目にある通りいつも親と暮してゐる身に、突然のこのやうな母の大病に接し、いかに小田さんの驚きと悲しみが深かつたことかと思はずにはいられませんでした。小田さんのお母さんは六時間を超へる大手術を受けられたと聞いてをります。三首目の「息せいて」は息絶へ絶へにといふ意味で、その母の姿がなんとも悲しく、まさに命の極みとして小田さんの心に迫つて来たものだと思います。

かうして小田さんの祈りつづける心の調べに応へられるかのやうに少しづつ回復のきざしをみせられるお母さんのお姿が、見事に表現されてゐて私は胸を打たれてなりませんでした。この連作の歌の力は私にとりましても励みになりました。小田さんが悲しみを見つめてその悲しみを言葉に託して、そしてさらに言葉を整へながら己と母を見つめていかれた姿が本当に尊く、私自身、そのお姿に目が覚めるやうに教へられる気がしてなりませんでした。

小田正三さんから載いたお手紙を夜な夜な会社から帰り読んでをりますと、母と子の心の行き交ふ世界がしみじみと伝はつて参ります。そして私の父が病室で病苦と闘ひ乍らもさら

に私のことに思ひをはせてくれる姿に、自分一人が生きてゐるのではない、私が親を思つてゐる以上に親は私を気づかつてくれてゐるのだと痛感させられました。

さう思ひ至りますと、毎日の仕事の中で、難局に出会つてもなんとかこれを乗り越えようといふ気持ちになります、勇気がわいて来ます。

初めに「*学問に励む*」といふことは、万人の苦しみ悲しみを、自分の心の中に人一倍敏感にうけとめ得るやうに自分の心を鍛へていくこと、を意味する」といふ小田村先生の言葉から遠ざかり始めてゐたと申しましたが、しかしこの二つの体験を通してこの言葉が再び生き生きと蘇つて来た思ひでをります。

私の父は現在、回復に向かつてをりますが、小田正三さんのお母さんはまだ入院中と聞いてをります。早い御回復を祈りまして私の発表に代へさせていただきます。

一年の歩み

早稲田大学政治経済学部四年

鶴野光博



神奈川県・厚木市立七沢自然教室

平成元年夏の島原での合宿教室を終へた私達は、秋からの新たな活動を東京・福岡・熊本の各地区で展開していった。大学別の輪読会と、各地区の中心となる正大寮・葦牙寮・尚友寮での全体の勉強会とが並行して行はれ、東京地区では「吉田松陰」が後者のテーマに決められて、松陰の遺文を読み、彼の生涯を偲んでゆく努力が学生・OB一体となつて続けられていった。福岡地区では小林秀雄の著作に取り組み、冬からは吉田松陰についての発表と輪読が重ねられた。又熊本地区においてはラフカディオ・ハーンや河村幹雄の著作、橋本左内の『啓発録』が読まれていったのである。それらの活動の折々には、地区別・大学別での集中した宿泊研鑽も行はれた。この一年間に催された地方合宿は別掲の表の通りである。

吉田松陰の『講孟箚記』を読んでいくなかで、例へば次のやうな言葉に出会ふ。「凡そ人一日此の世にあれば一日の食を食ひ、一日の衣を着、一日の家に居る。何ぞ一日の学問、一日の事業を励まざるべけんや」。朝露の如きの命もて測り難きの禍災患難を待つ。実に一日も覚束なき浮世にて、何ぞ他日他年に推延べ、寿を待みて疑式猶予すべけんや。また、「道を明らかにして功を計らず、義を正して利を計らずとこそ云へ、君に事へて遇はざる時は諫死するも可なり、幽囚するも可なり、飢餓するも可なり。（中略）然ればその身に於いて功業名譽なき如くなれども、千百歳へかけてその忠たる、豈に挙げて数ふべけんや」。また、松陰は

地方合宿

主催	年月日	場所	参加大学
①東京信和会	平成元年 11月13～26日	神奈川「三浦青少年センター」	亜大、千葉大、中大、早大
②福岡信和会	12月22～24日	福岡津屋崎「花波荘」	九大、北九大、熊本大、西南学院大
③早大積誠会	平成元年 2月25～27日	神奈川「七沢自然教室」	早大
④東京信和大	3月16～20日	神奈川「七沢自然教室」	亜大、慶大、千葉大、中大、早大、九大、同学院大
⑤熊本信和会	3月20～22日	熊本「三賢堂」	熊本大
⑥福岡信和会	3月25～27日	福岡太宰府「竈門神社」	九大、北九大、熊本大、西南学院大、埼玉大
⑦東京信和会	4月28～29日	神奈川「七沢自然教室」	亜大、千葉大、中大、早大
⑧亜大日本文化研究会	6月23～24日	神奈川葉山「朝日ヒール葉山寮」	亜大

黒船に乗つて密航するのに失敗し、刑死を覚悟して金子重之助と共に自首して僅か半坪の檻の中に二人入れられる。そこで彼は、書を読み学ばうと重之助に言ふ。「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」といふ論語の言葉を引き、「今日の読書こそ真の学問と云ふものなり」と言ふのである。かういふ松陰の言葉が、時代環境も変はり、飽食と言はれる現代に生きてゐる私達の心に訴へかけて残るのは、どうしてだらうか。松陰は幕末の時代に生き、欧米列強に開国を迫られてゐた日本にあつて、国のために、いま自分が為し得ることを考へ、それを果敢に実行していつた人である。彼の生涯を遺文や伝記を読みながら偲んでゆくうちに、私達は自分の中で何かが力づけられ、鼓舞されることを感ずるのである。松陰の言葉を自分自身で受けとめてみる努力が、東京・福岡地区において私達が重ねた勉強であつた。

私達はこの年の暮れに、『文化の戦士』といふ、国民文化研究会の前身とも言へる戦前の「日本学生協会」の活動を記録したビデオ映画を観る機会を得た。この『文化の戦士』の中で、当時のリーダーであつた田所広泰先輩は、昭和十五年の菅平合宿に集つた四百名の学生に向かつて次のやうに語られてゐる。「この合宿が現代日本に対して負ふてゐる重大責務は出征に劣らない。それは新しき生命の世界を日本の国家生活の上に関かんとする戦ひである。真理は生死を賭しての戦ひの実感によつて確保される。吾人は常に死地に身をさらしてこそ生命の実感を体感する。（中略）而して、我々が生死の世界を実感する事それが思想生活であ

る」。フィルムは、日中戦争のさなかにあつて、身近に戦地に動員される者を見送りながら、国の将来と自分の生き方を考へねばならなかつた当時の学生達の顔を映し出してゐる。大学が享樂的な青春を謳歌する場になつた今日、私達は、彼らの真剣な表情をどう理解すればいいのだらうか。田所先輩は「生死の世界を実感する事それが思想生活である」と言はれたが、思ふに、戦争が終はり、経済大国としての繁栄を享受してゐる現代にあつて、「平和」「自由」「国際化」といふ言葉を口にしながら、私達の中で最も鈍感になつてゐるのが「生死の世界を実感する事」ではないのか。

この年の六月に中国で起きた天安門事件は、民主化を求めて運動する学生達を戦車によつて流血排除するといふ、社会主義政権の残虐さを世に示した事件であつたが、この悲劇の中心が、祖国のために命を賭けて行動し、死んだ学生達の思ひにあつたことを忘れまい。それは松陰の「閩国の人は、閩国の為に死し、閩藩の人は閩藩の為に死し、臣は君の為に死し、子は父の為に死するの志確乎たらば、何ぞ諸蛮を畏れんや」といふ激しい言葉に通じるものがある。同年我が国において七月に行はれた参議院議員選挙は自民党の惨敗といふ結果をもたらしたが、政策論争を閑却し、「消費税撤廃」といふムード的なスローガンのもとに国政を左右する重要な選択が決されたことに、私達は重大な「錯誤」を感じないわけにゆかなかつたのである。昭和天皇の了闇も明けぬ当時、人々の関心と主張とは、あたかもマスコミの取

り上げるテーマに合はせて移り変はるやうに見えた。戦時中の若者の顔を思ひ浮べるなら、私達はまるで夢の中にあるのではないのか。物質的な豊かさや大量の情報を得た代りに、自らが「朝露の如きの命」を抱いてひとり生きてみるといふ緊張感を、見失ったのではないか。この緊張のないところに、「人生を如何に生きるべきか」といふ問ひが各人の根底から発せられることはないのである。

この年の秋以降、十一月十日のベルリンの壁消失に象徴される東欧変革の波は、まさに劇的と言へる速さでポーランド、ハンガリー、東独、ブルガリア、チェコそしてルーマニアに展開した。一国の政治体制が変へられることの重大さを考へたとき、これら東欧諸国の激変が「社会主義体制」そのものの崩壊を示してゐることは明白である。連日、新聞・テレビで伝へられる報道に触れながら、私達は自分が激動してゐる現代の世界にゐることを知らされ、またそれを実感をもつて知るべく心を向ける努力をしていったのである。

年明けて平成二年、私達は半年間の活動の集大成として、各地区の春期合宿の企画に入った。東京地区では、今一度松陰の文章をじっくりと輪読したいといふ声と、また東欧の情勢や年内に控えた大嘗祭等、いはゆる時事問題についての勉強をしてはどうかといふ案が出された。幕末の緊迫した情勢の中で生きてゐた松陰の遺文を読みながら、私達は自分自身の「いま」において自分を取り巻く様々な問題に対し、それらを実感をもつて捉へ直していく必要

を感じぬわけにゆかなかつたのである。以下に、神奈川県「七沢自然教室」において四泊五日間の日程で行はれた東京地区の春期合宿について、その内容を一部紹介したい。

開会式、所懐表明に続き、まづ二年生が中心になつて幕末の志士についての発表が行はれた。西郷隆盛・横井小楠、高杉晋作の遺文と生涯を辿る年表が参加者に配られ、松陰と同じ時代に生きた三人の生きざまに対する思ひが発表者によつて語られていつた。一日目の夜からの輪読では、『日本への回帰 第十三集』より、今林賢郁先輩（新日鉄㈱勤務）の「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり——吉田松陰の魂——」が取り上げられた。その文章の中で今林先輩は、松陰が安政の大獄の一環として江戸に尋問の呼び出しを受けた時、彼が弟子に与へた一文を紹介されて、

「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。

吾れ学問二十年、齡亦而立なり、然れども未だ能く斯の一語を解する能はず。

今ここに關左の行、願はくは身を以つて之れを驗さん。乃ち死生の大事の若きは、姑くこれを置く。

（中略）『身を以つて之れを驗さん』とは、道を求めることに学問の根幹を置いた人の白熱的表現であると思ひます。吉田松陰にとつて、学問と生き方とは決して別物ではなかつた。だからこそ、死に身をさらしても実験しようといふ覚悟が生まれるのです。その結果が、生

か死か、それはわからない。今必要なのは『斯の一語を解する』ために『身を以つて』試みることだ」と松陰の思ひを偲ばれてゐる。かういふ松陰の厳しい生き方を語られる文章に参加者は触れていつたのである。

合宿三日目の朝には、国武忠彦先生（神奈川県立金井高校教頭）の御講義があつた。国武先生は、前年からの社会主義が崩壊してゆく現状の中で、私達がイデオロギーといふものについてどう考へてゆくべきかを話してゆかれた。先生は、「イデオロギーは人間を奉仕させるものだ」と言はれ、マルキシズムは日本の知識人を長年支配してきたが、その全盛であつた昭和初期に、文芸批評の分野から敢然たる抵抗を示した人物として小林秀雄を挙げられた。そして「小林秀雄にとつて、イデオロギーはものを直に見る目を曇らせるものでしかなかつた。言葉にはそれ自身歴史の重みのかかつた美しい姿があると考へ、言葉と歴史を大切にした小林氏は、安易な立場に立つことなく、対象に直にぶつかつて、身ぶり手ぶりのたうち回るやうな努力の末に言葉で表現した人だつたのです」と語られた。

そして四日目には、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生による大嘗祭についての御講義がなされた。先生はまづ皇位継承儀式について詳しく説明されていつた。そして大嘗祭において、天皇が神様の御霊の前でひれ伏され拜される「祭」と、国民に向かはれて御言葉をとたまはれる「政」とでは、天皇の御姿勢、御行為はその方向において正反対であられるが、

東京信和会春季合宿日程表

	3月16日(金) 第1日	3月17日(土) 第2日	3月18日(日) 第3日	3月19日(月) 第4日	3月20日(火) 第5日
7:00		起 床	起 床	起 床	
8:00		朝の集ひ	朝の集ひ	朝の集ひ	
		朝 食	朝 食	朝 食	起 床
9:00		輪 読 「日本への 回 帰」	国武先生 講 義 (質疑応答)	班別輪読 『聖徳太子の 信仰思想と日 本文化創製』	朝の集ひ 朝 食
10:00			班別討論 レジュメ輪読	大嘗祭につ いての資料輪読	全体感想 発表
11:00					感想文執筆
12:00	入 所 社 食	社 食	社 食	社 食	社 食
1:00	開 会 式				
2:00	自己紹介	班 別 討 論	レクリエーション 阿夫利方面	小田村先生 講 義 「大嘗祭に ついて」	新入勧誘につ いての話し合ひ 閉 会 式
3:00	学生発表	「松陰と刀」 ビデオ鑑賞			清 退 掃 所
4:00	幕 末 の 志 士 に つ い て	輪 読 『講孟簡記』		班別討論	
5:00			短歌創作	短歌相 互 批 評	
6:00					
7:00	夕食・入浴	夕食・入浴	夕食・入浴	夕食・入浴	
8:00			聖徳太子の御 思想と日本文化 創製 藤井貞先業・ 北浜道先業発表 長内先生講義	短 歌 相 互 批 評	
9:00	輪 読 「日本への 回 帰」	輪 読 「講孟簡記」			
10:00			輪 読	夜の集ひ	
11:00	就 寝	就 寝	就 寝		
12:00					

しかしこの御心は「国民の幸福を願はれる」といふ点で一つのものであり、ここにおいて祭政一致の原理原則を示されることが大嘗祭の究極的なポイントであるとされ、また「政教分離」を盾にして大嘗祭を批判する意見に対して、「政教分離」を規定した憲法第二十条の裏へつて国民生活に不都合を生じさせる。」とした昭和五十二年の津地鎮祭訴訟の最高裁判決文を取り上げて批判され、「大切なことは、大嘗祭を大切と思ふ心がどうしたら我々の中に甦るのかといふことです」と語られた。そして、「大嘗祭とは、我々の生きてゐる社会環境の中に、祖先や国を守つた人の御霊が今なほ生きてゐると感じることが出来るかを確認する儀式である」とされ、「物質的な理解の外にある御魂や霊性等の価値を理解する、さういふ民族の伝統の中に我々は生きてゐるのであり、それを抜きに、天皇制を政治システムとしてのみ捉へるのは低次元の思想であることを自覚していきませう。自分のことは二の次にして国と民の安らぎを祈られるといふ御心から現れる御姿は、親が子に子が親に向かふ姿とも共通するし、敬ふとか畏れつつしむことなくしては自分自身の進歩がないと気づいてゐる日本人の知性は、一つの和の中にあると思ふ。我々自身は、歴史伝統の中に素晴らしいものを感じたら、それを大切に敬つていかうではありませんか」と語られたのであつた。この後合宿では参加者の短歌の相互批評がなされ、最終日には各々の感想を述べ合ひ、春から積極的に新入生勸

誘を行ふことを確認して合宿地を後にしたのである。

また福岡地区ではこの時期、「太宰府探訪合宿」が二泊三日の日程で行はれた。そこではまづ、松陰と久坂玄瑞との間に交はされた往復書簡が輪読され、欧米の圧力によつて開国を強ひられてゐる日本にあつて、自分達は一体何をすべきなのかといふ問ひをぶつけ合つた二人の言葉に参加者は取り組んだ。翌日には、日比生哲也先輩（福岡県立玄界高校教諭）と矢永誠二先輩（福岡県立玄洋高校教諭）により、太宰府にゆかりのある菅原道真と三条実美についての御講義がなされ、また学生によつて『万葉集』から太宰府を詠んだ歌が選ばれて紹介された。参加者は二日目には宝満山に登り、その翌日には朝から太宰府周辺の史跡を巡つて散策した。参加者は、実際に太宰府の地を歩きながら、其処で生きてゐた過去の人を偲ぶ充實した時間を過ごしたのである。また、熊本地区でも三月二十日より二泊三日間の日程で、自然に触れて短歌を詠み、それを互ひに批評し合ふ「短歌合宿」が営まれたのであつた。

四月から私達は、新入生勧誘と合宿教室参加者の勧誘を各大学において展開していった。自分が生きてゐるこの現状に目を開き、生き方を問ふ力を得る為の勉強会は、新たな友人を迎へて小規模ながらも持たれていったのである。かうして私達は阿蘇での第三十五回合宿教室へと向かつていったのであつた。

		3月25日(日) 第1日	3月26日(月) 第2日	3月27日(火) 第3日	
福岡信和会春季合宿日程表	7:00	集 合 準 備 昼 食 開 会 式 自 己 紹 介 輪 読 夕 入 食 浴 輪 読 就 寝			
	8:00		起 床 朝 集 会 朝 食	起 床 朝 集 会 朝 食	
	9:00			九州ゆかりの萬 葉歌の紹介・発表 (学 生)	竈 門 神 社 ↓ 太 宰 府 天 満 宮
	10:00			[発 表] 菅原道真について (日比生哲也氏)	↓ 太 宰 府 駅
	11:00				↓ 下 大 利 駅
	12:00			昼 食	↓ 水 城 跡
	1:00				↓ 筑 前 国 分 寺
	2:00				↓ 太 宰 府 政 庁 跡
	3:00			宝 登 満 山 山	↓ 戒 壇 院
	4:00				↓ 観 世 音 寺
	5:00				↓ 岩 屋 城 跡
	6:00			夕 入 食 浴	↓ 太 宰 府 駅
7:00			↓ 16:00 解散		
8:00					
9:00					
10:00					
			夜 の 集 会		

合宿教室のあらまし

中央大学大学院文学研究科博士前期課程一年

土 井 郁 磨



第三十五回全国学生青年合宿教室は、平成二年八月五日から九日までの四泊五日間、阿蘇国立公園、阿蘇の司・ピラパークホテルにて開催された。合宿会場の建つ広大なカルデラはあざやかな緑の野に囲まれ、遙かに阿蘇五岳を望み、空気の澄んだ気持ちのよい地であった。合宿三日前には、その準備及び運営のため国民文化研究会会員数名と幹部学生十余名とが集合し、事前の合宿を行なった。一泊二日の短い日程ではあつたが、発表・討論・輪読を真剣に続けてゆく中で、全国から集ふ多くの学生と共に生活し、研鑽を積んでゆく心構へを整へていった。本合宿開催前日には色々な準備を進めたが、中でも朝の集ひが行なはれる広場には「あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな」との明治天皇御製を大書した幟が空高く立てられた。

合宿教室の参加者の内訳は以下の通りであつた。

（学生班 三十五大学）

拓殖大22、亜細亜大11、早稲田大11、鹿児島大10、九州大7、尚絅短大4、長崎大4、九州女子3、西南学院大3、中央大3、中村学園大3、尚絅大2、日本大2、福岡大2、防衛大2、大分大1、お茶の水女子大1、香川大1、神田外語学院1、熊本大1、国学院大1、駒澤大1、佐賀大1、實踐女子大1、星陵女子短大1、第一経済大1、千葉大1、帝塚山学院短大1、東京大1、同志社大1、東北学院大1、梅光女学院大1、広島大1、武蔵野服飾

美術専1。

計百九名（うち女子三十五名）

（社会人・教員班） 会社員 教員など。

計十七名

（招聘講師） 一名

（国民文化研究会） 六十九名

（事務局） 六名

（見学者） 一名

（写真） 一名

総計 二百四名

参加者は、合宿申込書のアンケートを基に七乃至八名を単位とする班に編成され、事前合宿参加学生及び国民文化研究会会員が班長となった。男子学生は十箇班、女子学生は五箇班、社会人は二箇班に分けられた。

第一日（八月五日）

〈開会式〉

午後二時、開会式を迎へ緊張した雰囲気の中、参加者は会場に整列した。そして、九州大
学法学部三年大瀬博幸君が開会を宣言し、第三十五回全国学生青年合宿教室は始まった。国
歌斉唱の後、戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられたすべての御霊に対し、
一分間の黙禱を捧げた。

続いて主催者を代表して、社団法人国民文化研究会理事長、小田村寅二郎先生が登壇され、
「この合宿教室では、学歴、年令の差を乗り越へて、一人の人間として思ふ存分語り合つてい
ただきたい」との開会の挨拶をされた。次いで早稲田大学政治経済学部四年鶴野光博君が参
加者学生を代表して「合宿ではいろいろな日程が組まれてゐますが、その中身を本当に作つ
ていくのは僕達です。本音を語り合ひこの合宿をお互ひに充実したものにしませう」と参加
者個々人に対し合宿への主体的取り組みを呼びかけた。

続くオリエンテーションでは、新日本製鐵(株)勤務、今林賢郁合宿運営委員長より、合宿の
運営体制、班構成などについて説明がなされた。そして、「真剣に周りの人の話を聞いた上
で、思ふ存分自分の言葉で語つて下さい」と合宿に臨む心構へを語られた。最後に福岡県立
玄洋高校教諭、矢永誠二指揮班長により、合宿全般に互る注意事項が伝えられた。この後、
参加者は、各自の班室に入り合宿参加の動機や日頃の生活ぶりを交へての自己紹介を行ひ、

8月6日(月) (第2日)	8月7日(火) (第3日)	8月8日(水) (第4日)	8月9日(木) (第5日)
—(起床)—	—(起床)—	—(起床)—	—(起床)—
朝食	朝食	朝食	朝食
(講義) 古部賢志氏	(講義) 作曲家 黛敏郎先生	「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」 輪読導入講義 広木寧氏	運営委員長所感 参加者による 全体感想自由発表
班別討論	質疑応答 全員写真撮影	班別輪読	感想文執筆及び 第2回短歌創作 班別討論
	班別討論		
昼食	昼食	昼食	閉会式
(講義) 小柳陽太郎先生	短歌創作導入講義 矢永誠二氏	(講義) 国文研理事長 小田村寅二郎先生	昼食・解散
映画鑑賞 「天皇陛下」	レクレーション 阿蘇山登山 短歌創作	自由時間	班別討論
自由時間		自由時間	
班別討論	夕入散 食浴歩	地区別懇談	創作短歌全体批評 青山直幸氏
夕入散 食浴歩		青年体験発表 須三栄氏 上村栄章氏	
班別討論 班別輪読	慰霊祭説明	班別 短歌相互批評	夜の集ひ
	慰霊祭執行		
就床	就床	夜の集ひ	就床
		就床	

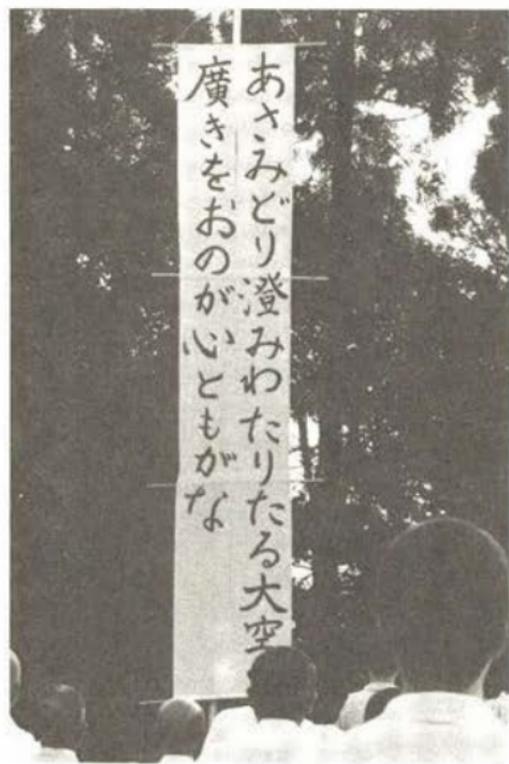
昨年の合宿教室のレポートである『日本への回帰―第二十五集』の輪読に入った。

〈講義〉

合宿導入講義として、神奈川県立湘南高校教諭・亜細亜大学非常勤講師、山内健生先生が「学は極りなき所に極り出来る也」と題して話された。俗流ジャーナリズムによる情報の偏りのため、我々は真実を知らされてゐないことに気付いて欲しいと語られた。その偏りの顕著な例をまづは元号の問題から検証してゆかれ、国際化時代には元号よりも西暦の方が合理的であるとの俗見に対し、西暦はあくまで基督教なる一宗教の暦に過ぎないといふ世界的常識

第三十五回「合宿教室」日程表

	8月5日(日) (第1日)	
6:30		
8:00		
9:00		
10:00		
11:00		
12:00		
1:00		
2:00	開会式・合宿趣旨 説明・諸注意伝達	
3:00	班別自己紹介 『日本への 回帰第25集』	
4:00	班別輪読	
5:00		
6:00	夕 入 散	食 浴 歩
7:00		
8:00	(合宿導入講義) 山内健生氏	
9:00	班別討論	
10:00	就 床	



〈班別討論〉

講義の後、全参加者は班室に戻り、最初の班別討論の時間に入った。それは各講義の後にほぼ毎回設けられてをり、講師の訴へられんとされたことはどのやうなことが、各々がどこに感銘を覚えたかを中心に討論が進められた。初めのうち、時には確証なき伝聞の知識の応

により批判された。続いて、占領下において制定された現行憲法の問題等にも触れられ、最後には「学は極りなき所に極り出来る也」「学は日々是学也」との山鹿素行の滋味ある言葉を引き、「学問は身近なところから始まります。日々に学んで大きく育つて下さい」と学問における要諦として、まづは身辺のことを疎かにしない心持ちを親しく語りかけられた。

酬に終始したり、講義に対する部分的誤解による反発から独善的な感情論に止まる場合もあつたやうである。しかし、一人一人の心の中では自分の感情を思ふやうに言葉にできないもどかしさや、人に思ひの通じない苛立ちを感じながら、皆で心を一つにして語ることの困難さを噛みしめてゐたのではあるまいか。さうした苦悶を経て、意見の衝突、反論を繰返しながらも次第に真剣な態度で班員の意見に接するやうになり、言葉を詰まらせ語る友の一語一語にしつと聞き入る姿もみられるやうになつたのである。友の言葉に感じ入り、自分の言葉でそれに応へやうとするそのときには、互ひがおのづから言葉を交はし語り合へるといふ心の拡がる思ひに我知らず浸つてゐたのではあるまいか。やがては、心を開いて語らふ喜びを率直に言葉にする者もあらはれるに至つたのである。

第二日（八月六日）

合宿参加者は、毎朝六時半に各班室に流れるすがすがしい「日本唱歌」の音楽により、目覚める。洗顔と清掃を急いですませた参加者は、阿蘇五岳を望む広場に集合し、「朝の集ひ」が行はれる。国歌斉唱、国旗掲揚、ラジオ体操、連絡事項の伝達等がなされ、今日一日を過ごす心の準備が整へられていつた。

〈講義〉

午前中には、福岡県立福岡中央高校教諭の占部賢志先生が「ロシアと廣瀬武夫―清く、直く、温かく、しかも力あり―」と題して話された。先生は日露開戦当初に旅順港閉塞作戦で壮烈な戦死を遂げた、軍神廣瀬中佐の生涯を中佐の日記、手記そして書簡などから辿つてゆかれた。それらの言葉の中から、有能な軍人で武骨一筋であつた中佐が、ロシア留学中の様々な人との交流や肉親との別れに接し、周りの人々に細かな心配りをみせるやうに成長していったさまを感動的に語つてゆかれた。

〈講義〉

午後からは、九州造形短期大学教授の小柳陽太郎先生が、「今上天皇の御歌」と題して話された。昨年八月四日の記者会見の席上、天皇陛下は「天皇は憲法に従ふ立場があるので憲法に対する論議は慎みたい」と仰せられたにもかかはらず、翌日の新聞は護憲宣言との印象をもつてその模様を報じた。さらに昭和天皇を始め歴代天皇の守つてこられた皇室の伝統を尊重するとの言葉に至つては、多くのマスコミに無視されて伝へられなかつた。かうしたジャーナリズムの情報操作に対し、先生は陛下の御製を一首一首詠まれながら、御製から大

御心をお慰びする重要性を訴へられた。また先の戦争に於いて激戦の地となつた沖縄に古くから伝はる琉歌を、今上天皇が学ばれたことに触れられ、国民一人一人の中へ入つて行かうとなさる御姿を慰ばれた。最後に昭和天皇の終戦時の御製を拝しながら「天皇が国民のことを詠まれ、国民が天皇の御心に随順する。これが国柄ではないか。日本の歴史はこの国民の努力によつて支へられてきた」ことを切に訴へられた。

〈映画「天皇陛下」〉

映画では、天皇陛下の御生涯がその折々の御製と共に映しだされ、我々国民を思はれる大御心に一同は深く感動した。殊に当時皇太子であられた沖縄御訪問の際には、反対運動の中たとへ石を投げられてもとのお思ひで臨まれたといふ。さうした悲壯な御決意の両陛下がひめゆりの塔にて哀悼の意を表せられてゐたその時、こともあらうに火災ピンを投げつけるといふ許しがたい暴挙が起こつた。陛下ご自身危機一髪の状態であられたにもかかわらず、実にスクリーンには、かたはらにゐた方をご心配なされ、お声をかけられてゐるお姿が映されてゐたのだつた。そして両陛下は引き続きの御予定をもお疲れをもともされず滞りなくこなされ、しかも周囲の関係者を親しく労はれてをられたのである。その凜然たる御態度を拝し我々は心中深く崇敬の念を抱いたのであつた。

第三日（八月七日）

〈講義〉

三日目はまづ作曲家の黛敏郎先生に「日本文化と天皇」と題してお話をいただいた。「日本人として生き、死んでゆく私達は、好むと好まざるとに關はず、自分を把握するに當つて国體觀を持つてゐなければならぬ。日本の国體と他國のそれを區別する唯一の拠り所となるものは天皇の御存在である」と自國民としての認識を深める場合、皇室の御存在に思ひを致す必要性を先生は諄々と説かれていつた。文化概念としての天皇の御存在について「天皇は現存する他の國王と違ひ祭祀王であられ、國民を代表して作物の豊穰を天に祈られる御存在である」と規定された上で、大嘗祭等の皇室儀禮について、よどみなき明快な説明をされた。そして「收穫を神に感謝し國民と喜ぶ儀式は、古代では普遍的なことであつたが、それが今に皇位繼承儀禮として受け継がれているのは、日本の皇室だけである」と大嘗祭等の世界的意義に言及された後、「御代始めのこの時に當り、三千年にも亙る皇室の歴史・文化を、古領軍による現在の憲法によつて変へられてしまふやうなことがあるれば、悔いを千載に残すことになる。」と世紀の過ちのなきことを願はれつつ、御講義を終へられた。



〈短歌導入講義・レクリエーション〉

午後からは、福岡県立玄洋高校教諭の矢永誠二先生が短歌創作の手引きとして御講義された。「この三日間友の心を偲び、自分の感動を見つめ直す中で、全員が短歌を作る対象が見えてきてゐると思ひます」と初めて短歌を作る人々を励まされた後、「真心から発せられるものは、必ず人に伝はる」と自分の感動を言葉にする努力を促された。

御講義の後、参加者はバスに分乗して、阿蘇中岳へと出発した。幸い好天にも恵まれ、途中バスの中からではあつたが、広々とした草千里を眺めたり、中岳頂上では、噴煙湧き上がる火口を見物できた。合宿はホテル内での活動が主であるので、班員と野外で過ごす時間は格別に解放感あるものだった。ホテルに帰着後、参加者全員短歌を創作し、夕食前後に提出した。

へ体験を語る

最初に、福岡県立須恵高校教諭の那須三元氏が登壇され、「古典を輪読して先人の言葉を味はふことで、自分の拠り所が与へられた」体験を語られ、「私達はこの様な古典を通し自分自身の生き方や考へ方を掴んでいけると思ひます」と話され聖徳太子の御歌や吉田松陰の講孟餘話の文章を紹介された。

次いで登壇された日本油脂(株)勤務の上村栄章氏は、「学問に励むとは、万人の苦しみ悲しみを自分の心の中に人一倍敏感に受けとめ得るやうに自分の心を鍛へること」との小田村寅二郎先生の言葉を生活の指針にしようとして、その言葉を最近痛切に思ひ返した経験として、病床の御尊父との触れ合ひと、同じく病に倒れた母を思つて詠んだ友人の歌を紹介された。その交流により「自分は一人で生きてゐるのではないと実感」され、そこで交はされた言葉からは、「忙しい仕事をなんとか乗り越へようといふ勇気が湧いてくる」と語られた。

へ慰霊祭

まづ北九州市立八幡病院に勤務されてゐる森田仁士氏より慰霊祭の説明が行はれた。その後屋外の広場に設置された祭壇の前に全員が整列した。まづお祓ひに代へて、故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさね
まもるやまとしまねを

の和歌朗詠により慰霊祭は始められた。

次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられた総ての御霊を最敬礼でお迎へする、降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して、寶邊正久先生が祭文を奏上、明治天皇・昭和天皇の御製を松吉基順先生が拝誦された。続いて玉串奉奠の後、全員で「海ゆかば」を斉唱、最後に昇神の儀が行なはれ、徹饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は終わった。左に慰霊祭における祭文と拝誦された御製を記して置く。

〈祭文〉



炎熱の日はかくろひ草原にそよ風吹きて、ここ阿蘇の野にわれら第三十五回全国学生青年合宿教室を営むものら、奇し火噴き立つ地熱畏みその山裾の清しき広野を齋庭と定めまつりてとこしへに国守ります遠つみ祖達をはじめ国のためにいのちを捧げ給ひてわれらが祖国日本を守りまししもろものはらから達のみたまを招きまつりてみたま祭りを仕へまつらむとす。

いぬる年、昭和天皇神去り給ひ、今上天皇御位を踐ませ給ふ折しもや欧州諸国の変動起りて全世界に波及しつつ地上に生くる者その扱ふべき方をさだめむと思ひを潜むる世とはなりぬ。われらいま今の世を感じ考へ互ひに心を語る友を得むとこの集ひに加はりて全日程の半ばに至りしを、ある時は気付かざる用語を正し、ある時は一軍人の生涯に生きたる心と時代を偲び、また今上天皇の御製に天皇の御心をたづね、また來るべき大嘗祭に伝統文化を守る意味の厳肅さを目覚めしめられつつ心あはせてこの集ひを過ごし來れるさまを畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひみ国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り謹み敬ひ恐み恐みも白す

(明治天皇御製)

をりにふれたる

はからずも夜をふかしけりくのためいのちをすてし人をかぞへて

述懐

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめねざめに世をおもふかな

秋夕

国のためうせにし人を思ふなくなれゆく秋の空をながめて

蟲聲

さまざまの蟲の聲にもしられけりいきとしいけるもののおもひは

紅葉

うつろひて散らむとすなるもみち葉をうつくしとのみ思ひけるかな

（昭和天皇御製）

社頭寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

佐渡の宿にて

ほととぎすゆふべききつつこの島にいにしへ思へば胸せまりくる

稚内公園にて

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

祭り

わが庭の宮居みやゐに祭る神々に世のたひらぎをいのる朝々

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

第四日（八月八日）

〈輪読導入講義〉

合宿四日目は金文図書出版販売㈱に勤務してをられる廣木寧先生が、「黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に就いて」と題されて輪読導入講義をされた。先生は「親父師友みなひとたび別れては再びあひ得ぬこの世のことに悲痛動乱の生を味はされ申候。それにつけても同心海中につながせて頂き度念じ候」との黒上先生が御祖父を亡くされた時の書簡を紹介された。黒上先生はここで「人は誰もが悲痛動乱の人生にあり、だからこそ同じ信の下に繁がつてゆけるのではないか」との確信を語られてゐると先生は述べられた。黒上先生は僅か三十一歳の御生涯であつたが、特に聖徳太子については寢食を忘れて勉強をなされ、まさに学に殉ぜられたやうなお方であり、また師友に篤い友情を寄せ続けられた方

だつたといふ。人はつまる所孤独な存在であるが、先生は「かういふ人の思ひが、個々のさびしい悲痛動乱の人生に橋をかけて呉れるのではないか」と切々と語られた。

黒上先生はご自身の心血を注がれた太子研究について一高生に親しく言ひ送られることがあつたといふ。先生はかうした御手紙の文章と数々の論文中の文言とが同様であられた点を指摘され、この黒上先生の日常生活と学問とに間を置かぬ御姿勢に注意を促された。その黒上先生の御態度は、自らの人生と区々たる専門的学問との間に遊離を感じざるを得ぬ今日の我々にとってきはめて印象的なものであつた。

〈輪読〉

この時間は、廣木先生の示された『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の数箇所の文章の輪読を行



なつた。文語体に日頃親しんでゐない今日の学生にとつては、当初は言葉の意味を確認し、その論理の脈絡を追うのが精一杯であつた。そのため著者の情意に迫ることができず、ともすれば重々しい沈黙の時間が続いた。しかし、何度となく声に出して音読するうちに、様々な内容を含みながらも、きはめて引き締まつた感のする文章の抑揚に魅せられてゆき、我知らず端然とした姿勢で文章に向かつてゐたのだつた。著者の思ひを汲み取るやうな段階には進めなかつたものの、文意を正確に取るやう全員で真剣に取り組むといふ貴重な時を過ごせたのではあるまいか。

〈講義〉

午後からは、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が登壇され、「われらが祖国・日本を真の独立国に立て直すには」と題されて御講義をいただいた。先生はまづ「現在の日本の教育・学問の一般的傾向は、祖国日本のすばらしい歴史・伝統について、かなり自信を無くしてゐる」と指摘され、その主因として、占領時GHQにより続々と下された指令の裏に存在した日本の文化伝統を根底から否定しようとする意図を挙げられた。そして占領の歴史を具体的に「追体験」することを我々に求められた。占領政策に呪縛されてゐる具体例として、即位の御大典に関する体を失したマスコミの報道姿勢に言及され、「古代ゆかしい伝統形態に

対して慎みの心を欠」いてゐると先生は深く憂慮された。フィヒテは自国が仏軍により占領された時、独逸国民に母国語を守ることを訴へた。先生は彼の演説を今思ひ起こす必要を説かれ、「言語を守るところに国を守るもとゐ」があり、「残された言葉により国の姿を感じ」取り、真実の国の歴史を追体験する努力を国民一人びとりが積むならば、占領政治を「終結」させる国民側の足並みが揃ふ。そしてその「占領政治終結」により「みちがへるやうな美しい日本に生まれかはる」と、我々個々の奮起を促されたのであつた。

〈短歌全体批評・班別相互批評〉

前日提出した短歌は、先生方や事務局の夜を徹しての作業により、一冊の歌稿に纏められた。そして全員の手に渡つた歌稿をもとに戸田建設(株)に勤務されてゐる青山直幸先生が創作短歌全体批評を行はれた。先生は参加者の歌を各班から取り上げられ、作者の思ひを細やかに推し量りながら、作者の実際に見た情景に合ふやうに言葉を慎重に選ばれて添削・批評をしてゆかれた。参加者は、自分達の班から歌が選ばれる段になると、誰の歌が選ばれるかはらはらしながら御話に聴き入つてゐた。この夜、それぞれは班室に戻り、班員一人一人の歌を全員で読み味はひながら相互に言葉を交はしあつた。歌を通して心情を披瀝し合ひ、共に具体的な思情を辿ることは恥ずかしくもあるが、また嬉しくもあることだつたのであらう、

夜が更けるまで語り合ふ班が多く見られたのである。

〈夜の集ひ〉

最後の夜を迎へ、緊張した時間を過ごしてきた一同は、広間に繰りひろげられた夜の宴にしぼし疲れも忘れ、和やかな心地を味はった。班毎、大学毎、地区毎などの様々なグループが次々に登場し、歌あり、寸劇ありで、その時は笑ひと拍手の連続であった。

第五日目（八月九日）

〈運営委員長所感発表・全体感想自由発表〉

閉会式も間近に迫り合宿教室を通して各自の所感を全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間となった。始めに合宿教室運営委員長、今林賢



郁氏より次のやうな所感が発表された。「この合宿教室を通して皆さんは相手の言葉を正確に聴き、自分の思ひを正確に語ることが学問の基本姿勢なのだといふことに気付かれたはずです」と語られた後、「『日本人とは一体何か』と問はれたら、『それは僕だ』と言へるやうに僕はなりたいものです。その為に日本といふものを考へる糸口だけは提供しました。後は皆様がそれを自分で考へ、自分の言葉で語れるやう努めて下さい」とお話を結ばれた。

続いて、参加者の感想自由発表の時間となつた。参加の動機はそれぞれ違つても、この五日間寝食を共にし、友の言葉に、そして先人の言葉に心を寄せ合つた体験は、各自の心にしつかりと刻み込まれたに違ひあるまい。一人の学生がこみあげる思ひのままに登壇して発表し始めると、一人又一人と次々と壇上に立ち、心情を披瀝していつた。その言葉を今拾つてゆくと、「和歌相互批評では、本気で歌を詠むと相手の心と通ひ合ひ和歌を作るのが楽しくなつた」「自分の心を言葉で言ひ表せた時は言ひやうもなくなつてしまつた」「自分の言葉で語つた人の真心を感じられた」「班友の温かな心で胸襟を開いて語り合へた」「班友との付き合ひは時々苦しいこともあつたが、自分と相手の気持ちを通じ合へたのは相手の心を偲ぼうとした時であつた」「小さな勇氣を持つて友達作りをしてゆかう」等々、時には涙を浮かべ、時には笑顔で心からの思ひを率直に語る彼らの真摯な姿は、実にすがすがしく、感動的であつた。

〈閉会式〉

全参加者が尽力して事にあたったこの合宿教室もいよいよ閉会式を迎えた。先ず全員で二度国歌を斉唱した後、参加学生を代表して九州大学法学部四年の三沢茂美君が「この合宿教室を通じて色々学ばれたと思ひますが、私は占部先輩が紹介された廣瀬中佐が父君の訃報に際し、悲しみの中にあつたつ、お母さまや使用人にまで心を働かせた中佐の文章に接し、自分も人の悲しみのわかる豊かな人になりたいと思つた。合宿を通して心に残つたことや言葉を心に留め、今後もお互ひ励まし合ひながら学んでいきませう」と挨拶した。

続いて主催者を代表して、国民文化研究会事務局長の長内俊平先生が「我々の血の中には祖先の血が赤々と流れてゐることに気付いて欲しい」と語られた後、「志は一度立てたからといつて、変はらないも



のではありません」と話され、お孫さんから合宿地の先生の許に届いたお手紙を紹介されながら「この一通の手紙がどれだけ私の励みとなつたかわかりません。皆様もどうか二人ない友達に手紙を出して志を励まし合つて下さい。私達は素直な一人一人の言葉にこの合宿を続けてゆく勇気を与へられたことを感謝します」と語られ閉会の挨拶とされた。

その後全員で「進めこの道」を斉唱し、亜細亜大学経済学部三年の茅野輝章君の「閉会宣言」が会場一杯に響き渡り、合宿教室全日程は終了した。

式の後、ロビーで、あるひは班室で、お互ひに別れを惜しむ姿が見受けられた。新しい友情の芽生えた我々は、来年の再会を約して、それぞれ阿蘇の山を下りたのであった。

合
宿
詠
草



阿蘇山

△学生・社会人▽

あなうれし一年ぶりに再会する先輩の顔に笑みのあふるる
早稲田大 社二年 村瀬 廣二

○ 占部先生の御講義を聞いて
千葉大 工三年 中富 仁

祖国よりはるか南の海上で病に倒れし兵士やあはれ
マリアの熱に耐へつつ釣床に上り下りする苦痛やいかに

○ しずみゆく船内くまなく三度まで兵曹長をさがせし中佐よ
中央大 聴講生 三林 浩行

映画「天皇陛下」拝観

○ 祈らるる殿下に向けて突然に火炎ビン放りぐる者あり
九州大 法三年 三沢 茂美
御身をばかへりみずして案内せし婦人を案じたまふ大御心はも

幼くも国思はるるみこころをしのびまつれば涙あふるる
鹿児島大 農一年 古川 小山合

○
阿蘇登山の折に

初めての阿蘇の登山に心はづむ山の緑の鮮やかにして
秋場 良司
(株)ピコイ勤務

霧かかり見るをえざりし米塚を晴れし今日の日あざやかに見つ
梅光女学院大 文三年 倉本 由紀子

バスの前尾を振りながら悠々と行く赤牛もまたおもしろし
拓殖大 外一年 稲垣 達也

きりたてる火口の底の深きより白き煙の湧き上がりくる
亜細亜大 経二年 福富 賢介

語り合ふ友の心にふれしとき素直になりゆく吾に気づけり
実践女子大 文二年 大越 淳子

率直におのが疑問を語りくる後輩としの目まなこをゆめ忘るまじ

重細 重大 経営三年 佐藤 順一郎

友らみな心開きて語り合ひ厳しき言葉もうれしかりけり
拓殖 大外一年 松本 幸恵

時忘れ友と語りて気がつけば一番鶏の鳴く声聞こゆ
早稲田 大教一年 真庭 宜幸

すみわたる阿蘇のみ空のごとくある友のこころにわがこころ寄す
長崎 大医一年 合原 陽子

○

聖徳太子の本の輪読

み友らと声を合はせて言の葉を味はひながら読むぞ楽しき

○

熊本 大法四年 平田 裕英

佐賀 大理工四年 白木 潤

占領の事を語らるる先生の我等へ託さるる願ひ深しも

熊本県岱明中学勤務 山方 登美子
日の本の伝統語りし師のみ言葉我が胸ぬちにつよく響けり

○
短歌創作・相互批評の折に

鹿兕島大 農四年 山内 聡子

消しては書き消しては書きて歌つくる友の姿のほほゑましきかな

亜細亜大 経一年 濱田 雄一

わが詠みしつたなき短歌を夜更けまで師とみ友らは直してくれぬ

長崎大 教三年 早田 直美

わがうたを心合はせてともどちの直したまひし心ありがたし

早稲田大 文三年 大島 伸一

班友のこと詠める歌々書き添へてはるか阿蘇より親へ便りす

夜の集ひにて

学友と声高らかに歌ひたる応援歌の音に胸の高鳴る

拓殖大 外四年 鎌田淳一

劇終はり心ふるへて挨拶せばみなの手拍子に胸なでおろす

西南学院大 商一年 黒木礼子

白井先生の笛の音を聞きて

塾講師 松岡智子

師の君の深きまごころのこもりたる笛の音ききて涙あふるる



全体感想自由発表にて

九州女子大 文三年 坂元麻子

あふるる思ひ語らむとして手をあげて壇上に向かふ時胸は高鳴る

鹿児島大 法文一年 岩川ちなみ

次こそと思ひし時に友の手の高く挙がりぬ一瞬早く

防衛大 理系一年 白井亮治
涙して君の語らるる真心を思ひとどめん我が胸内に

お茶の水女子大 文一年 栗山敦子
壇上の友の語るを聞きながら涙こぼれぬ心うたれて

厚木市役所勤務 高橋武男
若きらが心の底ゆ語ります言葉に感ずる明日の日本を

○
国学院大 文二年 森川弘樹
合宿を終へて

阿蘇の地に四泊五日を共にせし友らと別れることぞ悲しき

神田外語学院 英一年 古川文子
真心を開き話したる班友との一年後の再会を願ふ

尚綱短大 家一年 長友桜子
良き友を得し喜びを胸にして学びゆかむと心に思ふ

岐阜県掛妻中学校勤務 川村吉司
朝夕を共に語りし同輩を別れ惜しみつつ阿蘇をあとにす

〈大学教官有志協議会・国民文化研究会〉

国民文化研究会理事長

小田村 寅二郎

三十あまり五つの集ひをみ友らと重ねてわれは七十まり七つ
四十あまり三つの歳かも霧島のみ山への宿にて開きし初回は
若きらも四十路五十路と齡をば重ねたまひぬ一筋の道に
かたじけなき思ひしじなりみ友らのあつきみなさけかがふり生き来て
こののちもはげみてゆかな若きらとひた走りゆく道のかたへに

元榎日特金属工業常務取締役

加納 祐 五

はらからのあつきいたつきかかふりて学びのつどひ終るうれしき
こころかたむけ語りしく日おもひつついまわかれゆく西に東に
西東わかれすむともけふの日をおもはばこころつながりてあらむ
よしゑやし目に見えずともまことのいのちここにうまるとわれら信ぜむ

班別討論に加はりて

新しき友にいま会ふと班室の扉ひらけば心をどるも

坐りたる座布団を直ちに我にゆづる友の心のうれしかりけり

未だ見しらぬ友にはあれどなつかしきおもひあふれつ時経るままに

奇しきえにしにつながる友よと若きらの面わを胸にきざみつ、見し

たまゆらにあひにしものをこのえにしかりそめならずとつしみ思はむ

九州女子大学教授 山田輝彦

占部君の講義を聞きて

少年の日ゆしたひ来しいくさ神広瀬武夫はなつかしき人

ひとひらの肉片残し旅順口波間に消えしあはれますらを

波洗ふデッキめぐりて杉野呼ぶみこゑ真闇をつんざきにけむ

その昔小学校の学び舎にうたひし友よはや老いにけむ

プーシキンの心漢詩に託しつ、ロシア乙女に贈りましたしか

アリアズナ年十八の令嬢の花顔微笑の面輪うかびく

浪漫とはかくの如きか異国とくにの乙女恋ひつゝ、みいくさに死す

荒城の月の作者と軍神を生みし竹田の町の恋しき

明治てふ御代なつかしもかくのごと大いなる人さには生みたる

妻への便りに

国民文化研究会事務局長 長内俊平

むせかへる暑さなれども仰ぎみる阿蘇のみ山のみどりしるけし

夏の陽をあびて輝くみどり葉のそのしるけきを吾妹わが妹にもがも

今生のかたみとなりし阿蘇の地にわれ一人きてみ山に向ふ（青砥宏一兄のことを）

くれおそき夏の一日もひぐらしのなく音かなしくくれゆかむとす

日本銀行監事 小田村 四郎

中岳山麓に軍馬鎮魂碑あり 昭和十四年以降、北、中支、ビルマ、マレー半島を馳駆

してたふれたる山（野）砲兵三十七聯隊の軍馬一千四百四十五頭の霊を弔ふといふ

噴煙の毒気激しく中岳の火口ゆすぐに山を下りぬ

山麓に建てし軍馬の鎮魂碑を探しもとめて友と詣でぬ

鎮魂のいしぶみの上に座しませり金色輝く馬頭観音像

過ぎし日の大みいくさに大陸を駆けめぐりけむ馬を思ふも

子の如くいとしみし馬を弔ふといしぶみ建てし勇士の心よ

みいくさにいのち捧げし馬たちの魂鎮まらむこのいしぶみに

榊不動産コンサルタント代表取締役 松吉基順

なき加藤敏治大兄を偲びて

君逝きてはやひととせかこそ夏妹君訪ひて奥津城詣でし

在りし日に君つとめましし営みを妹はしぬびて阿蘇にきましぬ

阿蘇に集ひ語らひなごみし在りし日の君がゑまひをうつつに思ふ

空港に君送りくれしすきし日の阿蘇の集ひははるけくなりぬ

君がみ霊天翔けりまして大阿蘇のわれらが集ひ護りるまさむ

榊日商岩井大阪エネルギー第一部部長 澤部壽孫

バスの中で白井傳先生のご指導に合唱す

友皆とたからかに唱^{うた}ふ青山にとどけとばかり広瀬中佐を

師の君のはづむみ声のよろしくてふたたび唱へば心放たる
緑なす山広ごりてかすみたる阿蘇の国原夏盛りなり

航空自衛隊航空教育隊
村山壽彦

全体感想自由発表の折、白井傳先生の御話をお聞きして

表情はおだやかなれど祖国を思ふ熱きみこころの胸にせまりく
外国の軍艦の行きかふ島にあれば国の大事も身近なるらむ
戦争なき世とはなりても軍靴を大事にそなへみがきてありしと
先生のみ手に持たれし軍靴は新しきかに輝きて見ゆ
過ぎさりし戦ひの日の軍靴四十年を経ていままも輝く
齢召せど今なほ猛き心もて夷狄にそなふるみこころかしこし
平らけき世にはあれども日の本の大事にそなふる心ばへはや

㈱新日本製鉄機械・プラント事業部部長代理
今林賢郁

あらたなる友も迎へて今まさに合宿教室開かれんとす
きびしかること次々に起りたるこの一年の日々を思ひぬ

さはあれど友ら集ひて阿蘇の地に合宿教室開くうれしき

富山県立富山工業高校教諭 岸本 弘

十三年ぶりに合宿に参加して

なつかしき人らに会へば年月を隔てしことも忘れゆくなり
つひ昨日別れし人に会ふごとく言葉交はしゆく会ふ人ごとに
不思議にも思はるるなりおのづから合宿の中にとけこみてゆくは

榎戸田建設開発事業統括部 青山 直 幸

宝辺矢太郎兄と共に「創作短歌全体批評」の準備を夜を徹して行ひし折に
参加者が詠みたる歌は集められはやくも歌稿となりて届きぬ

歌稿開き歌詠みゆけばみ友らのくさぐさの思ひ伝はりにけり

美しき阿蘇の自然をこまやかに歌ひし友もいと多かりき

部下思ふ廣瀬中佐の生きざまに心打たれて歌ふ友あり

あまたなる歌をみ友と詠みゆけばいつしか夜は明けそめにけり

部屋内も明るくなりてやうやうにみ友らの歌読み終へにけり

夜を徹し手伝ひたまひし我が友のまごころひたに有難く思ふ

熊本県立球磨農業高校教諭 田之上 正明

天皇陛下（当時皇太子殿下）が沖縄を訪問なされた時（映画「天皇陛下」拝観）

すめらぎは石投げられても県民の中に入って行きたしと語りたまひぬ

ひめゆりの塔に花束捧げられ御霊を弔ふみ姿仰ぎぬ

火炎ビン投げつくる者ありたちまちに回りの様の騒然となりぬ

ひるまるるそぶりを見せずすめろぎは案内の人をきづかひたまひぬ

福岡県立山田高校教諭 與 島 誠 央

「閉会式」にて長内俊平先生の御話をお聞きして

まつすぐにわれら見つめて語らるる先生のお姿ひたに見つむる

孫娘のたびし手紙のひとふしに支へられしと読み上げたまふ

学生にまじりて笑ふおちいちゃんの姿思ふとすなほなる文

合宿の準備ゆ学生と共につとめます先生思へば泣かゆこの文

御話を聴くに涙はとどまらず大声あげて泣くをこらへつ

（那須三元選）

あとがき

合宿教室のレポートである本書のタイトルが「日本への回帰」と改められて以来、すでに今年で二十六回目の刊行を迎える。合宿終了後から凡そ半年間の編集を経て世に問ふわけだが、今般のレポートも昨夏の阿蘇に繰り広げられた諸講義及び発表の要旨を担当者によつて纏めていただいた。記して謝意を表したい。

さて、今日「国際化時代」の到来とその対応がのべつ唱へられ、人々の目はいかにも世界へ向かつて開かれてゐるかに見える。しかるに湾岸危機に対する貢献策の是非を論ずる国会やマスコミの実態は、結局のところ世界各国の逸早いイラク制裁行動に押されて終章狼狽してゐるのが現実ではないか。朝野に主唱されて来たわが国の「国際化」の内幕は、物の見事に露呈されてしまつた感が深い。

本書に冠した「日本への回帰」の意味するところは、もちろん世界の動向に背を向け、徒に孤立を助長することではない。それは、世界の有形無形の要請に対して鋭敏に反応し主体

的な提言と行動を力強く起こすためにも、わが国の真の姿を正確に知りたいと願ふ欲求にはかならない。世界の様々の個性を持つ国家群の中に己の顔を紛失した国が推参しようとしたところで、いつたい誰が「国際化」への対応として認めてくれよう。「日本への回帰」とは、すなはち自己を知ることであり、合宿教室はそのための青年学生によるささやかな相互研鑽の営みである。本書収録の諸講義を、その相互研鑽に際して投げかけられた問題提起としてお読みいただければ幸甚である。

なほ各講義の扉頁には、合宿地に因んで阿蘇に咲く草花の写真を掲げることにした。これらの写真については、阿蘇在住の写真家佐藤武之氏の著書『阿蘇の野の花Ⅰ』（西日本新聞社刊）から転載させていただいた。氏の御好意に対して厚くお礼申し上げます。

また本書巻頭の「はしがき」の執筆者について、ここに付言してをく。『日本への回帰』の前身『新しい学風を興すために』第一集（昭和三十八年刊）から第三集（昭和四十年刊）、さらに『日本への回帰』第一集（昭和四十一年刊）から第二十五集（平成二年刊）の三十年近くの間執筆を担当されたのは元福岡教育大学教授、現九州女子大学教授の山田輝彦先生である。この先生の筆になる「はしがき」は、その年々の重大な局面に対する異彩を放つ時務論として大きな示唆を与へられるものであった。ここに御紹介するとともに併せて先生の長い期間

に亘る御執筆に対し感謝申し上げたい。なほ今後は国文研の中堅世代が担当することとし、今回については、神奈川県立湘南高等学校教諭の山内健生氏に執筆いただいた。

さて、今夏迎へる合宿教室は八月七日（水）から十一日（日）までの四泊五日、神奈川県厚木市立「七沢自然教室」において開催されることとなつた。講師には評論家で杏林大学教授の田久保忠衛先生をお迎へすることに決定してゐる。全国の学生・青年諸君のご参加を願ひつつ編集の筆を擱く。

平成三年三月

編集委員 占部 賢志

—— 日本への回帰 ——

(第26集)

平成三年三月十日発行

定価 七〇〇円

〒 二一〇円

編者 大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小田村寅二郎

発行人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇—一八柳瀬ビル

振替(東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

